

導く力

―人類救済の核エネルギー―

長瀬 隆

永遠に女性的なるもの導きてわれらを高みに到らしむ

ゲーテ

目次

序	「第二の核時代」	3
1 章	被爆女性の良人	8
2 章	早大教授 松尾隆（木寺黎二）	30
3 章	樺太のヒロシマが導く	38
4 章	ドストエフスキーとアインシュタイン、マルクス	52
5 章	Love in Vienna（ウィーンでの愛）	72
6 章	トリウム熔融塩炉 FUJI	86
7 章	稀有なる真実	102
後記		114
索引	人名・事項	124
		128

序 「第二の核時代」

現代とは、原子核分裂現象が発見され、その際に発生する巨大な熱エネルギーが、アインシュタインの相対性原理（1905）によって計算できることになった「核エネルギーの時代」と見なすことができる。やがて第一次の、続いて第二次の世界大戦が起こり、これに基づく爆弾がナチス・ドイツによって製造使用されることを危惧した、米国亡命中の二人のユダヤ人物理学者がやはり亡命していた高名なアインシュタインに頼り、ルーズベルト大統領に爆弾製造を進言、容れられてその研究開発が始まった。その進言者の一人ウイグナーは、核エネルギーが発電にも利用できることは心得ていて、それが物質の化学変化によるものであることから、それまでの風力、水力、火力等々の物理力学的なものとは異なっており、その機械設備は化学プラントになると想定した。また使用する物質が放射能をもつウランであることから、炉の冷却に失敗し、爆発が起きた場合、核物質の飛散が生じ、苛酷な事故となると予見した。広島に投下された原子爆弾がまだ製造される以前のことである。この予言ははるかに後年、2011年3月11日、日本の福島原発で、そのものずばりの形で発生、実証されることになった。

ウイグナーは、ウラン濃縮による原爆製造のためにテネシー州の僻地オークリッジに秘密裏に作られた研究所の初代所長になったが、やがて弟子筋のワインバーグにそれを譲り、この人物が、戦後の冷戦の発生により、国の指示により原子力潜水艦の核エネルギー炉を設計する。燃料のウランは専門メーカーによって固形化され、冷却は海水によって行われるものである。しかし次の段階で着手されることになった陸上での公共の発電では、師のウイグナーに従って液体化を目指し、また燃料としてはウランとは異なっており放射能物質を出さず、したがって安全無害であり、運転操作も複雑ではなく簡便な、トリウムを用いた化学プラントを目指した。

こうした米国の核エネルギー発電研究に注目した若い日本人がいた。1928年生まれ、大分市佐賀関にあった金属のメッキ企業の工場長の嫡男で、幼少から化学者を目指していた古川和男である。敗戦時には熊本第五高等学校に在籍、勤労動員で体調を崩し、空襲下では自力では避難できず臥せていたという。すでに沖縄は落ち、南九州では米軍の次の上陸地点は日向灘と想定されていて、死を覚悟していたと記す。日本政府のポツダム宣言の受諾により、命が長らえたと信じ、しかしそれも、それを促したものとして広島、長崎の「身代わり」的な犠牲があったからだと考えていた。後に京大化学科を卒業して東北大金属研究所に入り、1959年留学中のロンドン大学で米オークリッジ研究所での熔融塩の名でよばれる液体炉の研究を知る。すなわち「核燃料を溶かし込む核反応媒体・反応

熱を運び出す熱輸送媒体・反応生成物を処理する化学処理媒体」の三機能すべてを果たす装置だった。古川和男は「この成功を信じ、この炉をライフワークに選んだ」。

オークリッジでの研究所は進展し、1960年実験炉MSRE (Molten-Salt Reactor Experiment)の建設が始まり、1965年臨界に達し、1969年まで事故皆無の二万六千時間の実績を収めた。古川和男は1968年にここを訪ね、これを自分の眼で確認している。

核分裂を起こすのは重い天然元素であって、これにはウランの92に対して二つ下のものにトリウム(Th)があり、兄貴格のウラン自身が放射能を有するだけではなく、また核分裂に際して同じく放射性物質であるプルトニウムを出す等、危険であって、そのために運転操作も複雑であるのに対し、このトリウムはそれらとはまったく無縁である。ウランの偏在・寡占とは反対に世界的に豊富であり、つまり経済的であり、地上の非軍事用の発電所としてはこの方が向いていた。

加えてその延長として消費地に近接して建設でき、また小型にすることができた。しかしプルトニウムを出さないという長所が、冷戦派とウラン鉱床の所有者にとっては許し難かったのであり、この勢力は結託して政治を動かし、1976年にオークリッジはその研究開発を禁じた。

米国の陸上の発電炉は、潜水艦の場合の延長として、普通の水を使用することから軽水炉と呼ばれるウラン使用の炉が、またただそれだけが排他的に選ばれ、それが全米で製造建設されることになった。これが後にスリーマイルで最初の原因事故を起こす。

米国は原爆から進んで水爆の実験を行うようになり、1954年太平洋ビキニ環礁での実験により、マグロ漁船第五福竜丸が被爆して帰港、これを機に、日本に水爆禁止の署名運動が起こる。やがてこれが先行していた広島・長崎の原爆体験と結びついて原水爆禁止の巨大な運動に発展、全国組織が発足、1955年には広島での原水禁世界大会を開催するに至る。組織は大会後に原水爆禁止日本協議会と名を改め、第二回の長崎、第三回の東京運動を持続発展させた。

これに大きく衝撃をうけた米国では、アイゼンハワーによって「原子力の平和利用」の提唱が行われる。そしてあたかも日本人の怒りをなだめ宥めすかのような日本への原産輸出の試みがなされるようになり、日本側からも心底に核武装を秘めた保守政治家がこれを歓迎し受け入れる。また原水爆禁止を叫んでいた勢力も、平和利用の美名に惑わされて、これを黙認・同調。疑惑をもって対したのはきわめて少数であって、この人々は、1977年の米スリーマイル島事故以降は、反・脱原発の立場に移行した。しかしその人々さえも、ウラン軽水炉を唯一の核エネルギー炉、すなわち原発と見なしていて、反対はこれに対するものであった。原発が安全でなければならぬのは当然であり、プルトニウムを産出しないことで、核廃絶に資するトリウム熔融塩炉が有ったことには、目が及ばなかった。

ワインバーグにとっては潜水艦の軽水炉は己の発明であり、それが上陸してきて折角の

MSREが禁圧されたのである。この結果1979年にスリーマイル島で事故が起こり、しかし苛酷事故はこれで終わるはずはなく、より大きなものが世界的規模で起こりうるのであって、軽水炉の発明者であった彼は重い憂鬱症におちいらすにはいなかった。やがて彼はこれを、ゲーテの『ファウスト』に登場する悪魔メフィストテレスの教唆によることに因んで「ファウストの買物」(「悪魔からの買物」とも訳しえよう)と罵るようになり、オークリッジ研究所所長を解任されることとなった。

挫折せしめられたワインバーグの構想を引き継ぎ、1980年、そのうちに有った「矛盾」を「解決」し、増殖炉AMSBを創り出したのがわが古川和男である。評価は早くかつ高く、翌1981年にはトリウム・エネルギー学術委員会が、茅誠司を会長に発足、二階堂進を会長に会員一〇八名の自民党トリウム利用推進議員懇話会が発足しているが、反対勢力勢力があつてこれに潰された。

米国はスリーマイル島事故後新規の原発の製造・建設は禁じられたが、日本の推進派はこれを奇貨として、輸入し、また後には自国でも製造するようになった。ワインバーグが言った「悪魔の(教唆による)買物」は日本でも猖獗をきわめたのである。この間にあつて古川の試みは泥中の一条の清流のごときものだった。すなわちトリウム熔融塩原子炉の完成形である単純小型密閉式熔融塩炉FUI(不二にして、富士であろう)を発明、この英文名で世界に宣伝、関心を示した諸国に出向き宣伝に努め、2001年には、一般むけとしては初めての啓蒙書『「原発」革命』を文春新書の一冊として出した。2008年にはNPO「トリウム熔融塩国際フォーラム」ITMSFを発足せしめ、2011年3月にはFUIの実現のための会社としてトリウム・テック・ソリューション(TTSと略称)を創った。

その直後に3・11があつたのである。

同年5月には先の新書本の増補改訂版である『原発安全革命』が「発想の全く違う「液体」「トリウム」「小型」この原発であればチェルノブイリも福島も起きなかった」の文言を帯に付し、これは新聞広告にも掲げられて発売された。

フクシマ後はムラと蔑視されることになった政官財学そしてマスコミにまで相わたつていた体制はわが世の春をうたつていたのであつて、「原発ルネッサンス」の語が飛び交つており、古川和男は日本を諦めて軸足を外国に移しかけていた。そのような時にフクシマ原発の事故が起こつたのであり、当時すでに癌に冒されていたにもかかわらず、精力的に講演会、座談・対談をこなし、それらにおいて「皆さん、トリウム熔融塩炉で世界と人類を救いましょう」を繰り返し絶叫しつつ、彼、古川は12月に他界した。八十四歳だった。

ところで原発および原発の「原」はatomであるが、原子は原子核と陽子から成り、核分裂はこのうちの原子核とのみ係わりがある。しかし爆弾を使用した陸軍がatomicと理解し、投下もこの語で公表され、世界に衝撃を与えたため、それがその後にはatomic energyの語にも影響することとなった。アイゼンハワーが「平和利用」を言ったのはatomic energyの語によって、であり、より正確なnuclearが一般に登場するのは1962年のキューバ

危機の時からである。しかしそれからいぶたつてからのリエンソールの著書の一つの表題は『Atomic Energy: A New Start』(1981)であり、同年の古川和男の翻訳では『岐路に立つ原子力』となっている。しかしその後世界的に nuclear が使用されるようになり、『「原発」革命』で古川は記すこととなった。

「私は「原子力」という言葉が嫌いである。なぜ「原子力」なのだろう。原子の関わる化学反応であるというのなら、まさに「化学力」である。「原子力エネルギー」などと言わずに、素直に「(原子)核エネルギー」と言えばいいではないか。「核」は核兵器を連想させるから嫌だと言う人がいるが、本末転倒である。正しい認識は、正しい用語から始まる。」

本の表題で原発が括弧で括られているのは、このためでもあった。そしてこの言葉は『原発安全革命』においてもそっくりそのまま継承されているのである。しかし表題では日本での通念にしたがって、あるいは出版社の意向によって、原発が括弧を外されて記された。

「原爆」のほうは、爆弾が核弾頭に代わってからは歴史的用語として残るだけとなった。しかし「原発」のほうは、国際的・世界的に nuclear であるにもかかわらず、日本ただ一国だけに「原発」の語が残っているのであり、奇怪なのである。かつこの語が、原発ムラ体制の住人であった人々が、ウラン軽水炉のみを意味すると捉えてきたのは明らかであるが、これを受けるようにして、反対もしくは脱原発の人々においても同様であることが問題だった。日本は特異な国であり、ガラパゴスと言われなければならない。

古川和男はこの状況を踏まえて、己のトリウム熔融塩炉の立つ位置を「第三の道」と定義した。しかし同時に、地球をふくむ宇宙そのものが核反応システムであること忘れず、核分裂でさえ天然現象であった時代があったことを、アフリカのガボン共和国での跡地の発見によって証言した。また同時に高速増殖炉もんじゅの試みが西欧中世の錬金術の試みと同じであることを、水銀を金には代ええないのに、その逆は可能であることを例として「神様はお茶目な方らしい」と皮肉った。

オークリッジ所長を解任され失意のうちにあったワインバーグに古川和男は広島行を勧めたと思われ、1991年それが実行される。そしてきわめて優れた文明批評である「ヒロシマの聖化」を含む全一五章の自伝『The First Nuclear Era』が執筆される。そのなかで彼は広島市の平和公園の鐘と同型ただし三倍の大きさの鐘楼を日本に発注し、それを

『international Friendship』の名をそえてオークリッジの公園に据えたことを記す。また人生の前半で「私はアメリカの核科学界の大統領だった」と回想する。しかし後半はそうではなかったのであって、その原因は、メフィストテレスの誘惑に負けて軽水炉造った自分自身に有ったと考えていたようである。しかしフリーベの愛称の熔融塩を発明したのであり、それはいずれ世界に広まるのであって、その時その過ちは償われるはずなのである。

かくて最終の「ファウストは名誉回復する」の名の節の結びには、劇詩『ファウスト』

の結びにある天使たちの合唱が添えられる。「倦まず励むものを、われらはかならず救うのである」。

失意にありながらワインバーグは、己の仕事を継承している古川和男には夢を託していた。プルトニウムを産しないことでアメリカでは葬られたMSREであるが、ヒロシマ・ナガサキを有する日本ではそういうことは無いだろうと期待された。

事情は古川も同じだったのであって、プルトニウムを生まない「原発」FUJIは日本では喜び迎えられるだろうと思っていた。しかし日本での「原発」推進者には将来の核武装のためにプルトニウムを必要と考えていた人々がいたのである。FUJI推挙のワインバーグの中曽根康弘首相宛ての親書には返信は出されなかった。

核エネルギーの意義を否定することは誤りと信じ、「第二の核時代の到来を信じて生涯を通じて闘ってきた」と告白しつつ、「残念なのは私がその日を見ることがないことだ」と著作の最後の最後の行に記し、06年ワインバーグは逝っている。

ドストエフスキーはその最晩年の長編小説『カラマーゾフの兄弟』の序文において、キリストの再来を念頭に置きつつ、主人公アレクセイについて「奇人」として紹介し、「奇人というものは、たいてい特殊で孤立的なものだ」と記しつつ、しかしその「奇人」こそが「全体の核心を自らの内部に宿し、逆に同時代の残りの人々が、ある風の吹きまわしによって、ひとり残らずなぜか一時この奇人に背を向けるといった場合がよく見られる」と書いた。キリストの場合、新約聖書によれば万人のために良かれと信じ、事実そうだった行動が支配者たちに忌避されてひとり孤立し十字架上で処刑されたわけで、後に復活し救済者として崇められることになった。古川和男の場合処刑されはしなかったが、社会的に認められずに亡くなっていて、私はその観点で、没後三年たった2014年に『トリウム原子炉革命——古川和男・ヒロシマからの出発』を著した。

それから六年、フクシマから数えて九年が経過した。

昨2019年9月6日、日本国経済産業省より4月の同省による「社会的要請に応える革新的な原子力技術開発支援事業」の公募（補助率75%）に対する審査結果が発表された。一四件が採択され、そのなかに熔融塩炉関係が三件あり、TTSが入っていた。他に一件がITMSF理事長の木下幹康が役員を務める同志的会社であった。同省がこれらのいうなればベンチャー企業に補助金を出すのは初めてのことであり、TTSはフクシマ以前から数えて政府機関に一〇回以上申請してきており、一度たりともヒアリングの段階までも行けなかったのであるから、画期的なことなのである。公報の全文は横書きでITMSFのホームページ (<http://msr21.fc2web.com>) に掲載してあるので見られたい。私はこれに先立って前作の続編として『導く力——救済の核エネルギーへ』三二〇枚を書き上げ、1959年以来の古い友人、物理学者の大槻義彦氏の解説をえて自身のホームページ上に掲載していた。すぐに活字にしようとしなかったのは、TTSが申請しているのを知っていて、その結果を待ちたかったからである。事と次第では内容に多少の変更が生ずる

かもしれないからだった。

フクシマ以降国内の原発はすべて操業中止になり、安全なトリウム熔融塩炉といえども新設は望むべくもなかった。TTSとしては現行の軽水炉のなかに特製の小型のトリウム熔融塩炉を挿入し、それによってプルトニウムその他の産出を抑える試みである R in R を思い立ち、日本に実験炉がないのでノルウェーでその実験を行い、私も先の著書で紹介していた。今は場所をかえ旧ソ連以来の施設をもつかザフスタンで行っている。世界中の原発が廃棄物の処理に困っており、完成した場合には世界中に売り出せるからだ。そのためわが経産省への申請も「熔融塩炉によるプルトニウムの消滅」の名でなされ、これが採択され、返済義務のないかなりの額の助成金が今後毎年得られることになったのである。最終目標のトリウム熔融塩炉 FUI は、これを大型（それでも現軽水炉よりはるかに小型）にするだけのことだから、まことに喜ばしいことである。

中国はフクシマ後確信をもってトリウム熔融塩炉に取り組むことになり、2020年には上海の炉が臨界に達し、二〇三〇年の商業炉が確実視されている。また米国、カナダで十四のベンチャー企業が政府によって助成されている。こうした国際的な高揚があり、日本の経産省も遅まきながら理解をしめすに至ったのである。TTSは他の二つの熔融塩炉関係の企業トリウム・テック・ソリュシオン TTS とともに講演会を企画しており、経産省はこれへの後援をも約束しているときく。

雑誌に連載はしたがまだ本にはなっていないものを一冊として加えるならば、九冊目となる続編的新作を、私は、ここによりやく世に問うことができるのである。

1章 被爆女性の良人

あなたは九州の大分市の生まれで、四歳年長の兄上がいた。1951年に二十七才でなくなっており、1959年にあなたに出会った私が会い見ることがなかった人である。

大分中学在校中から短歌を作り始めており、西北大文学部を目指していたが、同大には嫌いな軍事教練があるので、それが無いということで中央大法学部予科に進んだ。召集にあい宮崎市の部隊に配属されるも肺結核のために除隊となり、敗戦時には大分市中島の自宅にあったと聞く。一方あなたは大分県では名門の第一高女を卒業、当時はそれが普通だったと聞くが、親同士の話し合いですでに婚約が成立していて、しかし相手の商科大出身の陸軍経理将校が旧満州の部隊にあって、これが1945年7月に本土決戦のために広島

に移動。7月大分県で結婚式がおこなわれ、広島に移った。十日か二週間後に原爆に遭遇。

大分市はこの間に大空襲に遭い、1959年8月下旬あなたを訪ね初めて大分駅に降り立った私を迎え、中島の住宅街の細い道に入り自宅の前まで来て、「ここよ」と言い、道路の向かい側まで火がきたこと、しかし生家は焼けずに残ったのであって、「(身体の)弱い兄ちゃんが頑張って(バケツで)家に水をかけて」と笑いながら語ったものだった。原爆後自宅に戻ってから、当時の模様をのように聞いたのである。

敗戦後辛島正道は市内の結核療養所に入り、九州あららぎ会に属し、歌作に励み、四六〇首を残した。没後1953年に友人の鹿児島大教授渡辺外喜三郎氏によって、日記の一部を加えて歌集『花火』が制作発行された。そのうちの病床生活をうたった三首が講談社版昭和万葉集に収録されている。そのうちの見出しに選ばれた一首は――

貧しく病めばかたみに(互いに)狭く守るなり花あるベッド花なきベッド

しかし時期的にはこれらに先立ってつくられたものに、大分空襲を歌った数首がある。

ふるさとを焼き尽くしたる炎はやおとろへにつつ朝明けんとす

暁の雲は染みたり焼け残る吾が家の前に息つきて立つ

病人である二十一歳の青年は、家の類焼を防ぐために、夜を徹して木造二階建ての家の道に面した場所にバケツで水をかけたもののようである。「息つきて」に疲れはてたことが語られている。日が代わって彼は空襲による死者を見ている。

戦いはかかるものなり焼け跡の戸板に二つ幼子のむくろ

あなたの夫だった人の部隊は日本本土のどこかへの更なる移動が決まっていて、あなたはそれまでの日を過ごすべく広島に同行したもので、そのため下宿していた。経理大尉だった夫は、三度の食事は部隊でとり、就寝に帰って来るだけで、部隊の移動日が決まり、あなたは一足先に翌日の七日にはひとり大分市に列車で帰ることになっていた。その日、すなわち一九四五年八月六日の朝、夫を玄関に送り、二階の居間に戻り、持ち物をスーツケースに詰めていて、運んでこられた朝食をとろうして食卓に向い箸を取ったときに被爆している。強い光線が入ったのだ。

爆心地から一・三キロの木造家屋であり、爆風に吹き飛ばされ、地上に転落、着ていた長袖のセーターの焼け焦げる臭いで不快になり、「イヤ(嫌)、イヤ」という自分の声を聴きながら気絶から覚めた。袖に手をやると、セーターのその部分が崩れ落ちた、というこ

とだった。真夏だったのにセーターを着ていたことの理由は先に行って述べるだろう。言っておかねばならないのは、初めて、爆心地からの距離について尋ねた私の問いに、あなたは答えづらい間だったので、非常に低く小さな声で答えていて、私は一・八キロと誤って聞き、そう記憶していたことである。それから二十四年たった最初の作品、私が生まれ育った樺太（サハリン）を主題とした長編の作品のなかで、私は妻であるあなたを紹介しながらそのように誤記した。後に実は一・三キロだったことが判明し、その二年後に書き、しかし或る理由で四年遅れて1989年に世に出した作品、あなたとの出会いとなった外国の旅を物語った作品、旅そのものから数えれば数えて三十年後の作品ということになる『ヒロシマまでの長い道』の中で私はそれを修正することになった。

広島が新型爆弾による大破壊に遭ったことは報じられていて大分の辛島家の人々が知ってはいたが、あなたの消息は不明であり生死は知られていなかった。事實は、中国山地寄りに北六キロの戸坂村（現安佐南区）まで徒歩でたどり着き、収容所に当てられた国民学校で夫だった人と出会い、被爆者同士の生活をともにする。打撲と火傷により翌日からは起立不能となったあなたとは異なり、その人は顔面にガラスの破片を浴びただけで、それらが摘出されると元気になり、自由に外出するようになった。「大分県内の町の実家にも自分で電報を打った」のであって、すぐにその父親は収容所に訪ねてきた。まだ8月中旬のことと推定されるが、空襲で郵便局が焼失していた大分市内の辛島家には知らせることができなかったようで、歌集の「広島」の小見出しの七編の最初の二編ではそのことが歌われている。作者が広島・長崎両県外の人だったためであろうか、『昭和万葉集』の「原爆の傷痕」の項目には収められなかったものである。

こほろぎの鳴くべくなれど家離る君が生死の便りあらずも

生きてあれば疾く帰り来よ秋風の野面にさやぐ聞くべくなりぬ

夫の父君は息子が元気なのを見て安心して帰り、その後その人に、全身に色つきの斑点が出るは内部被ばくの症状が現れ、あなたに遺言を託し、同じ症状の人々とともに、隔離されて死没する。これは大分県に伝えられて、父親は再来、遺骨を引き取って帰る。ずっと後、結婚してからもかなりたってからあなたが話したのだが、一緒に来た弟があなたへの介護のために残り、汚物の処理までしてくれたそうである。その頃には大分市内の辛島家にも状況は知らされていて、先ずあなたの母上と正道兄とが訪ねてくる。母上は「まだ四十台だったのに、心配のあまり髪が真っ白になっていた」。

眼路はろぼろ亡び果てにし広島ちまたの街をゆくも雨に濡れつつ

あわれあわれ亡びし街の夜がきて燐火ほうほう焼ゆるの見てふ

人間の力極まれば人を殺し自らを殺すかくて果つるか

収容所内に内部被爆者が出はじめたのは八月も末になってであって、症状により確実に死ぬことが知られていて、夫君も隔離されるに先立って、泣きながら親あての言葉をあなたに述べ伝え、あなたはそれを筆記したということだった。そのことをあなたは母と兄に語ったようであり、それが歌われている。

まがつびに耐え来し君が面おもやせて夫の最後を語らんとすも

広島市では下宿の食事が粗悪だったためにあなたは下痢を起こし、近くの山田登美子女医の個人クリニックにかかり、はやく治すためには身体を温めるが良いといわれ、セーターを着た。この女医さんは東京出身だったが召集で広島陸軍病院に勤務する夫君と暮らすために市内でクリニックを開いていたのであって、戦後は夫にしたがってその生地の大分市に移り、その縁で後にそこで再会、女医は会長、県庁秘書課員のあなたは事務局長として一緒に大分被団協を立ち上げる。しかしこれもまたまだ先の話である。はやく下痢を治さねばならなかったのは、夫の移動の前に大分に発たねばならなかったからであり、腹部を温めるべく厚くさらしを巻いた。そのおかげで自身が内部被ばくを免れたと信じていたようで、私が問いもしないのに、出会いの早期、シベリアを西進する列車の中でそのことを語ったものだった。加えて「(大分に) 持つてゆくように」とぶ厚い札束を手渡されて、それをその朝腹部のさらしの中に収めたのであって、その直後に被爆している。(この札束がまた後に非常に役に立つ)。

気絶から覚めて見るとすぐそばにスーツケースが落ちていて、中から浴衣を取り出して羽織り三尺帯で締めて立ち上がる。火を逃れて川辺に至り、そこで全裸に近い男に東京までの旅費を所望されて金を与える。夫の没後、まだその父親が遺骨を取りに来る前時期、四国枕崎に上陸した台風で収容所に出水があり、全員避難したのだったが、あなたはどうしても起立できず、ひとり取り残されて泣き暮れていた。見回りの兵士に背負われて、近くの国鉄駅の助役の家に預けられた。夜半夫婦が迷惑至極と愚痴るのを聴き、這って行って障子を開け、金を差し出して命乞いをする。「わたしがお金をもっていることに驚いていました」。やはりシベリア車中での告白だった。

収容所には韓国人が調理したレバーや肉を売りにきていて、あなたは自身が買って食べたわけではない。気がふれて自分の名前も忘れてしまい、このため探し訪ねてくる人が皆無の女性がいて、あなたはそのひとつにもそれを与えて慕われていた。アメリカの医学調査チームが来たさいには殺されるのかと怖れたようで、身体を露出してみせ命乞いをし、周

困の輦蹙をかいついには隔離された。そしてその後二度と見る事がなかったのであつて、あなたはその女性についても話し、それが正道によって詠まれている。

熱き涙あふれんとすも命怖ぢてひとり病み伏す女の話

少なからず分かりづらい歌であるが、「熱き涙」云々はあなたがそのような状態で話したということを行っていると思われる。ついにながら正道はこの後長期に入院し、そのまゝ逝くことになった。あなたは列車のなかで、「主人の死はそんなに悲しかったわけではあません。一緒に過ごした期間が短かったですから。あの後の、兄の死のほうはずっと悲しかったです」と語った、遺稿集の「広島」の節は、以上に続いて次の一句で終わっている。

戦いを聖したふとと言ひし此の国の遂に敗るる時にぞ会ひし

収録されている日記は1950年の元旦から始まっているが、その中には自身の「敗戦のころの古い手帳」からの抜き書きが挿入されている。「何となれば、平和とは、戦争の無きことならず、そは魂の力より生まれる美德なればなり」。スピノザ（1632〜77）の今日では『国家論』と訳されているが、1940年開戦直前に岩波文庫に訳出された時には『政治論』だったものからの書き抜きであり、かつ文語文だったらしい本の第五章「国家の目的について」の第四節からのものと読まれる。同じ訳者の畑中尚志氏による1975年の改訳では「実に平和とは戦争の欠如ではなくて、精神の力から生じる徳だからである」とされている。またこの節は「臣民があたかも獣のように導かれた隷属することしか知らない国家は、国家というよりは荒野と呼ばれてしかるべきである」というスピノザ本文からの抜き書きで結ばれており、正道の敗戦直後の関心の所在が明らかにされている。彼は戦争に駆り立てた日本国家を呪詛していたのである。

しかしながら日本人がすべて「ただ隷属することしか知らなかった」わけではなかった。戦争に抗して投獄され、敗戦によって出獄してきた少数者がいた。その一人宮本顯治を良人にもつ宮本百合子の『播州平野』への感銘が記されている。「淡々とした描写の中に感じられる作者の人間愛、正義感、明日への限らない希望と信頼、こんなに素直で明るい希望にあふれた文学描写の中に感じられる作者の人間愛、正義感、明日への限らない希望と信頼、こんなに素直で明るい希望にあふれた文学が、これまでの日本文学にあったろうか」。またロマン・ロラン『魅せられた魂』からの抜き書きが記されている。

東京の初期全学連傘下の諸大学のレッドパージ反対闘争への共感が記され、それへの弾圧への反感を述べたと思われる句もある。後にあなたは原水禁運動・被爆者救援運動に係わることになり、このレッドパージ反対闘争を行った人々にも出会うことになった。

たとえば戦後学生運動に多大な影響を与えた人に西北大教授松尾隆がおり、同大における1950年のこの闘争はこの教授を守る運動であった。この時の全学自治会委員長だった吉田嘉清は教授の推挙で発足した日本原水協の事務局に入り、生涯この運動に献身したが、あなたは私に会う前に氏に出会っており面識があった。後輩の私との出会いはその延長での出来事だった。

みな貧しく病みつつ何を^{たの}しめるや今朝も弾圧の記事は伝わる

東京の全学連の闘争の天王山は一九五〇年一月一七日早大での大学総長と全学自治会の対決であり、都学連は全都の学生へ西北大への集結を呼びかけた。大学当局により警官隊の導入があり、一四〇余名が逮捕拘留されて、吉田ら一四名は占領下の裁判にかけられた。そのような記事を正道は読んでいたと思われる。

遺稿歌集『花火』の前半は日記からの抜粋であり、最後にオーストリアのチロル地方の歌ヨーデルに寄せた一句が掲げられている。

続いて歌集の部に移ると、最後に「ヨーデル」の小見出しで纏められた十一句があり、その最後に日記の最後に記された句と同一のもの、このヨーデルが歌われている一句に出会う。すなわち日記の最後と、全四六〇首の掉尾を飾る句とが重ね合わせられているのである。編集者の処置だったと推定される。そしてこの句が念頭にあったためだろう、あなたはウィーン滞在中にレコード店でヨーデルを買い、わずかに一日だったが、足掛け一三日のウィーンでの最後の時期にその本場であるチロル行をも果たしたのだった。あなたによればあの一日のチロル行が「一番よかった」ということになる。

声遠く丘にヨーデルに呼ぶ聞ゆ吾がために幸を呼ばふ声とも

たいへんな美男であったことは『花火』の冒頭に掲げられている写真からも窺うことができる。「美しいのは兄であって、私は兄の前では、美しい、と言われたことはなかった。」「和子さんは明るい」と言われてきた」と何度も私は聞かされた。「面白可笑しいことを言って、ひとを笑わすのが好きだった」それで、それはだれもが認めたことだったようだ。そもそも自身の原爆体験でさえ、あなたは深刻に話すのを苦手としていた。そのような生まれついた性格のひとつだったが、正道の日記には「和子は美しいから」といったような言葉が何度も出ている。

勤め先（大分県庁）では目立つらしいが、自信と経験を得てゆくのは喜ばしい。

生活を楽しむということでも、なかなか良い技術を持っている。頼もしい。・

和子はいつも明るい。和子は家の青空。不幸といえば、随分不幸なことが多かったが、和子はいつも明るい。「美しく、強く素直なれ」——こんな言葉を召集されたとき、彼女のために残したのだったが、言葉とほり、彼女は美しく、強く素直だ。

明るき芝生を踏みて帰りゆく妹よサンダルの背高くして

あなたは炭鉱主かなにかの大金持に「妾になってくれ」と言い寄られ、「勤め先にまで来られて怒ったことがある」と話した。それを指すらしい文言も記されている。

編者の渡辺外喜三郎氏が「生命を大切にし、美しい心を持ちつづけて死んでいった人の言葉であり、生きている人々を励ます」と「あとがき」に記しているが、今日私はこれによって目を開かされ格別に励まされる、それというのも正道氏の死によるあなたの傷心がどんなに大きかったかがわかるからである。当時肺結核の特効薬のストプレトマイシンが非常に高価で辛島家の家計を圧迫し、あなたも勤め以外にも洋裁をして助けていたことが正道の日記からも知られる。その一方で、「原爆に遭っているんだから結婚はできやしない。しかしもったいない。大事するから、私のメカケになりなさい」と言い寄られて腹も立ったのだろう。「メカケっ！」と吐き捨てるように私に告白していた。

正道氏は1953年に満二十八歳で没。渡辺氏とのあいだで歌集・遺稿集の製作の協議にはいった頃、1954年1月ビキニ環礁での米水爆実験より、マグロ漁船第五福竜丸が被爆し、やがて最年長の無線長の久保山愛吉氏が亡くなり、三月静岡県焼津で葬儀があった。あなたのなかで何かが炸裂したかのようだ。あなたは大分県庁労組から男子の一人とともに代表としてこれに送られており、地元紙に掲載された大分駅頭での乗車時の写真が残っている。

東京杉並区から水爆禁止の署名運動が起こったが、これが最初の水爆だけであったものが、少したって原水爆に深化し変化したことを注視する必要がある。占領下で広島・長崎の厳しい報道管制下にあったためだけではなく、被爆者自身が差別を怖れてそれを隠す傾向があったため、地元以外の全国では原爆は十分には知られていなかったのである。だがその垣根がビキニ被爆くによって取り払われたのだった。沈黙と隠ぺいは、たまたま両原爆都市に滞在していて原爆に遭い、後に以前からの場所に帰った人々の場合とくに顕著だったようである。

たとえば日本原水協で最後は代表委員だった吉田嘉清氏は北九州の若松の出身であるが、広島市の学校に進学し原爆に遭ったに相違ない人々がそれを認めず、原爆については決して話そうとしないことを体験として知っていた。自身は進学して東京は杉並区に住み、そこで水爆禁止の署名運動の発生を見ることになったが、その傍らでマイクを持って立ち、自身が広島で原爆を体験していることを述べ、「原水爆がともども禁止されねばならない」と訴える人を見ることになって驚いたと語っていた。被爆者たちを組織し、あなたも昵懇となり、後に日本被団協結成に働き、代表委員ともなった行宗一さんがその人だ

った。東京都出身、召集により広島市は港のある宇品に在って直接には被爆しなかったが、市内に救助のために入り二次被爆。発病して除隊になり、列車で東京を目指した。立尽くめで大阪でようやく座席に座ることをえ、京都では隣が空いて横になれた。人々が入ってき、息をうかがって「死んでいらあ」と呟いて放置され、おかげでそのまま東京まで横になって行き、杉並の自宅にたどりつき玄関を開け、そのまま倒れた、と私もご本人から直接うかがった。日本被団協結成以前に東京に被爆者団体東友会を結成、広島・長崎にも影響を与え、全日本的な原水爆の禁止署名運動への道を開いた。

署名運動の全国的発展の結果その集計のための組織が作られ、それにより1954年の8月、第一回の原水爆禁止世界大会が広島で開催され、「生きていて良かった」の声が壇上の被爆者から発せられる。組織は発展して日本原水協を名乗ることとなり、第二回はこれにより翌56年長崎で行われたが、あなたは県知事を会長として結成され、秘書課長が事務局長になっていた秘書課員で、その大分原水協の一員としてこれに出席、被爆者代表のひとりとして演壇に立っている。この大会は出席した被爆者たちにより日本被団協の結成宣言がなされた大会でもあった。あなたはこの協議に参加しており、めがね橋近くの旅館に集まって行われたという日本被団協の結成協議に出席し、そこで広島森滝市郎さん、東京の行宗一さんらと出会い、後に発足した大分被団協で初代の事務局長となった。会長となった山田登美子女医とともに日本被団協史に名が出ている。この大分被団協は県の協力をえて別府市に全国の被爆者が利用できる温泉施設をつくったことで、日本被団協内でも注目されていた。

私はその年にはまだ大学にあってこの運動には新宿で街頭署名に立った以上には係わってはいなかった。

翌1957年1月日本原水協は全国理事会で「米英ソ三国は原水爆の製造、保存、他国への持ち出しを止めよ」の決議を行い、その三国に使節団を派遣することにした。二月西北大露文の卒業を控えていて、私、瀬川修はそのソ連班にロシア語スタッフとして加わることになり、7月、その団員の諸氏とともにヨーロッパ経由でモスクワに飛んだ。日ソ間に国交が回復して一年とはたつてはいない早い時期のことだった。クレムリンで首相のブルガーリンの接見をうけて会談、各地を回り、帰路にはモンゴルと中国に立ち寄った。北京では東京の第四回世界大会に参加した中国代表団の団長だった魯迅夫人許広平、副団長だった廖承志氏主催の晩さん会に招かれている。

ソ連では浩瀚な『和露辞典』の著者、国際関係大学のザルビン教授らソ連側の日本語スタッフに助けられたが、ウランバートルの三日間はこれが無く、食事中もひとりロシア語を話し続けなければならなかった。若かったのに疲れ切っていて、到着の翌日の万里の長城行には参加せず、ホテルで伏せた。また中国側の通訳から「瀬川さんは日共黨員ですか」と問われ、「そうです」と答え、「どうして（それを）聞かれるのです？」と問うた。国民運動として発足した日本原水協の団にあって、飛び離れて若い私だけが、学生運動出身の日共黨員だった。しかしソ連ではそんなことは聞かれなかったので、尋ねたのだっ

た。「廖承志さんから、確かめるように、と言われましたので」という返事だった。そしてその夕べの宴席で、早大への留学者だった廖氏から「帰ったら宮本（顕治）さんよろしく」と小声で囁かれた。帰国して、なんとなく実行せず、やがて忘れてしまった出来事である。

モスクワでは同時期に第五回の世界青年学生平和友好祭というものが開催されていて、日本からも七〇人からなる団が参加しており、私たちはレーニン・スタジアムでのその開会式を来賓席で見ている。また八月六日のマネージナヤ広場でのヒロシマ記念集会に出席している。閉会式と同じスタジアムには、隔年ごとに行われる次大会について「1959年にウィーンで会おう」の電光板の明滅があった。二年後の次回は、初めてソ連圏以外の中立国が選ばれたことを告げるものでもあった。

それは同時期に東京で第三回の大会があった年であり、あなたはこれに、さらには續いてに続いて翌58年の第四回の原水禁世界大会に出席し、59年にはこのウィーン平和友好祭の日本被団協の二人の代表の一人として選ばれた。いま一人は後に広島で数期にわたってヒロシマ平和記念公園の原爆資料館の館長をつとめることになったT氏（当時広島市庁職員）だった。しかし彼は乗船地の富山県伏木で倒れ、医師により出国を差し止められ、あなたがただ一人の代表となり、副団長の一人になっていた私に対することになった。

私は南樺太（現サハリン）に生まれ育っておりソ連占領下で一年半暮らし、将来樺太について書かねばならないと思って引き揚げている。そしてその目的にもっとも適した学科と信じかつ願って、当時はそこだけにあった西北大の露文科に進んだ。しかしロシア語の勉強に集中し、またある程度まで学生運動に係わったが、樺太については書かずまた容易に書けず、そうこうするうちに、日ソ国交回復後の早い時期に原水禁運動からソ連に出される機会をもったのである。このことがなければその二年後にウィーン平和友好祭に行くこともなく、あなたと出会うということもなかった。翌六〇年二月に結婚、若干曲折があったが、一般の貿易商社に入り、ソ連担当部門で、また数年だったが中国をも兼務して働くことになった。

この間「樺太について書く」という私の初志にして課題だったものはどうなったのか。私がそれを達成したのはようやく1984四年になってであり、四十歳を超えてであって、『樺太よ遠く孤独な』という四二〇枚の一冊がそれである。

このはなはだしい遅滞が私の才能不足によることは明らかだが、また同時にそれは樺太のテーマの難しさにも起因したのであって、私があなたの良人を長くやってきたことが預かって力となり、どうにかそれを克服して書けることになったものである。

ソ連占領下の大泊（コルサコフ）で十月下旬、再開された中学校の最初の授業で、二年生だった私は、数物の教師から新型爆弾と報じられていたものの真の名称、および核爆発

の初歩的原理を一時間にわたって教えられた。またそこから導かれる今後の世界戦争の可能性の説に多大な感銘を受けた。私はそのことを記しながら、配偶者が原爆被爆者であることを明かし、その遠因がその授業にあったと注記した。すなわち樺太を主題として作品にあなたは登場するのである。

長編の作品の前半で、生まれ育ってから引き揚げるまでを詳述した私は、引揚げ後の人生については駆け足的に記述した。すなわち大学を終えてすぐ、日ソ国交回復宣言があつてまだ一年とは経つてはいなかった1957年7、8月、発足して三年目の原水爆禁止運動の団体の代表団にロシア語スタッフとして起用されてソ連に行ったこと、またその延長として1959年にウイーンで行われた世界青年学生平和友好祭といったものに行き、日本被団協の代表として出されていたあなたと出会い半年後に結婚したことを記した。

「樺太」の表題からは予想されないあなた、つまりはヒロシマのテーマが加わることになったのは、樺太以来の初心がこれによって一時大きな変容を蒙ったからだだった。あなたとの間に生まれた最初の子（男子、ツヨシという名だった）がフアロー四兆症という重症の先天的心不全の子だった。この不運はあなたの原爆被害と無関係だったはずはなく、私はあなたには言わなかったが心中秘かに「樺太のヒロシマの子」と呼んでこの試練に対応した。四歳十か月で他界。以後私はその子の死を目標に、あなたとの出会いから結婚に至る過程を書こうと努めることになった。つまりはテーマの移動と変更があつたのだ。しかし、その物語は数年におよぶ努力にもかかわらず、どうしても書き上げることが出来なかったのである。

そうこうしているうちに、引揚げ後に住んだ北海道十勝の帯広で出会った女子の一人を除くと、絶えて久しく会うことのなかった、樺太の故郷、大泊と同じアニワ湾に面した中知床半島の遠淵（とうぶち）村の小学校の同級の他の女子たちの東京での再会が実現し、それが北海道に住む男子たちに拡大することになった。こうして1972年の北海道洞爺湖温泉での集まりで、長く忘却されていた記憶の回復があつたのである。その失われていた記憶こそが、私が書くこうとしていた樺太の核心だった。私はこれに助けられて初源のテーマだった樺太に回帰することになった。すなわち私はわが家とかかわりのあつた露日の夫婦の一家、その息子・娘である兄弟姉妹との係わりを中心とした物語を書くことになったのである。

わが家に通ってきていた露日の混血のお手伝いと、その縁で交わることになった二歳年長の男子から私は物語り始めた。その子に従って遊んでいるうちに、その子をめぐる悪童たちの騒動に巻き込まれることになった。災難が自分にまで及んだので幼かった私はその子から逃がれるように離れた。そのことを物語りながら、私はその際に「悪童たち」がキヨミに浴びせていた「ロスケ、ヨッポイマツ、鼻高のっぽ」というはやし言葉を紹介しており、それがロシア語の卑猥な罵倒を著す命令形の三語の短縮形ヨッポイマーチの崩れた発音形態であることを注記している。「お前のおっ母さんを犯しな」が原意のバカヤローである。

もちろんそんなことは私が後年大学の露文科に進み、ロシア語を正式に学ぶようになって知ったことで、幼かった私はそれがそもそもロシア語であることさえ知らなかったのだ。累が及んで私までもが「タボ（ター坊）、たん瘤、十二瘤（こぶ）」と脅されたのであり、私としては逃げ出さざるをえなかった。しかしこのことがわが生涯のトラウマとなったのだ。私はキヨミをめぐるトラブルについては忘れなかったが、意味不明のこの「ヨッポイマツ」の語については、記憶を喪失するというよりは、強引に忘却にゆだねたフシがあった。

後に大泊で、ソ連占領下で暮らすようになって、最初に覚えた二十語には入る言葉に、バカヤローを意味すると正しく理解したヨッポイマーチという言葉があった。しかし発音が類似している遠淵のヨッポイマツについては、当時すでにまったくその記憶を失っていて、それを思い出しではないのである。しかしマルグリット・デュラスは、「それを説明するのは難しい」と補注しながら、「忘却もまた記憶の一種である」と述べている。私の人生はこの「失われた記憶を求めて」のものだった。あなたとの結婚もその途上の出来事だったのである。

敗戦から一年たった夏、ソ連による二度目の勤労動員で私は遠淵の南のS村に送られ、塩蔵魚づくりの労働に従事する。私は自分が将来樺太について書く、否、書かねばならなイと思い始めていた。しかし書かれるべき樺太とは何だろうか。それは遠淵であり、キヨミだった。このため私はこの混血者の戦後の変化を見届けるべく、願い出て休みをもらい、大泊に向かうソ連軍のトラックに便乗して村に行く。

キヨミを含む一家の人々に会い、二泊三日後に村を去ったのだが、往路とは異なって徒歩で帰ったのであり、最後に、そこからは下り道になる丘の上で、大きな鹹水湖のほとりその村に別れを告げている。私は歴史と社会の大きな激変にもかかわらず、かつての日と変わらぬ湖と山々に永遠と絶対、そのようなものとしての真実を認め、生涯記憶し続けることとした。それは私という人間が成立した瞬間であり、やはり、後にあなたに繋がった体験だった。

長い忘却の後、ようやく1972年になってこの記憶を回復してから気づき自覚することになったのだが、私が書くこうとしていた樺太とは、ずばりこの失われたヨッポイマツという一語の記憶であり、それ以外ではなかった。たとえば私は別れに望んだ村の自然お佇まいに永遠、絶対、そのようなものとしての真実を見出しており、以来それを書くことが樺太を書くことだと思ってきたのである。しかしその私とはヨッポイマツの記憶を失っていた欠陥人物だったことが判明したのだ。かくて私は、引き揚げて日本に住むことを知りながら、訪ねて会うことをしないうえに、かつてお手伝いだった女性を初め、その血縁の人びとを訪ねることになる。樺太の甦りであり、それへの回帰だったが、しかしそれはまた、ソ連貿易に従事していた私の職業柄から、ソ連の深みにはまることになった時期と重なっていた。そして私は彼ら混血者たちは四人と四人が日本とサハリンに別れて生きてい

て、再会および相互の訪問が実現するためには、ソ連の崩壊に近い激変が必須であるという結論に到達した。しかしそれはまだまだ先の話である。

動員先のS村からは往路と同じく船で帰る。大泊の家ではその半年前からソ連の技術者のクロポトキンが入っていた。休みの日にはわが家の居間のストーブのそばでトルストイの『戦争と平和』全四巻を読んでいて、自室に帰る際には置いていたのでその露文に見入り、前途に想定される引揚を想い、それを理不尽に思った。すると奇妙にヨッポイマーチがこみ上げてきて、私はついに彼にその言葉を浴びせたのだったが、これをヨッポイマツの失われていた記憶の仕業ではなかったとは言えまい。繰り返すがマルグリット・デュラスは「忘却もまた記憶の一種です」と述べながら、「ただしそれを説明するのは難しい」と付け加えた。まことにそれは難しく、ただし忘却の形で私のなかではこのヨッポイマツは生き続けていたのであって、数日後、読書するクロポトキンに思わずこの語を浴びせ、彼を驚愕させ、そしてこの出来事がまたもや私を強く支配することとなった。

まことにこの思い出は強烈だった。引き揚げて数年して、私は一家の分裂とキヨミのサハリン残留を知ることになり、心痛する。そして反射的にクロポトキンとの出来事を思い出す。私は書店に行きトルストイの邦訳『戦争と平和』を買って帰り、読み終え、医学部志望だったのに西北大露文を目指すことになる。ヨッポイマーチの方は大学二年の年に俗語を収録した辞書を引いてフル・センテンスと原義を確かめ得た。しかしヨッポイマツの方は忘却していて、まことに1972年に至るまで思い出すことがなかったのである。その記憶を回復すると、まことに鮮烈強力なその語が、どうして記憶に失われていたかといえ、幼かった（三、四歳だった？）私が記憶し続けることの苦しさから意識的かつ強力にそれを記憶から抹殺したものだからである。

八人の兄弟姉妹のうちでもっとも親しかったのはお手伝いだった女性であり、一九七四年になって、ようやく彼女を富山県に訪ねた。またその姉にあたる人と東京で会い、北海道の両親が上京しわが家に泊まったときには、在京の他の数人の旧村人とともにわが家に招いた。あなたは私たちの会話に入ってこられず、給仕をしているだけだった。（ずっと後、世紀の終わり近くに、あなたの大分市での幼馴染、トリウム熔融塩炉学者の古川和男氏が拙宅に見えたさい、私が挨拶しただけで外出したことの理由の一半は、このときの記憶にあった。私は同郷の大分市生まれ同士で心ゆくまで話させようと願ったためでもあったのである）。

戦前は日本全体でそうだったはずだが、私たち樺太人は学校の内外で「日本人の発見になる日本領であり、ロシアの東漸により一度は奪われたものを、日露戦争の勝利によって回復したのである」と教えられてきた。そもそも島であることの発見者は間宮林蔵であり、シーボルトがその作成に成る地図をヨーロッパに伝え世界が知ることになったのである。ところがその地にソ連が「サハリンは発見においても領有においてもロシアが先行し、侵略的な日露戦争によって奪われたものを、回復するのである」と称して侵攻してき、翌年早々には領有宣言をおこなった。また「全世界は偉大な教導者スターリンが指し示す道に

従って進む」ということだった。いったい全体これらは正しいのかということとは、やはり樺太以来の疑問であって、書くために解明されねばならない問題だった。

もっとも戦後1950年代日本の左翼でスターリンが全盛だった時期の学生だった私は、この問題に深入りするのは、今は得策ではない、と判断するに至ったのであって、ロシア語の習得の方を優先した。とはいえ私のクロポトキンが別れしなに「ソ連は良い国ではなく、スターリンは悪い」と言っており、この言葉を忘れることはできなかったものであって、ソビエト文学に接しつつも、その問題は追求した。入学後、レーニン自体も読んだが、より多くマヤコフスキーのレーニンとロシア革命をたたえる叙事詩などによってロシア革命を肯定した後にも、スターリンへの疑問は払拭されずにいた。

こうして私はやがてマヤコフスキーを去り、レオニード・レオノフ（1899～1994）に遭遇し、この作家に集中することになる。戦前すでに『穴熊』、『スクタレフスキー教授』の二編の長編小説の邦訳のあった作家である。ソビエト文学ではドストエフスキの影響がもっとも色濃いいといわれ、実際そうであるだけではなく、そのようなただ一人の人であって、とくに捉えられたのが、第二次大戦・独ソ戦下の四幕戯曲『襲来』（1943）という作品だった。それは次のような内容のものであった。

第一幕

独ソ開戦の直後、ドイツ軍が明日にも入ってくるロシア西部の町。そこにフォードルという青年がシベリアかどこかで三年の刑期を終えて町に帰ってくる。しかし医者の父の家には寄り付かず、町をうろついていて家人は噂として聞くのみである。やがて妹のオリガが兄を見かけ母に注進する。ようやく家に現れ、母親は喜び迎えるが父タラーソフは冷静である。フォードルの罪は片想いによる、未遂に終わった情痴事件のようである。唯一の擁護者は彼を育てた乳母であって、「いいんだよ、あんなやくざ女を殺そうとしたことなんか、あんたの良さが分からなかった女なんてね」と言う。そこにオリガの恋人である町の権力者、共産党委員長のコレースニコフが訪ねてき、フォードルは衝立の陰に隠れる。

コレースニコフは、車を用意してきたので、独軍がくる前にそれで退去するようタラーノフに勧める。しかしタラーソフは「独軍下で私は必要となる」と固辞し、逆に「あなたは？」と問われ、オリガらを従えてパルチザン活動に入ろうとしていることを打ち明けようとしたところで、コレースニコフは人の気配を察知し黙する。フォードルは衝立を出て来ざるをえなくなる。二人は顔なじみであり、彼ら工業学校の生徒は、フォードルらの中学校生徒とは仲が悪かった。彼はコレースニコフの意図を察知して半ば挑発的にパルチザンへの参加を申し出、共産党員は「私も退却するのです」と偽りをいう。彼は「危険な人間は容れない、ということですか」と悪態をつき、父親にたしなめられて家を出て行く。

刑期を終えて町に戻ってきたのはフォードルだけではなかった。老人が現れてそれが革命前には富裕な商人だったファューニンであること、当の病院がかつてはその家だったことが明らかに。真っ先に気づいたのはタラーソフの使用人であるココーリシキンで

あつて、「お帰りなさい」と歓迎する。元商人は独軍の到来を資本主義の復活と歓迎し、「新しい年が来ました。主よ、祝福を与えたまえ」と重々しく十字を切る。同時に窓からはドイツ兵らが顔を出す。

第二幕

当然の権利を行使するかのように、家に入り込んだタラーソフは主人顔に振る舞う。またすでに占領軍と通じており新しく町長となる約束も取り付けている。形勢を見るに敏なココーレイシキンはずでにファユーニンの手足となっている。

パルチザンは活動を開始し、独軍に死者が続出し、その一人ひとりに「よくいらっしやいました アンドレイより」の書置きが張り残される。これはイワンに次いでロシア人多い名であるが、ファユーニンは、医者、職業者、町の住民全部と面識があるはずのタラーソフはそのアンドレイがだれであるかを特定できるに相違ないと睨む。それで彼に手紙を書かせ、「犯人」を家に誘き寄せる相談をもちかける。もって占領軍の覚えをめでたくし、家の接収を免れようという算段なのである。というのも司令官ウィツペルがこの家に目をつけていて検分にくると聞いたからだった。

ウィツペル將軍が亡命ロシア人の息子である通訳モサーリスキーを伴って現れ、それに対しファユーニンは「ここは、私が半生を過ごし、コミュニズムとの勇敢な闘いで倒れた息子をもうけました家であります」と述べる。またタラーソフを紹介して、「この方の息子さんもまたソビエト政権反対の闘士として、非常に有名なのであります」と付け加える。医師は「嘘だ、事実じゃない」と制するが、「(赤軍との戦闘で)名譽の戦死をとげたわが息子とともに」と続け、モサーリスキーに「はやく部屋を見せなさい」と急き立てられる。この間に別室でその副官クソツが乳母の孫娘アニスカを犯す。

「アンドレイ」とはコレースニコフの名であり、彼を長とするパルチザン隊の代名詞である。そのコレースニコフが肩に被弾し、手当が必要になってオリガがタラーソフのもとに連れてくる。彼女は兄の罪には両親をふくめて一家の全員に科があると考えていて、それを一身に背負って償おうとしている。しかし家はすでに包囲されていて絶体絶命であるだけではなく、タラーソフ一家の全員も類を免れない状況である。

コレースニコフは手当を受けながら、「この八年間あなたとご一緒に働いてきました。私はあなたの病院の予算を削った、燃料も必要なだけさしあげなかった、会議の席ではおおいに争った。すぐそばで暮らしていながら……」と詫びる。タラーソフは手術に集中していて助手のオリガに指示を与えている。「そのあいだずっと、一度も心を割ってお話したことがありませんでした。いえ、もう痛くありません……」。そして急にこみ上げてくるものがあつて、「実際、そんなふうに誤った眼で見られた友人たちがこの国にはどれほどいることでしょう」と飛躍する。

窓枠が激しく叩かれ、ざわめきが起こり、コレースニコフは衝立の陰に隠れる。フョードルが入ってくる。「(外は)検束さわぎだ! (オリガに目配せし) 私には誰を追い回し

てのか、ちゃんとわかっている……」。オリガはその中をどうして兄が通って来られたのか
が不思議で、「あんたは夜間通行証でも貰っているの？」と尋ねる。フョードルは「武器を
もっている」と威張り、「寒さで凍えているので」とアルコールを所望し、父に断られる。
家族全員が怒り、母親までが罵倒する。タラーノフは「これ以上は強い強い薬をやるう」
と言って、カーテンをあける。そこには痛めつけられたアニスカを介護する乳母。タラ
ーソフは「泊める場所がない」ことを理由に、息子に出て行くよう求める。フョードルは
父に額にキスしてくれるよう求め、タラーソフは苦笑。オリガが戻ってきて、卓上の血に
染まったガーゼに気づき、慌てて隠そうとする。それがフョードルの疑念をまねき、脇に
回って衝立を払い、コレースニコフに「あなたには莫大な賞金がかかりますよ」と
言い、相手は「知っています」と応える。

フョードルは「出て行け」と自分自身に命じて出て行き、その背中に妹は「大金もうけ
ができるわね！ 女にこだわるだけの道化者！」と罵声を浴びせ、兄は振り返って一同を
笑って見返して去る。こうした事態を知らぬままに、離れの自室からファユニンが引つ
越しの挨拶にやっつき、一家の三人はコレースニコフをフョードルとして紹介せざるをえ
ない羽目になり、その負傷を「前線を通して来たさいの負傷」とごまかす。しかしコ
ールイシキンの目にはこのすり替えは通用せず、乾杯の際にも手が震え、誤って「よくい
らっしゃいました……」を口にしてしまう。ト書きには「秘められた歓喜とともに」と記
されている。これはファユニンにも伝染しないではない。

第三幕

同じタラーノフの部屋、ただし今や新町長ファユニンの執務室となっていてココール
イシキンが出す書類に目を通してある。問題は、アンドレイがいまだ捕まらないのでロシ
ア側の警察署長がゲシュタポのシップレーから譴責されていることである。ココールイシ
キンは手柄をたててその後釜にすわろうと願っている。モスクワが落ちれば廃止になるは
ずのルーブルによる賞金ではなく、地位が狙いなのである。しかしモスクワが落ちたから
といって戦争は終わるのだろうか？「モスクワの向こうにはまだヴォルガがあり、さらに
向こうにはウラル山脈が雪の外套にくるまって寝そべっている。さらにその先は――大河
と森林のシベリアだ。またその先は、いったいどうなっているのか、まったくもって分か
らない！ 北極光がさまよっているだけ…… ロシヤ――こいつは、なあ、齧れば齧る
ほど、残りの方がますますふくれあがってくる肉饅頭（ピロシキ）のようなものだぜ！」
と新町長はぼやく。

ファユニンの誕生日にあたっていてロシア側の客は集まっており、後は占領軍指令官
シプレーの到着を待つだけである。それに先立ってゲシュタポ長のシプレーが到着し、コ
ールイシキンは誤って「よくいらしました」を二度続けて口にし、この言葉に苛立
っているシプレーの逆鱗に触れ、「お前がコレースニコフなのか？」と首根っこをつかまれ、
部屋の入口まで引きずられ部下に引き渡される。ファユニンに救いを求めて「ニコライ・

セルゲイヴィチ！」と叫ぶが、一発で処刑される。司令官の到着が遅れたまま、開会となり、モサールスキーがメツセージを代読する。「歴史的必然の最後の一行が書かれつつあります。スラブ民族によって古く窮屈なヨーロッパに缶詰めにされたようになっていたゲルマン民族は、いまやそのコルク栓を叩き破って新秩序と指導原理をもたらしつつ、奔流のように東にほとばしり出たのであります。いまこう申し上げている最中にも……」。電話が入り、シプレーが受話器を取るが、モサールスキーは続ける。「モスクワは陥落するのであります！」

電話はウィッペル司令官ほか三人が殺害されたというものだった。犯人はひとりであって、十連発銃が使われて全員即死ということである。犯人はその場で捉えられ、連れてこられる。誕生祝いは訊問の場になる。こうしたことを知らずにタラーノフ夫妻が遅れて現れ、これに立ち会うこととなる。

引き立てられてきたのはフョードルであって、彼は人払いを求めるが、ファユーニンの「面通しの必要」の主張が認められて、夫妻は止めおかれる。一服を所望し、訊問にたいして彼は「名はアンドレイ、姓は――コレースニコフ」と応える。また地位と身分、職業は「ロシア人にして、祖国を守る者」と称する。また最後の職業を問われて答えずにいると、ファユーニンが発言して「ソビエト政権の郡長でした」と答え、タラーノフに同意を求める。夫人も同意する。求めて退席を許されて、彼女は床に落ちているフョードルの血痕のついたハンカチを拾いあげる。結核による血である。モスクワ近郊の戦況不利の報が伝えられて尋問は延期され、占領者たちは退場。ひとり残るファユーニンのそばにコレースニコフが現れる。

「悪党をつかまえたのに、どうして喜ばないのだ」と問われて、ファユーニンは町に向かつて帰って来る途中、後退する部隊の若い兵士に励まされたことを物語る。「嘆きなさんな、おじいさん。ロシア人は必ず戻って来るんだからね」と言われたのだ。さらにまた彼は、かつては店の門番だったコレースニコフの父親を連れてと商品用の亜麻を畑で買い付けた思いで話しをする。子供への土産として菓子を与えたことを言い、覚えていないかと問う。本物のコレースニコフであることを知りつつ見逃してやったのだから、その恩を忘れないでほしいと頼む。

第四幕

地下倉庫が臨時の拘置所に使われている。半円形の窓が二つあって、そこから外が見える。

エゴロフ、タターロフ、オリガの三人のコレースニコフ配下のパルチザン隊員が捉えられて収容されている。他に毛皮外套の老人とその孫にあたる少年。狂人がひとり混じっているがドイツ側に内通していることが気づかれている。ドアの外には番兵。

パルチザンの三人がたがいに訊問の様子を語り合う。タターロフは、コレースニコフの人相をしつこく聞かれ、教えてやれば、捕まえてこられるのかね、と皮肉ったことを話す。

そうこうしているうちに、「連れてきたぞ」と声がしたのである。「見ると……」と言いかけ、狂人の存在に気づいて口をつぐむ。地上の様子が気がかりで箱を積み重ね、身軽な少年を登らせて外を観察させる。絞首刑用のブランコ状のものができていることが報告されるが、音により上空に飛行機が飛んでいることが知られる。敵機か味方機かは不明。高射砲が鳴りはじめ味方機であると分かる。階段をのぞき見たオリガが仲間に「コレースニコフは訊問から連れてこられたようよ」と告げる。フョードルが変わり果てたアンドレイとして連れてこられる。「一体何があったの？ 話してちょうだい」のオリガの問いに、兄は「話せば長くなるよ」と答えるのみ。

処刑を覚悟して、老人は孫に「スターリンが見守ってくれているからな」と落ち着かせる。

オリガが兄に「まだあの女のひとを思っているの」と問い、彼は「うん」と答える。パルチザンの三人はフョードルを交えて会議を開く。身代わりの動機について尋ねられて、アニースカが原因だったと答える。「おれは諸君に命をさしあげた……しかし受け取りをくれとは言わないよ」。

シプーレが入ってきて皮肉たっぷりに「よっく、いらっしやいまっした」と下手なロシア語で処刑を告げる。三人ずつ、とのことでその最初はフョードルを含む男の三人、別れぎわに、次の三人に入ることになる妹に向かって彼は「もしお母さんに会えたならば、こう言ってもらいたんだがね……」と切り出す。「あの晩、ぼくは一滴も飲んでいなかったのだ、と。ただあのときは何日も眠っていなかったで、ほかに行くところはないし……」。

少年は祖父に「スターリンは背の高い人だったかい」と聞き、それに促されてオリガが老人に「スターリンに会ったことがあるの？」と問い、相手はクレムリンでの或る農業関係者の集会の話をする。スターリンと農業、といえばこの時代スターリンに賞賛されて猖獗をきわめていたルイセンコ派が思い出されるが、もちろん作中では伏されている。ルイセンコが完全に失脚するのは、フルシチョフ時代の末期、この作品の改訂版が出された一九六四年になってのことである。以下の文もその中では完全に削除されているが、私は一九四一年の初版について述べている。

老人「農作物のことだね、おれがちよっと珍しいものを育てたもんで……（ありありと目に浮かぶように）あれはとても広いホールで、千人からの人が集まっていたが、それでもがらんどうとしていて、みんな石ころ同然に見えたものさ。そこへひとりの人がはいってきたのだ。とたんに隙間というものが無くなってしまつてな、急に窮屈になり、全体が熱くなった」。

広場で処刑が始まり、背伸びして見ていた少年は顔をそむける。ト書きには「二度ハスターリン、スターリン！Vの叫び声が聞かれ、途中で消える」とあるが、「二度」と記されているところに意味がありそうである。フョードルは死にあたってスターリンの名は口にしなかったのである。この間、高射砲の斉射音が鳴っていて、老人は処刑の太鼓の代わりの「礼砲」かと疑っていた。やがて「空が見えなくなるほどの」パラシュート部隊の降下を

少年が一同に伝える。「スターリン、スターリンが来たんだ！」と叫ぶ。牢屋の人々は泣き出す。

板張りの窓が銃床でたたき壊され、数人が下りてくる、先頭に立つのはコレースニコフ。オリガを認め、「お母さんに会えるよ」と言い、「フョードル・タラーノフ、……フョードル！」と探し呼ぶ。パラシュート部隊には「ロシア人はかならず戻って来る」と言った兵士が混じっていて、オリガに傷の手当てをうけながら、連れてこられたファューニンと対面する。タラーノフ夫妻が登場。二人はすでに処刑されたフョードルを見てきている。

オリガ ママ、目が乾いているじゃないの、いけないわ。フェージャのために泣きなさい、ママ。あの人は出て行った。そして今また戻ってきたのよ。兄さんはママと並んで立っているわ。

アンナ・ニコラエーヴナ あの子は帰ってきた、あの子はわたしのものだ、あの子はわたしたちと共にいる……

私は樺太でソ連を見。スターリンを体験して引き揚げている。その主要なすべてについては樺太の本の中で物語っており、その際、その地の最初の発見者が日露のいずれかという問題では、チェーホフの『サハリン島』に依拠した。すなわちチェーホフの「サハリンの処女探検の権利は疑いもなく日本人に属し、日本人が最初に南サハリンを領有したのである」を始めとした一連の親日的、より正確には国際主義的な文言のすべて掲げ、それを正しいものとして記述した。つまりはソ連が第二次世界大戦後「サハリンは発見においても領有においてもロシアが優先し、日本が侵略的な日露戦争により略奪したものを、スターリンが取り戻したのである」としていたことを誤りとした。ただしその際、ソ連時代の作家レオーノフがチェーホフについての講演で「祖国を愛しながらも、彼、チェーホフはそれに媚びなかった」と記していることは承知していたが、それについては特には触れなかった。

私がこれを掲げることになったのは、樺太の本から十九年を経た二〇〇三年の著書『日露領土紛争の根源』のなかにおいてである。

スターリンはソ連においてだけではなく、引き揚げてから見ることになった日本においても、左翼の世界では、猖獗を極めていた。スターリンは神のごとき存在であり、大学入学後に接することになった共産党細胞ではその『ソ連共産党（ボリシェヴィキ）史』は必読の「聖典」と見なされていた。一九五三年に死去したがまだその余波は残り、1956年のフルシチョフらによる、秘密報告という形でなされた批判が現れるまで、それは続いたのである。私が『襲来』に心ひかれたのはそこにスターリン批判の臭いを嗅いだからだった。そこにも確かにスターリン賛美の文言は存在するが、見られたように、子供がスターリンを偉いと思っているのであり、ありうることで不自然ではなかった。主人公が流刑

されていたとする設定が尋常ではなく、その無実の意識は強烈に描出されていて、私には反スターリンの作品と読めたのである。

実際この作品は雑誌掲載の段階で物議をかもし、作者がクレムリンのスターリンに電話し原稿を送って読んでもらい、「このまま発表されるよう望む」というお墨付きをもらってようやく掲載され、すると今度はすぐにスターリン賞の一位をとるということに相成っている。私自身尊敬していた戦前のプロレタリア文学運動の指導者、ロシア文学者でもあった蔵原惟人氏（当時は党分裂で排除されていたが、後に文化部長）は、この事実をもって、スターリンが文学をよく理解していた証左であるとしていた。しかし私には情痴事件による刑というのは偽装であると思われたのである。蔵原氏にはそのことが見えてはいなかった。

樺太に導かれるようにして進んだ西北大露文の生活だったが、入会したソビエト研究会のなかでは時代がもたらしていたスターリン的なものの重圧が存在し、一時私は樺太を忘れようと努めることになる。そのための方便として共産党（所感派）に入ってみた。しかし後になって、党統一への逆流だったと知られたのだが、五四年秋に総点検運動というもの締め付けが起こり、それに抗しきれず、細胞の活動を離れた。そのきっかけとなったのがレオーノフ、特にこの作品だったのである。私は党活動には背を向け、レオーノフ作品集（露文）に集中した。

翌五五年六月に党の統一にかんする決議が出て活動にもどり、以後、一貫して統一会派（国際派と俗称）に属していた松尾隆教授に私淑することになった。翌五六年一二月に亡くなったが、その人が日本平和委員会の常任理事だったので、その縁で日本原水協からソ連に出される機会をもった。またその延長もしくは継続として、その二年後、あのウィーン世界青年学生平和友好祭の日本代表団のなかで、日本被団協代表のあなたに会い、翌一九六〇年早々に結婚することになった。

一九五九年の百五十人のその団ではモスクワ留学を目指していた私だったが、諸般の事情でそれを実現せず、あなたと結婚して、始まって間もなかった日ソ貿易の会社員になった。しかしレオーノフへのうち込みは続き、一九六二年にこの人が日ソ文学交流で来日した際には、会う機会がえられて、積年の疑問を直接氏にぶつけている。「その件では、現在改作をおこなっており。近く公刊するので見てもらいたい」ということで、一九六四年刊行の新しい戯曲集でそれを読むことになった。

フョードルの女性問題は完全かつ全面的に削除されていた。またそれと連動するようにスターリンの名がほぼ全面的に削除されるか書き換えられていた。たとえばパラシュート部隊の降下を、少年は「スターリンが来た」と叫んだのだが、「わが軍が来た」と変更されていた。私の読みが正しかったことが証明されたのである。

それではこの主人公の「科（とが）」はいつたい奈辺にあったのか？ 明瞭を欠いてはいるが、何らかの形でスターリン批判の言動が原因らしいのである。確かなことは周囲のだれにも分からない状態で逮捕され、流刑地に送られたことになっている。確かなのは、

フアューニンが言ったような、革命後の赤軍と白軍によって戦われた国内戦で白軍に加担して戦ったという罪だったのではなかったことである。

新戯曲集には、『襲来』とは異なってまったく発表が許されず、闇に葬られていたやはり四幕の戯曲『吹雪』（1939）が収録されていた。北国育ちなので私にはよくわかるのだが、激しい吹雪のときには視界がまったく効かなくなるのであり、これはまことにそのような、一九三〇年代後半の、密告と粛清により国全体が疑心暗鬼の闇に閉ざされた状況を写し出した作品なのである。当然のことながらフョードルにはこの時代のレオノフその人が描きこまれていたと言える。私の読みの正しさは完全に立証されたわけであり、私は満足し誇ってよかったはずだった。しかし作品はこの改作によって緊迫の度合いが著しく薄れ、悪くなっているのだった。どうしてこのようなことになったのか？

前作ではオリガを最右翼として家族の全員がフョードルの罪を痴情と見ていたのに対し、コレースニコフは必ずしもそうではなく、政治的鬱屈に見ていたフシがあった。すなわち己が信奉するスターリン（派）の落ち度に気づきつつ、生きている人物だったのだ。そしてフョードルに身代わりの拳に出られたことによって責めを感じざるを得ず、パラシュート部隊による解放にさいしては、その名を連呼しつつ処刑の場に駆け付けた。そうすることによって作者はフョードルの「勝利」を描いた。私が前作に、感銘を受けたのはそれが読み取れたからだった。

ところが改作では、疑いもなく1956年のフルシチョフのスターリン批判に触発され、一連の個人崇拜の批判に合わせて女性問題とスターリンを取り除いた結果、相対的にコレースニコフが愚鈍な人物に変わることになっていた。牢屋でオリガは「まだあの女のことを思っている？」と質したが、改作版では次のように変更されているのである。

すなわちコレースニコフとして連行されてきた兄に彼女は当惑せざるをえなかったものであり、作者はト書きに「フエージャの顔にかすか笑みが浮かぶが、それは妹の、茫然自失し、まことの絶望と交錯した喜びにたいする回答である」と記しているのだ。

オリガ　フエージャ、きつとあんたは私たちを見下しているのでしょうね……（急ぎ込んで）でもね、こんな粗末なベッドの場所で一緒になれたなんて嬉しいじゃない。もうじき縛り首になるんだから、あんたが言いたいと思っていたことを聞かせてくれない……あんたの罪とはいったい何だったの？

（フョードルは身じろぎもせず、まるで自分の手指に対するように、妹の膝を撫でている）。

それじゃ、わたしが代わって言ってあげましょう…… 要点だけを、ね。このところ、ずーっとあんたのことだけ考えていたの…… そしてあんたと二人きりになるのを怖れていたわ。でもね、信じて、フエージャ。私たちが沈黙してきたのは、羞恥と恐怖のせいだけではなかったの。全力疾走中には、気づかないことってあるものだわ、怪我を避け、気が転倒せずにいるためにはね。余計なことを考えると、魂と目的は蝕まれ、鉄だって

錆つくのよ。(小声で)今はだめ、だめ、どうしても駄目なの： 歴史とは火薬のようなもので――それをつくる人間たちよりも強大なのよ。

最後の「歴史とは：」云々はあまりにも含みが多い表現で、意識の必要のある個所である、短気は損気、時節の到来を待つ以外にない、ということを書いていっているように思われる表現である。言うなれば、フョードルには短気、もしくは性急に似た行動があったようなのである。

コレースニコフにはオリガのこの認識が決定的に欠けていた。改作版の彼はスターリン体制そのものである。地下牢の最後の場面。人々はみんな地上に出、残るのは二人だけである。新コレースニコフはフョードルの死にこれっぽっちも心動かされていなかった。彼にはオリガの涙が不思議である。

コレースニコフ 上にあがろう、ママが来ているよ。

オリガ 母はもう(兄の遺体を)見たんですか？

コレースニコフ うん： どうしてあんなに泣くのだ、オーリヤ？ これもまたわれわれの偉大な勝利なのだよ！

オリガ(木霊こだまのように虚ろに) 偉大な勝利ね：

私はレオノフの読解に多大の時間と労力を費やした。これは卒業論文のテーマであり、私が目指したのは、『襲来』におけるフョードルの情痴殺人未遂は作者における偽装であり、スターリンの告発が真の意図であることの証明だった。しかし同時期の評論「ロシアの栄光」(一九四三)では対独開戦を告げるスターリンのラジオ演説に触れての「われらが偉大なる父スターリン」、またアンリ・バルビュスの評論「スターリン」の表題の簡潔さと内容の大きさを賞賛する評論などを見ると、そのように論証するのは困難だった。しかし芸術作品では別だったのであって、私は己の読解に固執しレオフを読み続けたのである。そして最終的には作者その人に質す以外にはないと信ずることになったのである。ソ連への留学がまだごくごく狭くしか開かれていなかった時代のこと、それについての今日的評価については、やはり先にいつて述べることになる。

私はその旅の途上であなたに出会ったのであり、ゆっくりと歩むこと、すなわち待つことの重要さを知ったのであり、留学を断念したのであった。それ故に、改作に接し、肩透かしを食ったような、馬鹿にされたような気持ち味わった。作品は全体が弛緩しており、最初の版の緊張が失われていた(と感じた)。それは結びに明瞭に表れていた。私はレオノフを読むのを止めたが、それはまたソヴェト文学全体との別れに繋がった。ソルジェニツインが現れ、『収容所群島』がソ連の外で公刊されてソ連文学が様変わりしたのだが、そ

れよりもだいぶ以前の個人的選択でありまた決断だった。ソルジェニツインの出現に、私はそれほど驚いてはいない。

あなたとの結婚によって私は、言うなれば後退を余儀なくされ、会社員になったのだけれど、それが良かったかどうかということでは、私は良かったと思っている。例えば最初の会社勤めて、ほどなくレオーノフが新聞「プラウダ」に、アメリカにおける核シエルター騒動を風刺した映画シナリオ『マツキンリー氏の逃亡』を発表したのを見て、「こんなこと（貿易）のためにロシア語を習得したのではない」と思い、会社を辞めてその翻訳に取り掛かかったりした。その後にあなたの妊娠が明らかになって、また再び商社に就職するという屈折を経なければならなかった。かくて私は結局翻訳の専門家に成れずまた成らなかったのだけれども、そのような存在に成らないでかえって良かったのだと思っている。会社員生活によって世界と日本社会を見る眼がずっと広がったからである。

配属された木材の輸入課で隣の席の年長者は札幌の中学校の出身で、召集により樺太軍に配属され、語学の才が認められて東京外語学校露語科の一年間の委託生になり、北緯五〇度線の諜報任務に就かされた。やはりそこに配属されていた横綱大鵬のウクライナ人の父親と親しかった、と語っていた。戦後抑留されて戦犯とされ苦難を強いられて帰国、貿易が始まるとともに就職してきた人だった。ソ連には懐疑的もしくは批判的であるにもかかわらず、ロシア語は愛している、といった私に似ていなくもない人だった。

木材をやって良かったのは、積取船に便乗してアムール河口の内と外の積出港にやられたことである。アムールはあなたとともに1959年に列車でその鉄橋を通過した大河であるが、中国名の黒竜江にあるように褐色に黒ずんだ河であり、流出する水のため海峡の水も河口に近づくにしたがって黒さを増した。水深も浅くなり、ソ連側の水先案内人に頼ることになる。そこにおいてである、私が、チェーホフはサハリンに向かった際、ここを通過したに違いないと思うことになったのは！ 実はこの本の最初の邦訳は『サガレン島』の名で成されていて、それを私は大泊の図書館で見かけていて、ソ連軍が入る前日、持ち帰ろうとして出向き、すでに無く目的を果たさなかった本だった。そのときの複雑に屈折した哀しい思い出のゆえに、また大学入学後樺太については当分忘れて生きようと努めることになったがために、敬遠して読まずにきた本だった。そして最初のアムール行の後に購入して読み、多大な感銘をうけた。作家は北サハリンに到達後その流刑地を調査、その後南下してコルサコフ（大泊）に至り、そこで日本領事たちと親しく交わり、なんと、私の故郷の村、遠淵についてもロシア名ブツセ湖畔のアレクサンドロフスクの名で記述しているのだった！

チェーホフは大陸とのあいだの海峡の発見者として間宮林蔵の名をあげ、「サハリンの処女探検の権利は疑いもなく日本人に属し、日本人が最初に南サハリンを領有したのである」と正しく記していた。私はそれを含む日露関係史にかかわる一連の文言を、私は作品

の冒頭の章に掲げることになる。それはロシア語で書かれたすべての書物の中で、私にはもっとも重要な一冊だった。

私はソ連、それも主として極東と呼ばれている地域に行き来し、また中国で勤務しながらやがてコーカサス山脈を越えたグルジア（ジョージア）での機械プラント関係の三カ月の勤務に就き、同共和国生まれのスターリンの生地、ゴリ市の広大な記念館を訪ねる機会をもった。また徐々に樺太・サハリンを中心とする日露の関係史を調べるようになった。日ソ中立条約を一方的に廃棄しての対日戦の理由としてのその日露戦争への報復論は、レーニン主義からの逸脱であるだけではなく、それに従っていた青年時代のスターリン自身の言説からも背反しているものだった。また大戦末期の日本俘虜・抑留者は、なんと遠くグルジャにまで連れて来られて労働についていた。己の威光を同郷人に見せつけたかったがためだった。

結局第二次世界大戦末期の対日戦は、領土拡張欲のなせる業だった。また貿易業務の実際を通して八〇年代に入るとソ連経済の行き詰まりは明白になった。アマルリクという歴史家が「非合法」にイギリスの雑誌に発表した論文に「ソ連は一九八四年まで生き延びるか」というものがあり、日本には七〇年代末に邦訳されていて、それを繰り返し読みながら、私はソ連の行く末を占うことになった。

『襲来』が扱っていたのは独ソ戦であり、そこではロシア人はまさに「祖国を護る者」だった。しかし対日戦はそうではなかった。第二次世界大戦でソ連は西と東では、性質の異なる二つの戦争をしていた。サハリン上空で領空侵犯した大韓民航機がソ連機に撃墜された一九八三年、私はソ連の崩壊的激変は避けられず、またそれが望ましい、という結論に到達した。そしてその時に、樺太以来の樺太が最終的に書きうるものになったのだ。私の『樺太よ遠く孤独な』はすくなくからずセンチメンタルな響きがあるが、ロルカの『騎馬行』の冒頭の二行にあやかっただけのもので、このために、一九九一年以降は行けるようになったのだが、行かない。恐らく行くことなく世を去るだろうと思われる。

2章 早大教授 松尾隆（木寺黎二）

ベトナム生まれのフランスの女流マルグリット・デュラスの映画「ヒロシマわが愛」のフランス女性、故郷の町ヌヴェールで大戦末期駐留していたドイツ兵と愛し合い、解放後、ドイツ人は射殺され、彼女は髪を丸刈りにされる。両親は恥じて娘を地下室にかくまい、髪が生えそろった時点でパリに送り出す。朝刊には「ヒロシマへの原爆投下が報じられていた」。やがて映画女優となり、映画撮影のために広島を訪ねて、明後日はフランスに帰るといふ日に広島で恋におち、日本青年と一夜を共にする。そして広島で被爆の実態、

被爆者たちの苦難を目撃して、忘れえぬ傷痕のヌヴェールが癒されるのを感じ、ヒロシマに留まる決心をする。私が1959年にウィーンであなたと別れた後に、ブタペストからブラハに移りながらあなたに決定づけられることになった映画だった。

思うに若かった私は樺太が辛かったので忘れたかったのだ。そのためにあなたに結びついたのであり、被爆女性と結婚したからこそすることになった諸体験をした。あなたにもまだだれにもけして口にしなかったが、最初の子ツヨシを「樺太のヒロシマの子」と呼んだ体験はその最大のものである。

フランス女性にとってヌヴェールとヒロシマが同義語となったように、私においては樺太とヒロシマは同義語だった。以前からそう思っていたのだったが、七十年代に入って樺太の友人・知己たちとの再会が重なり、樺太の甦りがあって、それへのあなたの反応に接してそう確信した。人には期待しながら待つ以外にない場合がある。混血者たちは日本とサハリンに別れて生き、再会の機会を持っていなかった。彼らは待つ以外になかった。それで私は結びでわが遺児にデュラスの言葉を語らせた。「耐え忍ぶということ、そういうことを知ること、それが叡智につながるのだわ」。こうして樺太の本は外でもなく1984年という年に――世に出ることとなった。

前後してあなたが二度目の乳がんで入院、手術を受けついには両乳房のない女性になり、続いて腎臓の片方にもがんが発見され、残る片方がなぜか萎縮してこれでは生きられず人工透析を受けることになった。一級の原因被爆者であるあなたはこれにより一級の身体障碍者でもあることになった。そして一時は転移と疑われる症状の発生があり、私もあなたの死を覚悟する。誤診であることが分って事なきをえたのだったが、この衝撃によって、書ききれずにきた1959年のあなたとの出会いの旅が書けるものになった。こうしてあなたとの出会いから求婚に至る過程を樺太からヒロシマへの到着として捉えた『ヒロシマまでの長い道』が八六年の末に書き終えられる。

しかしながらそれは、平和運動家であり、戦前は木寺黎二の筆名に依るドストエフスキ―学者であり、戦後は本名に戻り、マルクス主義の啓蒙家、平和運動家、学生運動への助言者として生きた早大教授、私が私淑した松尾隆の没後三十周年にあたる年だった。記念行事として文集『松尾隆――戦後を駆け抜けた早大教授』が制作発行されることになった。発起したのは1950年十月の反レッドパージ闘争での全学委員長吉田嘉清以下十四人の被処分者＝裁判被告らを中心とする十月会の人々で、原稿の送付の案内をうけて私は即座に既定の四枚を執筆したが、後で聞くとそれは一番早かった原稿だったとのことである。それもそのはずで私は教授の没後、三日に一度は教授を想って生きていたからである。私は戦前の木寺黎二から松尾隆への移行の間に有ったものについて、思いを巡らして生きていた。そこには「分裂」が有った。と同時に「統一」への契機が有った。こうして私の四枚の表題は「松尾隆における分裂と統一」という表題のものとなった。

一九五二年私は早大露文で学生生活を始めた。文化団体は卒業までソ研（ソビエト研究会）

に属した。

松尾先生は一文（昼間の第一文学部）では教養課程の第二語学のロシア語を担当していて、他にいかなる講座も持つてはいなかった。ロシア語を第一語学とする露文の学生にとっては出席の必要のない授業であった。しかし単位の履修とは無関係に、その話を聞くために出席する学生はいて、私はそのひとりであった。

語学の授業としては手抜きなどというようなものではなかった。そもそも教える意思はなかったのである。ロシア語をちゃんと教える人は他にいるのであるから、勉強したいものはそれに出席すればよいのであると考えており、実際そのように語っていた。自分としては他の人たちがしないことをするのであると考えていて、その日まかせに様々な話をしていたのである。それは或るときには『資本論』についてであり、唯物論についてであり、宮本百合子についてであり、ドストエフスキーについてであり、最近の国会選挙の結果についての論評であったりした。そして私はほどなく先生が五〇年以来分裂している日共で国際派（統一会派）に属する人であることを知ることになった。

露文は主流派（徳田・野坂派）が強く、ソ研はその細胞が拠点とした文化団体のひとつであったろう。樺太に生まれ育ちソ連占領下で一年半暮らして引き揚げた私は、スターリンのソ連イは疑問を抱いていた。しかし周囲の空気に押されるようにして五三年晩秋には日共（主流派）に入った。翌五四年秋に悪名高い総点検運動があり、私は細胞に嫌気がさして離れた。そして五五年夏（六月）に第六回全党協議会（六全協、統一の決議）があったわけである。同年秋までに早大細胞のリーダーであった者——露文が多かった——の全員が退き、代わって新指導部が選出された、私はその一人だった。

細胞内で「教育」担当ということになったが、党員の大半が党分裂を体験としては知らないためにそれを松尾先生にお宅に伺うようになった。こうして細胞総会に先生が出られて話すということになったのである。

以来しばしばお宅に伺っていた。私自身卒業が近づいていた。先生は一九五七年四月から大学院でドストエフスキーについて講座を持つことになっていて、私は先生の下で大学院生活をするつもりだった。ところがそれが五六年一二月の先生の急逝によって実現しなかったのである。先生があんなに若くして亡くなるようなことがなかったならば、という思いとともに、もしも先生がもっと生きていたならば自分はどうなっていたらうという思いを私はなしとしない。

事実は数年ぶらぶら暮らし——この間に二度ソ連・中欧・中国に行き——その後貿易商社に勤務し日ソ・日中貿易に従事して今日に至っている。二年前に樺太を主題とする本が世に出ただけの凡夫である。

唯物論哲学者としてのおよびドストエフスキー学者としての先生についてどなたかが書かれるであろうが、恐らく執筆者は難渋するはずである。それというの書き残されたものがあり、今となっては手掛かりがつかめないといったところがあるためである。

そうとは知らずに晩年にあった先生の語るところを聞いた者として言えば、先生は哲学者としてはあまりにもドストエフスキーに傾倒していたし——言うまでもなくドストエフスキーは唯物論者ではない——、といってドストエフスキーに傾倒する文章や著作をするにはあまりにも唯物論者であった。つまりは矛盾し分裂していたのであって、そのことが座談で多くを語る人であったにもかかわらず、著作をきわめて困難にしていたのである。

それはまたこういうこともある。政治的には日共黨員であり、マルクス主義を標榜する様人ではあったが、文学については別ように考えていたということである。社会主義文学の祖といえ『母』のゴリキーということになるが、先生はほとんど認めていなかったし、「文学においては共産党はだめだ」と言っていた。それは文学を志す者は共産党にはいつてはならないといわんばかりの口調だったのである。真の文学というものは『カラマーゾフの兄弟』のように人間存在の根源を問うものであると確信していた。すでに日共批判を始めていた吉本龍明の「マチウ書試論」などを賞賛していたことなどが思い出される。

唯物論哲学とドストエフスキーの間で深く分裂していたと思われる先生において統一のけいきを与えていたもの、——そのひとつは原水禁運動を中心とする平和運動であったろう。広島はそれがあまりにも深く大きな問題であるために、そこにおいては唯物論哲学とドストエフスキーは交錯し一つに成りえたのである。そしてまたもう一つは、学生運動の指導を含めた学生個々人の教育であったろう。

英文科出身の人であった先生のドストエフスキーへの関心は、一九三〇年代の左翼への弾圧と天候の時代後の「不安の時代」に芽生えたものと推定されるが、私たちの知る先生においては、一九五六年以降のスターリン批判とも重なることになったものである。明らかにになったスターリンの人間像には多くの人々同様に専制も衝撃を受けていた。そしてドストエフスキーの予見性には感心していたものである。なにしろこのロシア作家はイギリスでの産業革命に始まる近代文明そのものに深い疑惑を抱く人であった。資本主義も社会主義もそのなかでのものなのである。その最近における現れがチェルノブイリにおける原発事故であろう。

アインシュタインはドストエフスキーの文学を愛好していた。そしてその人とともに高名な声明を発表したラッセルは二十年代にソ連を旅してロシア革命が近代文明の矛盾を超克するものではないことを見抜き、非ヨーロッパ世界わけでも中国に希望を託した。

ドストエフスキーについて最高の著作をしている寺田透が道元の『正法眼蔵』の優れた注釈者であることを思いつつ、松尾先生について回想すると、幅広い読書人であった先生がやはり西欧派であって——マルクス主義は西欧思想である——東洋と日本の思想には関心がうすかったことに気づく。しかし決して止むことのない米ソの軍拡競争は両者の、その相違はキリスト教の発生にまで遡ることのできる事故を絶対とする力の思想に原因がある八図である。

先生が亡くなってから今日までの三十年間私たちは多くの出来事に遭遇してきた。中ソの対立なども先生は見るのがなかったのである。だから生きておられたならばあれこれの問題について先生ならばどう対処したのだろうかと思うことはしばしばだった。宮本顯治氏を敬愛していた人であったが、はたして今でもそうだったろうかと問うこともできるであろう。

長崎県の出身であってそのためもあって原水禁運動に多くを託していた人だった。晩年の湯川秀樹は仏教の世界観に深く傾倒していたと伝えられるのであるが、『正法眼蔵』を座右の書としつつ私は、生きていたならば先生は唯物論からドストエフスキー（のキリスト教の世界）からも進んで、仏教の空の思想に到達していたのではなからうかなどと、自分にひきつけて思う。ヒロシマについて書こうとしつつ思う。

明らかなことは先生が核の廃絶の思想を自己の思想の中心に据えていただろうということである。このことだけは疑いない。そのような人としてあの時代にあって早稲田でピカイチの人であり、ピッカピカに輝く人だった

1985年8月

（S 32 一文露文卒。商社勤務、著書に『樺太よ遠く孤独な』1984年西田書店刊）

文集の準備の過程でドストエフスキー関連の未完の原稿が発見されたという知らせがあったが、私は気には止めなかった。教授の晩年のドストエフスキーについて知るただ一人の者として、すなわちマルクス主義的ドストエフスキーを書きたいと願っていて果たさずに亡くなったと確信していた。したがって私は、は発見されたという原稿はたいしたものではないと思っていたのである。文集は三十回忌の「偲ぶ会」の集会の日に合わせて制作発売され、そのなかに『ドストエフスキーの芸術』なるその作品の第1章が掲載され、その後に私は編集者たちから全体を入手し、それを読むことになった。

傑出した内容のもので、私はその処理に当たることになる。ことと次第によっては書きあげた小説原稿を訂正しなければならなくなる発見であり、私はそのために作品の発表を先に延ばすことになった。当初は編集者にしたが、同様に教授のオリジナルな論文と正しい込んでいたのだが、翻訳である可能性が感得され、一年を要した調査と研究の結果、ロシアの文芸学者ペレヴェルゼフの1912年の処女論文『ドストエフスキーの創造』と特定した。かくてテキストを入手、改めて翻訳し直し1989年初頭に出版社が決まり年内に出ることになって、ようやくその後小説作品を上梓できる精神状態になった。こうしてまことに遅まきながら、樺太に続いて私は波乱に満ちたあのウィーン友好祭のヒロシマについても、一応はクリアしたのだった。

ペレヴェルゼフの論文は今日までに書かれたドストエフスキー論のなかでもっとも包括的にしてかつその本質を剔抉したものであって、ロシアでは革命後の一九二〇年代絶大な権威を有していたものである。その評判は日本のロシア文学界にも知られ、一九三五年に部分的には翻訳されていた。しかし全訳されることなく大戦争に入り、早大高等学院の英語担当の教官であった松尾隆は戦時下その全訳に従事、かなりのところまで進みながら、戦後に放棄していた。その原因は、ペレヴェルゼフがすでに二十年代末にソ連で、ボリシェヴィキ（多数派）に対立するメンシェヴィキ（少数派）の文学観として弾圧されていて、戦後のスターリン神格化の状況では全訳しても出版できないと思われたがためである。ひ

と言でも私に伝達してくれたならば、私は六〇年代早々には翻訳していたはずのものであった。しかし、皮肉なことに、その場合には私には原水禁運動とのかかわりは生ぜず、その代わりに私はロシア文学者になっていたはずなのである。すなわち私はあなたに会うことはなく、したがって結婚することもなかった。その結果として自ら作品を書かざるをえなくなることではなく、また書きあげることもできなかったのである。

会社員となると同時に、原水禁運動からも離れていた私だったが、1985年からは日本原水協の流れを汲み共産党から排除された人々によって創られた平和事務所に参加していた。参加への要請は代表である行宗一さんからあなた宛てにきたのだったが、あなたは週に二回の人工透析に通院するようになっていて、ひとりで都心に出ることはできず、代わりに私が参加したのだった。もっともすぐに吉田嘉清氏から電話があったが、氏とのあいだには或る理由で疎遠に暮らしていた長い年月があったことを言っておかねばならない。ゴルバチョフが登場したのは、樺太の本刊行の翌1985年のことだったが、すぐにペレストロイカ（再建）とともにグラスノスチ（情報公開）を言い始め、私は予想していたことが始まったと思った。これをやったらソ連は崩壊するのである。そして1986年にはチェルノブイリで原発事故があって決定的となった。

古川和男の英文のトリウム熔融塩炉についての論文に最初に反応を示したのは実はソ連であり、1983年にクルチャトフ科学アカデミー総裁がMSRの共同開発を打診してきているのであるが、もしもこれが実現・実行されていたならば、チェルノブイリの事故もなかっただろう、と言えるのである。実情はまさに起こるべくして起こったのであり、ここでの汚染除去作業に動員され放射線害に苦しむことになったバルト三国のエストニアの元兵士から吉田嘉清が頼られることになり、1990年に平和事務所がその元兵士と医学者を招き、広島大原医研に送った。またその見返りとして翌1991年5月私たちがその国に招かれた。私たちは先ず壁崩壊後のベルリンに立ち寄り、バルト三国を回り、ミンスクとキエフでチェルノブイリの被災者および医者と交流した。モスクワでは、以前はかならず向こうから接触してきた国家保安委員会（KGB）のスタッフが現れず、ソ連国内で異変が起こっていることが感知された。

ソ連からの分離を目指して「人間の鎖」のデモンストレーションがあった年のことである。

独立志向は最も西南のリトアニアがもっとも激しく、直前にソ連による流血の弾圧があり、通訳としてロシア語で話して良いかどうか伺いを立てねばならぬ雰囲気だった。婦人国会議員の案内で同国のイグナリアにあるチェルノブイリと同型の原発に案内してもらい、ロシア人所長にゆるされて計装室まで見学、説明をうけた。乞われて隣の席に座った帰路の車中、彼女はロシアの拡張欲・領土欲を宿阿と罵り、私がその地について何も語らなかつたにもかかわらず、「日本もサハリンを奪われておりますね。（日本人は）座視していいのですか」と問うた。帰国して私は所属する樺太連盟の機関紙にこのことを書いたが反響は大きかった。

戦後数年して大分市を去ったという古川家、その和男氏の七歳下の実弟である雅章氏が町田市つくし野のわが家を訪ねてきたのはその前年のことで、私はあなた同席して兄の研究であるトリウム熔融塩炉について聞いたのだが、その価値については敏感ではなかったと言わねばならない。ソ連では1957年にウラル地方の核開発の秘密都市で大規模な事故があったとのことだが、ソ連の崩壊後ロイ・メドヴェージェフが著作で明らかにするまでは、ソ連国内では報道されなかった。チェルノブイリではそういうわけにはゆかず、クレムリンと共産党からの人心の離反を招き、ソ連の崩壊を早めた。私の関心はそちらの方に有ったのだ。

1957年から数えて三二年ぶり二度目の、ミンスクについては語るべきことは無い。語るとすれば、チェルノブイリ後の白ロシアの首都で、1957年の初めての滞在を書いたは来なかったことである。モスクワに到着した日本原水協の使節団はクレムリンでの首相謁見で、「第二次世界大戦で最大の、二千万の犠牲を払ったソ連国民には、広島・長崎の日本国民の体験はよく理解できます」という言葉を聞いた。今日振返って考えると、ウラルの核事故を知っていたはずの人の口からである。この言葉は、プラウダ以下の新聞の一面で報じられ使節団の行く先々で繰り返された。そして私はやがて不快になり、それは昂じたのだったけれど、自制して口には出さなかった。そしてついに、長崎の被ばく者だった、あなたも知る杉本亀吉さんが、ミンスクでその言葉に接したとき、「言葉を返すようですが」と断わって反論し、ミンスク側は黙したのだった。そのことをゆくりなく思い出した、ということである。

放射線による子供たちの喉に癌が多発していて、同行の広島大原医研の医学者が頼られているのに立ち会って、私がツヨシのことを思い出さないではおれなかった。私はあなたとの出会いと求婚に至る過程は書いていた。しかし心臓に障害をもって生まれ、四歳そこで逝ったあの子、私が心秘かに「樺太のヒロシマの子」と呼んでいた子については、事実そのものは樺太の本でも触れてはいたが、まだ本格的には書いてはいなかった。

それを書くためには普通の文体では役に立たないと思われた。愛好するマルグリット・デュラスの新作『愛人』に過去推量形と呼ばれる文体の採用があり、それと同じものが宮沢賢治の、若くして亡くなった妹とし子を歌った、樺太紀行でもある「オホーツク挽歌」のなかの詩にもあって、それらが参考になった。絶対的な悲しみは普通の時制では語れず、また書けなかった。

キエフでも被ばくした人々と会い、ソ連から帰国。北海道帯広市に帰り、両親に会い、帰路に花巻で下車。初めて宮沢賢治記念館を訪ねる。帯広の賢治研究家から弟の清六氏が樺太の賢治の足跡を訪ねようとしていると聞き、その相談に応ずるためでもあった。花巻の賢治記念館でゴルバチョフのヤルタで拘束のニュースに接する。続いてモスクワ市内でのKGBからみの実弾使用の市街戦騒動があり、年末ソ連の国名は消滅。想定していたことであり、歓迎しこそすれ、すこしも驚かなかった。驚いたとすれば、その終焉が非常にあつてなかったことだった。

あなたは私鉄の電車で透析専門のクリニックに通院していたのだが、透析後の血圧の降下が甚だしくなり、一人では通院できなくなり、また回数も週二回から三回に増え、19188年私は一戸建ての家（土地）を売り、同じ私鉄沿線のクリニックに近い場所の集合住宅に移り住んだ。また同時に会社を退社し、執筆に専念することにした。松尾隆教授のペレヴェルゼフについての沈黙と亡きツヨシの沈黙を重ね合わせて『微笑の沈黙』（1996）を書く。「微笑」はより多くツヨシに係わることだった。

またその中でペレヴェルゼフの次作『ゴーゴリの創造』の翻訳をやりかけたのだが、中止したことを記した。私は自身のドストエフスキー論を構想していて、そのなかにその論文を生かそうと考えたのである。そしてそのことを『沈黙の微笑』には記しておいた。戦前のペレヴェルゼフの翻訳を読んでおり、松尾隆とも面識のあった小田切秀雄さんの評を受ける。弟の小田切進（日本近代文学館初代館長）さんは松尾の早大高等学院での教え子で、夫妻は結婚の媒酌人だった。

戦後学生運動の総括を目指し、東京大学国際派細胞の『一九会文集』と同時並行するうちに、1998年末から、年に二回の間隔で『早稲田・一九五〇年・史料と証言』全六冊の制作発行が始まった。一九五〇の数字は、その年が大分市のあなたの正道「兄ちゃん」も注目し共感していた全学連の反レッドパージ闘争があった年、戦後学生運動のピークだった年からである。私はそれに「松尾隆」を連載執筆したが、それは教授がそれを鼓舞する有名な「所感」を発表していたからだけではない。それに触れた関連する文章は文集『松尾隆』にすでに何編も収録されていた。私は木寺黎二とのペンネームでドストエフスキー関連の業績を残した戦前の教授と戦後本名にもどり、共産党に入りマルクス主義の啓蒙宣伝家と成った教授のあいだに、魅力とともに断絶もしくは亀裂があると感受していた。そのことは『文集』に寄せた拙文「松尾隆における分裂と統一」に記してあった。その後ペレヴェルゼフを訳し、長文の解説を付し、生地の長崎県島原半島の南端、北有馬町の信蔵寺を訪ねた。その庭からはキリシタン殉教の原城址が望まれる親鸞の浄土真宗の寺だった。その「紀行」を枕にかくことになったのである。

もっともそれらが何に起因したかについては、発見された遺稿の処理の過程で明らかになり、訳書の解説に記し、またペレヴェルゼフに係わる教授の「沈黙」とその意味については、『微笑の沈黙』でも記していた。しかし書き足りていなかったのであって、多面的だったこの人は昭和十年代を通じて、『早稲田文学』に依り、同時代の日本文学、とくに転向問題について多く執筆しており、その紹介と評価を私はまだしていなかった。私はそれを『史料と証言』全六回の連載によってすることになった。全部で二二〇枚。木寺黎二の業績に脱帽していた埴谷雄高さんは亡くなっていたが、やはり面識があり、ペレヴェルゼフに関心のあった小田切秀雄さんが毎号賞賛と鼓舞の葉書おくってくださった文章であり、最後の一葉は病院から亡くなるすこし前のもので、「ぜひ本にするように」とのことだったが、実現していない。この先の叙述にも関わるので、その最後の部分をここに掲げる。

「マルクスとドストエフスキーは互いに補完する関係にある。両者はともにキリスト教文明のうちにあり、その相互間の距離は私たちのマルクス、私たちのドストエフスキーの距離よりずっと近い。松尾隆はそのことにまったく気づかなかったわけではなかった。「新しきヒューマニズム」(1948、百三十枚)はマルクス主義を現代のヒューマニズムと規定した講演であり、宗教による救済は不可能だとしている。しかしその批判はそれがなぜ発生したかにまで遡ってなされなければならないのである。そしてそれは次の言葉で終わっているのである。「仏教はどうして発生したのか。日本にはキリスト教よりもはるかに素晴らしい浄土真宗があり、こうした宗教哲学を親鸞はどうして打ち立てえたのか、これは宗教の歴史の基礎としておいに考えてみなければならない問題です」。

述べたようにその庭からはクリシタン殉教の地、原城跡が見える。教授の西欧への憧憬の根底にはこれがあった。しかしその人は同時に背後に親鸞の和讃を聞いていた人だった。そして西欧に深くのめり込みながら、西欧と世界にたいして発信する者が日本にないことを残念に思われる。仏教には歴史哲学が欠けているのである。ビキニ以後の原水爆禁止運動に欣喜雀躍しておられたが、それはこの運動において日本人が史上初めて己を人類の名で語りはじめていたからだだった。

相克として存在していたマルクス(その他)とドストエフスキー(その他)、また西欧と日本は、ヒロシマ・ナガサキを考える過程で、相互に熔解するのを教授は感じていたのではなからうか。人類の歴史はヒロシマ・ナガサキをもってその前史を終え、私たちが生きている現代は、その後史にあたる時代、「ヒロシマ後」と呼ばれるに相応しい時代である。ビキニ後の原水爆運動の高揚に遭遇して、「この運動は日本のコミューンですのう」と島原言葉で語ったとき、教授はコミューン主義(共産主義)をも新しくとらえなおすヒロシマ黙示録、その哲学の樹立とでもいべきものを目指していたのである」。

『史料と証言』誌に私は「松尾隆」を連載しただけではなかった。教授の講演原稿で活字にはならなかったものを編集し掲載している。その内には戦後の原発問題と深く関連する一編「佐野学教授と渡辺恒雄君」(4号)がある。一人は戦前の日共委員長であり、転向によって知られ、いま一人は、戦後一時は東大共産党の組織者で読売新聞の代表者となった人である。カントに依拠しつつ、マルクス主義にはヒューマニズムが欠けているとし、松尾は批判した。

佐野学氏はかつて日本共産党の最高指導者の一人であり、かつて私もかげながら尊敬していたのですが、その佐野氏が終戦後、じつに面白い、愉快な「理論」を述べているのです。『天皇と社会主義』という本を読んでごらん下さい。天皇にたいする一般国民の尊敬の念は、大多数の「国民感情」であるが故に、天皇制廃止を叫ぶことはまちがいである。なぜならばそれはその無視であり、日本国の「特殊性」の否定だからである。しからば一体どうしたらよいのか? 結論を申せば、天皇を社会主義者にすればよい、と言っているのです!(笑声)。何とおどろきいった迷論ではありませんか?(大幅に略)

偽装転向ではなからうかと話し合っていたのですが、本物と知ってまた愕然としました。しかし今日氏の文章を以前のものと比較して読んでみると、転向が偶然でなかったことがよくわかります。「最高指導者」であったことが、そもそも偶然であった。

渡辺は真下真一および瀧川幸辰の口真似をしております。マルクス主義にヒューマニズムを補って、レーニンの段階をもっと高めた新しいマルクス主義を打ち立てるなどと、ばかげた乱暴なことを主張していたのです。

『資本論』は純然たる社会科学の著作です。それは冷徹な論理で書かれています。しかしその中には真理が働いており、それが情熱の火花をちらして読むものに食いこんでいます。真理は冷ややかですが、冷ややかですから温かい。弁証法がここにあります。熱いものは冷たく、冷たいものは熱いのです。『資本論』を貫いている論理は反映能力のいたって低い上記のごとき輩には冷たいものらしい。しかしそれを我々が正しく反映するならば、この著作が最も偉大な情熱のつぼであることを、汲みとりうるのです。

私はまた著訳書をもつ四人の露文関係の故人、先輩・友人について記した。その名は小林勝、古林尚、松岡信夫、喜入真である。他に宮沢俊一がいる。

3章 樺太のヒロシマが導く

先に1988年に弟の雅章氏が夫婦で町田市つくし野の一戸建てだったわが家に訪ねてきていたのだった。またその後、私がソ連極東に出張中で不在だったときに、娘を連れて見えた、と聞いた。そしてその後にあなたの状態が悪化し、ひとりでは電車で通院できなくなつて、持ち家売り、通院する専門クリニックに歩いて行ける川崎市市宮前区の集合住宅の家に移り住んだ。今度は弟氏に案内されるようにして当の和男氏が訪ねてみえた。述べたように挨拶だけにして私は外出したのだったけれど、敗戦時には熊本の高五郎にあり、京大に進み、原子力発電所の研究者になったその人は、自身の研究について語り、ただそれだけについて長く語り、他のことは一切語らなかったとのことだった。フクシマ後に気づくことになったのだが、それは幼馴染で原爆被爆者となったあなたへの唯一可能な挨拶と信じていたためだったと思われる。その翌年の二〇〇一年に、一般向けとしては氏の最初の啓蒙書『「原発」革命』が上梓され、あなたは贈呈されていたが、私は手に取ってみようとはしなかった。当時の私の切実な関心は、差しあたっては原発にはなく、別なところにあったのだろうか。て、日本とエストニアで交わった医学者が、チェルノブイリはソ連

だから起こったのであって、日本を含む資本主義諸国では起きない、と言っていて、これに影響を受けていたのだったろうか。私は回り道をしていたのだったろうか？

樺太については日本人もまた歴史書を書いている。西鶴定嘉——大分県人で松山の愛媛師範学校卒、大泊中学校の前身の樺太中学校の教諭を経て、『樺太の歴史』によって樺太師範学校の教授となり、この本は戦後も復刊され、私は『樺太よ遠く孤独な』をこの方には献呈していて、書評をうけたのをきっかけに入会した樺太連盟の新年会でお会いした。「あなたの本は樺太以外の人にも分かるように書いているので良い」と褒められたが、そうだろう、私は樺太を特殊な問題としてではなく、普遍的な真実を現すものとして描きたかったのであり、そのためにあなたを配偶者としたのであり、「樺太のヒロシマの子」の父親となったのであり、樺太の地名を表題に掲げる作品のなかで、結語を語るのはマルグリット・デュラスの言葉の想起を求めるその子だったからである。「耐え忍ぶということ、そういうことを知ること、それがまた、恐らく、叡智を学ぶことになるのだわ」というものだった。

この本は樺太引揚者が多く住む北海道で広く読まれ、またその余波として国際的な反響をも呼んだ。

両親がユダヤ人とロシア女性でソ連に生まれ、一家はイスラエルに移住。しかしそこでのパレスチナとの対立に嫌気がさし、フランスに移り国籍を取得、彼女はパリ大で日本語を習得、樺太Ⅱサハリンをめぐる日露の対立がユダヤとアラブの対立と酷似していると感受、それを研究することになった女性がいる。日本の自動車メーカーの海外向けの奨学金を受けていて、レポートを提出するためだったようで、北海道大学のスラブ研究所の紹介による来客でああなたの和食による接待を受けた。

あの本には私が大学生活のなかで共産党に入ったことも記していたのだが、「樺太引揚者なのにどうして？」と思ったようで、その理由を質しにきたものだった。私はあなたとの出会いだったあのウィーン平和友好祭の旅によって共産党を去っていた。しかし選挙では共産党に投票して今日に至っている。

樺太を占領したソ連軍は日本の新聞社の施設と人員を利用し、『新生命（『生活』の誤訳）』という日本語の新聞を発行した。私はこれによってソ連を勉強したのだったが、崩壊後のサハリンにも行って来た女性によると、「まったく一部も残っていません。日本語だったので捨てられたのでしょう」とのことだった。その新聞は包み用紙として、一部の引揚者たちが持参し、函館で米軍の調査官の知るところとなり、積極的に回収され本国の国立図書館に所蔵された後、ハワイ大学に移された。これを基に同大のステファン教授は本を書いており、彼女もそれによって『新生命』の存在を知り、サハリンで調べたのが全部失われていたのだった。とするとそれは現物が一部ハワイ大に残るのみで、写しが日本の国会図書館に所蔵されていた。私は自著の執筆の際には目を通しており、全体の五分の一が有るのを確認していた。函館の米軍調査官がいなかったならば、一部も残らなかった、貴重といえど貴重な資料である。思えば私が日本に非転向の共産主義者がいたのを知ったのも、

その新聞に依ってであり、国営タス通信配布の府中刑務祖を出る徳田球一、志賀義男らのよく知られた写真はこれで見て、鮮明に記憶しているのである。

チェーホフの『サハリン島』における、親日的でありながら厳密には国際主義的な記述。それは、その名がまったく挙げられていないにもかかわらず、シーボルトの名著『日本』に基づいていることは明らかだった。ソ連側が忌避・黙殺しているにすぎなかっただけのことだったのだが、崩壊後にサハリンに現れた大学の新しい郷土史教科書に接し、時代の変化が知られた。サハリンの地名が清代の在北京のポルトガル宣教師団製作の地図によることを記し、チェーホフが記さなかった依頼者の清国皇帝康熙の名まで挙げていながら、当のチェーホフの名は伏せられているのである。奇怪かつ異常であり、その秘密は世界に先駆けて一九八三年にサンクトペテルブルクで刊行された『日本』の露訳にあると思われ、探し回って日本でただ一冊神奈川大にあることが分り、稀覯本室で閲読がかなった。立派に製本された本だったが、扉に国家による閲読のために見本として翻訳制作されたものであることが銘打たれていた。通読すると、サハリン発見にかかわる日本人の貢献が完全かつ徹底的に削除されていた。つまり検閲はそのための事前の処置だったのである。

このことから疑いの余地なく明瞭となったことがあった。すなわちチェーホフは、サハリン行以前か以後かは定かではないが、いずれにせよ『サハリン島』執筆以前には、露訳の歪曲の事実を知り、日本関連の記述は全部シーボルトのドイツ語原書に依拠し、その翻訳者として執筆していることである、しかしそのチェーホフもシーボルトとその『日本』の名は伏せているのだが、その理由は明らかだった。それを明かすならば、『サハリン島』が出版できなくなるからだった。そしてそのことから、日露の最初の外交的接触から第二次世界大戦までの、領土問題を中心とした全関係史が明らかになった。こうして私は『日露領土紛争の根源』の執筆に入り、二〇〇三年にそれを上梓した。

原稿が完成し、校正も終わった段階で、私は実際に出版された本と、私が依拠した検閲用の本との異同を確認する必要を感じ、サンクトペテルブルクに飛び、帝政時代の図書の所蔵ではロシアで最大のシチェドリン図書館で調査した。『日本』の翻訳本は検閲本だけでとり止めになり、一般には市販されていなかった。拙著はこのことを後書きに記して出版されている。

久しくロシアに行き来して暮らして来ながら、ヤルタは私が行きたいとは思わなかった土地だった。理由はそこが、樺太喪失の原因となった米英ソによるヤルタ会談の地だったからである。そこにも今や晴れてサンクトペテルブルクの帰路に訪れることができた。会談の場所であるリヴァディア離宮はヤルタ会談記念の歴史博物館となっていて、その前で訪問客相手の物売りの女性から手編みの帽子を、私はあなたへのみやげとして買っている。

翌二〇〇四年は日露戦争勃発から百年の年であるが、開戦早々に駐露大使館の武官だった日本の広瀬武夫が旅順港閉塞作戦で戦死。これはヨーロッパで報道されており、療養た

め南ドイツの温泉地にあったチューホフが、その死を悼む讞言をいながら死去したことを、妻クニツペルの弟が証言している。すなわちそれはチューホフ没後百年にも当たる年でもあったのだ。モスクワの南メリホヴォに在る作家の領地跡の記念館で先ず演劇祭があり、これに出席、三週間後の同国際学会での報告者にエントリーし、主催者であるモスクワ大教授に原稿を手渡した。

その際、長く外国人には閉ざされていた生地、黒海沿岸のタガンロークを訪ねたが、まことに有益だった。古くはスキタイ文明の中心地、近代になって国際交易で栄えたこの市にはイタリア商人たちが住み通りにその名が残り、その文化が伝わり、また新旧七つの異なる宗教宗派が共存していた。また商店だった生家には漢字の入った中国の茶箱があり、アジア人の血が入っていた作家の東方への関心、その国際主義の原点が確認できた。ロシアは北と南では歴史と民俗が違うのである。

一旦帰国して今度は国際学会に行く。私の報告は長すぎるということで短縮され、シーボルト関連の記述は削除され、すでに報告集に印刷収録されていた。このため実際の報告は元の原稿に即して行わざるをえなかった。ともあれ一石は投じたのであり、初めてのことであり、とりあえずは満足しなければならなかった。それらの経緯の一切を記し両稿とともに掲げて、友人だった外語大出身のトロツキー学者の藤井一行に助けられながら私はこの年初めて自身のホームページを立ち上げた。新聞社の目にとまり、一文を書き、少し遅れてテレビで話す機会もえた。思いがけず、また嬉しかったのはシーボルト学会からの高い評価だった。研究者たちは『日本』の初めての外国語訳がロシアで成されたことは知っていた。しかしそれがどんな翻訳になっていたのかは誰も調べてはおらず、国際的にも私が初めてそれを成していたのである。

日本に「ドストエフスキーの会」という学会がある。一九七〇年に早大露文科関係者よってつくられ、私も一九八八年にペレヴェルゼフの原書をその図書館から借りだすさいに会長の新谷敬三郎教授に世話になり、入会をすすめられたので入会していた。また訳本が出てからは、新谷氏は亡くなっていて、会長は大学では後輩の木下豊房千葉大教授に代わっていたが、その定例の研究会で訳書について報告した。以来ずっと会に所属し、二〇〇〇年に千葉大と西北大を会場として国際ドストエフスキー学会が行われた際にも、聴講者として出席していた。しかしその後『日露領土紛争の根源』に集中した二年ほどはその集まりには欠席していた。

それを世に出すことができ、またメリホヴォ学会の後に札幌で国際学会があり、さらにまた東京の日本近代文学館でのチューホフ記念展に係わって一段落し、私はふたたびドストエフスキー関係の集まりに顔を出すことになった。ドストエフスキーの会とは姉妹関係にある「ドストエフスキー全集を読む会」という一般読者の会があり、そこに『ドストエフスキー 父殺しの文学』という本を出した鶴亀育男という外語大教授が講演者として招かれていて、私はそれを聞いた。フロイドに心酔する人物であってそれに依拠してドスト

エフスキーを解説しようと努め、やたらにサディズム（嗜虐嗜好）とマゾヒズム（被虐趣味）の二語を連発する軽薄な感じの講演であった。

集まりの後、ビールを飲む席が有り、私がペレヴェルゼフの訳者であることを告げると、相手は「あの本には世話になりました」と答えた。さっそくその『父殺しの文学』を求めて読んだ。たしかに論の展開でペレヴェルゼフを引用している箇所があったが、正しく理解引用している箇所とともに、歪曲している箇所とがあって、後者は不愉快であった。またその人は『カラマーゾフの兄弟』の新訳を出し始めていたが、国際ドストエフスキー学会の副会長の一人でもある木下氏によると誤訳・奇訳が多いとのこと、会のHPに発表された批判文を読むとなるほどと納得された。強調されねばならないのは、先行諸訳で正しく訳されている箇所です。そうした現象が生じていることであり、かつ原文を恣意的に改変して面白可笑しく立論している著書まで出していて、厳しく批判されて当然だった。

ペレヴェルゼフは南ロシアのハリコフ市の生まれ、同地の大学の物理数学部に学び、ロシア社会民主党（革命後に共産党）の革命運動に従事、捕らえられて西シベリアに流刑。『ドストエフスキーの創造』（1912）で文芸学者として登場、一九一七年の革命後にモスクワ大教授に就任、ドストエフスキー文庫を開き、夫人宛ての手紙を編集出版、また未公開だった『悪霊』のなかの「スタヴローギンの告白」の章を公開。それについての評価である「ドストエフスキーと革命」を執筆、一九二一年のドストエフスキー生誕百年祭で報告、同年刊行された『創造』の新版に「序文に代えて」と括弧で記し、冒頭に据えた。しばしば社会主義に反対する小説と非難されてきたこの小説をマルクス主義の立場から擁護したものだ。また後にソ連作家同盟の発足、社会主義リアリズムの強調に対する流れに反対し、「マルクス主義文芸学の必要な前提」で「文学が政治を代行できないように、政治もまた文学を代行できない。両者に必要なのは相互理解と相互援助である」と主張した、しかし二十年代末この両論文は激しい非難攻撃をうけ、ペレヴェルゼフは「失脚」、文学界から葬られた。

著者は出身のハリコフに隠棲、ロシア古代文学の研究に従事、一九六七年に没していた。一九八二年に一巻選集が出て復活したが、弾圧の対象となった二つの論文、および非難・攻撃者に対する反論である「ロシア文芸批評におけるドストエフスキー」は収録されなかった。これは結びに「ただマルクス主義文芸批評のみが、ドストエフスキーの本質を解明しえたのである」とあるように、自説の擁護に貫かれたものだった。すなわち批判者たちの方がマルクス主義に反していることを明かにするものだった。

ソ連崩壊後血縁者によりさらに新たに一巻選集が編まれたが、事情は変わらなかった。二〇〇〇年日本で国際ドストエフスキー学会のシンポジウムが行われたが、ロシア側の団長格のサラースキナ女史がその報告のなかで「ドストエフスキーと革命」からの肯定賞賛的な引用をおこなったので、「あれは未だ復権していませんね」と質すと、彼女は「私が最近『悪霊』関係の論文集に収めて出版しました」と強調した。

それを含め、ペレヴェルゼフの『ドストエフスキーの創造』は今日に至るまでの、おびただしいドストエフスキー論の中でもっとも包括的でありかつその本質を剔抉した唯一のものである。ソ連崩壊後にも、それを予見していたマルクス主義者として評価されている値打ちのものである。しかしながらペレヴェルゼフが本国ロシアで長く闇に葬られ、その余波として日本でも全訳が1989年の私、瀬川修を待たねばならなかった損失は大きく、二十一世紀に入って日本で突如ドストエフスキーの「第一人者」として現れた鶴亀教授に見られるように、拙訳書を読んでも、その価値を把握しきれずに、利用できる箇所のみ引用に留まっていただけではなく、拙訳文の歪曲的引用があるのが不愉快だった。その『ドストエフスキー』は「父殺しの文学」の副題を有し、『カラマーゾフの兄弟』が表面上では「父親殺し」をテーマとしているからなのだが、これはドストエフスキーを矮小化するものであって、あえて副題をもうけるとすれば、「唯一絶対神有無の文学」となるべきものである。

非常に危険であるにもかかわらず、また実証としてスリーマイル島とチェルノブイリがあったにもかかわらず、「安全だ」とする神話が横行し、果ては「原発ルネッサンス」が高唱されるに至った2005年以降の時代、その浮かれた風潮は核エネルギー炉以外の分野にも影響しないではなかった。遊戯にも似たドストエフスキー論が歓迎される風潮が同時並行に発生したのである。それを正すべく、私はペレヴェルゼフを宣伝し、足りていない箇所を補足すべく『ドストエフスキーとは何か』（七百枚）を執筆、2008年に刊行した。

これを執筆しながら、私はしばらくぶりでレオーノフにも回帰している。もっともそれは『日露領土紛争の根源』の場合にも起こっていたことであり、私はチェーホフの先に掲げた文言をここでも記し、その際それらを賞賛するかのような、レオーノフのチェーホフ論のうちの文言――「祖国を愛しつつも、彼、チェーホフは彼女（ロシア）に媚びなかった」を、補強補足するものとして掲げていた。またレオーノフは「トルストイが詳細に展開するところで、ドストエフスキーは対数計算するのであって、これが私に近いのです」と語ったことがあった。大体が、『スクタレフスキー教授』が工学者を、『ロシアの森』が林学者を主人公にしていることから知られるように、科学に明るい作家なのである。それが1962年のインタビュー形式の評論「作家の仕事」のうちで、アインシュタインが、ドストエフスキーについて「この作家から受けたものはガウス（ドイツの大数学者）から受けたものよりも大きい」と述べていることを挙げ、「ここに文学研究の今日の課題があります」と語っていた。

「人間はわれわれに見える外皮によって限定されてはいない。彼の周囲には彼固有の雰囲気が存在しており、それもまた人物像に伝えられねばならないのである。」

ドストエフスキーは人間存在の複雑さを伝えることができた。彼は普通の眼にはわからない赤外線と紫外線を捉えていたようだ。ドストエフスキーは存在したもののだけではなく、

存在しうるものを描いた。すなわち人間関係の諸傾向の極端な極限的表現をおこなった。スタヴローギンはびっこの女に求婚し法律上結婚するが、これは現実にはありえなかった。スタヴローギンのような過保護の女々しい貴族の青年は彼女に触れることさえなしえなかったはずなのであって、彼女の姿、彼女の皮膚を想像すればそういうことになる。しかしドストエフスキーにとっては、スタヴローギンの没落の表現として、彼らの親密な関係が必要だったのであり、彼はそれを創造したのである」。

まだ「社会主義リアリズム」が高唱されていた時代、同時代のソ連文学の欠陥として、「テーマの矮小」を挙げて始まるこの評論は、私は全文翻訳していたのであるが、発表のあてがなく放置し、提起された問題の探求に積極的に向かわなかった。それが思いがけなくもドストエフスキー論を書くことになって、少なからず勉強し、結びでそのことを記すことになった。アインシュタインの世界観が日本の空海のそれと非常に近いことをも記した。それらはともに私が言う「ヒロシマ哲学」を構成するもののなのである。

+

サハリンには会社の業務の関係で、日本領ではなかった北サハリンには行っており、南も私が再訪せずに死ぬだろうと思っているのはかつて住んだことがあり、従って9も井出のある南の大泊や遠淵であって、そうではない北の敷香、ロシア名ポロナイスクにはやはり仕事の関係で行っている。案内されて北に向かう道に立ったこともある。早大露文の戦前の卒業生である杉本良吉と女優岡田嘉子が一九三一年に北緯五十度線の国境を越えてソ連領に入ったときに宿泊した町であり、馬車を走らせた道である。樺太で生まれ育った日本人である私にとってこれは悩ましい事件であり、あるいは西北大露文に進んだ遠因の一つとさえいえた。

その結果私は一九五七年の最初の訪ソで岡田さんそのひとを見ることになる。クレムリンでの首相との会談が終わって帰ったホテルで、エレベーターを出ると近くの長椅子に日本人女性の顔があった。待ちくたびれて放心状態で、わが団の年配者が「岡田嘉子じゃないか!」と言って近づき声をかけた。「通訳として」お役にたきたい」という申し出だったが、その筋から差し止めたられたのであろう、その後は現れなかった。しかし二年後のウィーンの帰路には許されていたようで、あなたは会っており二人でとった写真が残っている。その後来日し、演劇活動にも従事したようだ。帰国し、ソ連の崩壊後に、杉本良吉が入ソ後早い時期に銃殺されていたことが明かされ、集合墓地に花を捧げる日本のテレビの映像に写しだされた。

その樺太であるが、かつて住んだ南の大泊（コルサコフ）を中心とする亜庭湾沿岸地方に人が入れるようになったのは、樺太の本を書いてから五年たった一九八九年になってである。中学校の同窓会で再訪者の報告を聞いた。第五回の卒業生である句集『凍港』（大泊港は結氷する）の俳人山口誓子氏の再訪記が朝日新聞に出た。ゆるやかな斜面にたつ全木造の校舎はソ連占領後にはその兵舎として使われて入ることはできなかった。それも朽ち

果てて残ってはいなかったが、隣接する寄宿舎は旧帝政ロシア軍の兵舎だったので、全煉瓦作りだったので残っていた。日本時代の校舎で残存していたのは天皇の奉安殿だけである。鉄筋コンクリートなので爆破しなければならず、敗戦時に四十五万人だった南樺太には各地に相当数が残っているようである。天皇皇后のご真影を収めた建築物だったのであるが、鶏小屋になっていた、と聞いた。

遠淵村にも最初の一人が入り、続いて北海道の二十数人が団体を作って入り、その人々の呼びかけで文集『樺太遠淵村』が制作され、函館で報告会があった。敗戦時人口三千の村から一五〇人が出席した。最も西は大分から一人が来ていたことを言っておこう。サハリン残留邦人一時帰国促進会が作られ、その招きで、わが幼馴染のヨッポイマツの混血者たちも来日し、わが原点であった露日混血のキヨミとも戦後六十四年目にして東京で再会を果たした。ソ連の崩壊後、日本では病気のうちには入らない病気、しかしサハリンでは不可能だった病気で亡くなっている。

ソ連が崩壊してからはそこにも行けるようになり、多くの人たちが再訪するのだが、述べたように私は行きたいと思っただけではない。そこで過ごしたソ連占領下の最後の時期、引き揚げてからは二度とは見ないものとして見て暮らしたために、その思い出が妨げになって、行く気がしないのである。クロボトキン生きて居るならば話は別だが、ユダヤ人だったと思われ、とうの昔にイスラエルかアメリカかに移住しており、そして今では亡くなっているだろう。

そして振り返って、大分市生まれ育ちのあなたにとっての原点を考えた。そしてそれはあなたがまさにあなたになったという意味では、そこは大分市ではなく、また先祖の墓地がある宇佐市でもなくて、広島市の被爆した地点、中心部の白島町ではなかろうかと考えた。もちろんあなたはかつてそこにもう一度立ってみたいなどと言ったことはなく、事実行っていないのであるが……。

最初はあなたとの縁で、後には会社業務の関連でソ連人を案内して何度か行っていた広島である。しかし或る年からそこに樺太以来の親類縁者が住むようになって意味合いが変わった。母方のすぐ下の妹である叔母が、引き揚げて後、函館で結婚、夫が広島高等工業（現広島大）の出身で広島市の缶詰会社に勤めることになり安佐南区に住んだのである。そのご主人が亡くなって葬儀に行き、小型バスで火葬場に向かう途中、思いがけなくも窓外に「戸坂小学校入口」の表示を見かけ、私は思わず内心「ここかあ！」と声をあげた。あなたは火を逃れ、河を歩いて渡り、指示にしたがって当時は戸坂村と呼ばれていた村の国民学校まで歩き、収容されている。そこが戦後に広島市に吸収合併されて区になっていたのだった。

それから数年して今度は叔母が亡くなってやはり葬儀に行き、同じ葬儀会社の宿泊施設に泊まって翌朝、カーテンをあけて眼前に小さな川が流れるのが見、私はまたもや「この川なのか！」と思ったであろう。疑いもなく太田川に注ぐ支流のひとつであるその小川が、原爆の年の九月台風で増水し、あなたは兵士に背負われて駅の助役の家に連れて行かれた

のである、そのことはシベリアの車中で聞き、本にも記していた。私の内に、あなたの被爆地点から戸坂の小学校までを歩いてみたいと思うことになった。

問題はそのルートだったが、それを教えてもらうには恰好な人がいた。生まれ育ちは福島県の社会心理学者なのだが、志をもって広島に住み、広島大原爆医学研究所の心理学の専任講師の傍ら、在韓国の被爆者の支援活動なども手掛けたりする社会活動家となった渡辺正治氏だった。その所長であるS氏らとともに一九九一年春のベルリンに始まりミンスクとキエフで終わった旅では親しく行をともし、お付き合いはその後も続いていた。

「途中に山があり、その東西に道がありますが、奥さんはどちらを通ったのでしょうか」と問われたが、そのうちに自分で調べ、経路図を途中の写真とともに送ってくださった。もっとも私がそれを実際に利用したのは、数年遅れて、その時氏はすでに亡くなっていた。

私は長崎のシーボルト記念館に所用があって行き、その帰路広島に下車、従弟の奥さんに車で案内されて、あなたが被爆したといっていた安田女学院の前（の住宅地）に立った。校門をくぐりぬけて入ると、原爆死した教員と生徒の名が刻まれた慰霊碑が有り、折り鶴に覆われていた。川に向かって進むとすぐに「被爆者たちが渡りました」と記された吊り橋に遭遇して、不思議に思った。あなたは川に入り歩いて渡っているからだ。後に案内者が調べてくれて、その学校が原爆後南に五百米移動して建て替えられたものであると知らせてくれた。

被爆体験の概略は知ったうえでの求婚だったが、細部にわたって知ることになったのは、結婚後であって、それも長い期間にわたって、かつ断片の継続としてであった。夫婦になっただけでなかったならば、私が生涯知ることがなかった物語である。大分市での結婚式の後、別府温泉での夜、あなたは「わたしは妊娠しないと思う」と言い、私は黙し「なぜ？」とは問わなかった。やがて川を歩いて渡っていて局部から時期はずれの大量の出血があったことを聞き知る。広島で知り大分市で再会した山田女医先生に話したところ、「わたしもその時間にそうだった」と答えたとのことだった。あなたはそこから、妊娠する機能が破壊されたかもしれないと思うことになったようである。しかし子供は欲しかったから、予めの避妊には抵抗したのだ。

パンツはその場で脱ぎ、川の水で洗いはき直して進んだ、と私は思いこんでいた。尋ねて確かめるまでもないことだった。ところが、である、或る時、血まみれのパンツは脱いでそのまま水中に捨てたことをあなたの口から聞いて驚いた。とすると、新しいパンツは何時どこで得たのだろう。聞く気持は起きなかった。

「戸坂での日々を書いてみたら」と勧めたことがある。「しょっちゅう熱が出て、事柄の日の前後関係がはつきりしないので、とうてい書けない」ということだった。

戸坂小学校を訪ねてみたが、校舎は建て替えの際に当時の位置よりから高台に移されていた。出水のさいに避難し一時世話になった駅員官舎らしきものは残っていたが、路線そのものは廃止されていた

私はあなたに会う前すでに東京で、また最初のソ連行の団で何人かの被爆者に会っていた。しかし箱根・熱海以西には行ったことがなく、1959年あなたに求婚するため大分に向かう途中、下車して初めて広島を訪ね、原爆資料館に入った者である。被ばく者との出会いがロシア語がらみであるという特殊性を持つ。

会社員になって二年目、アムール河口の木材積出港からの帰路、珍しく揚地が広島と決まって、船が江田島沖を通過していたとき、折り返しアムール行の電報が入り、あなたに冬物の衣類を持って広島に来るよう電報を打った。会社からの書類も必要だったのであなたが出張扱いで広島に来たものである。

広島県では初のソ連材の外材輸入協会によるテスト輸入で宴会に呼ばれ、一泊して翌日広島駅にあなたを迎え、平和公園内の映画『ヒロシマわが愛』の舞台となったホテルに宿泊、二度目の資料館の見学をした。ウィーン友好祭のプログラムにはダッハウのナチス強制収容所跡の展示館行が組まれていて、それに誘ったときのことだ。あなたは「そんなものは見たくありません」と激し、「私は会議で、何度か広島に行きましたが、資料館には入らないのです。あれは原爆を体験しなかった人のために在るのですから！」と激し、私はショックを受けた。「女の髪で編んだテーブルクロスが有るそうです」と好奇心あらわに言ったためだった。私はあなたが原爆で髪を一度全部失ったことがあるのを忘れていたのだ。だから私はそのあなたがどのように陳列物を見るのが気がかりで、後ろに付いてくるあなたを何度も振り返って見たものだ。あなたは体を前かがみにし、私の足の動きを見て歩き、陳列物を見ようとはせず、顔を上げずについて来た。まるで陳列物の間から亡霊が出てくるのを、あるいはまたその中に引き込まれるのを怖れるかのようであり、面白い見物を見た今も目に浮かぶ。あなたは館内を一巡しながら、陳列物はまったく見なかった。公園内を逍遙し、外国人にケロイドを見せ、見料を請求したことで「原爆一号」の異名をもつことになった旧知の人物の土産物店にも立ち寄った。あなたと過ごしたただ一度限りの広島である。

あなたと結婚することによって私は樺太という故郷の喪失者がヒロシマに到着したのだと考えてきた。私の最初の作品『樺太よ遠く孤独な』が樺太にヒロシマを探る試みであったとすれば、第二作の『ヒロシマまでの長い道』は樺太からのヒロシマへの到着を扱っている。

あなたは連続してがんに襲われたとき、「全身からヒバクシャが噴き上げて来たみたい」と悲鳴をあげた。あたかもそれまでは、被爆者であっても被爆者ではなかったかのようだった。しかし私の「ヒロシマへの到着」は2011年3・11の福島原発事故以後、すなわちフクシマ後に修正もしくは拡張を迫られることになった。他でもなく古川和男氏によって、その著『原発安全革命』（2001年の『原発』革命の増補改訂版）によってだった。そしてまた、氏の後継者たちに教えられて読むことになった、古川が多分に依拠した

米オークリッジ研究所ワインバーグ博士の『最初の核時代』（1994、英文）によってだった。

一九九八年キュリーらによって原子核の分裂現象が発見され、その際に発生する膨大なエネルギーが、アインシュタインの「物質量とエネルギーは相互の変換が可能である」という相対性原理（1905）によって計算できるものとなる。この原理は原爆にも利用できるとともに、平和目的の発電にも利用できるものであり、一九四五年の五月、原発の開発に先立って、ワインバーグ博士は、師ウィグナーとの共著「トリウムを利用した液体燃料循環型の原子炉」のなかで、すでに「軽水炉で冷却できないと、燃料が破損し、プラント全体が放射能で汚染され、修復はきわめて困難になる」とフクシマを、遙かにはるかに先立って正確に予言する言葉を残していた。これは一九五八年刊の原子力発電の教科書に収録され、古川和男は一九五九年、すなわち私たちのウィーン滞在中のあの年、ロンドン留学中にこれを読み、自身この研究開発を生涯の課題とすることになっていた。

ワインバーグは米国立オークリッジ研究所所長として原発の開発に従事、また冷戦の勃発とともに要請されることになった潜水艦の核エネルギー炉の開発にも従事した。これはウランを利用した固体燃料の軽水（普通の水）炉だった。しかし陸上の公共用の炉では、プルトニウムその他の有害物質を産しないトリウムを良しとし、それに適した液体炉、すなわち熔融炉の開発を目指し、大きな成功を収めた。しかし核弾頭のためにプルトニウムを必要とした政軍産共同体に圧迫され、その研究は禁止に追い込まれた。このため潜水艦の軽水炉が上陸してき、それが公認の陸上の発電用原子炉となったのである。

古川和男博士は「序」で記したように素直に「（原子）核エネルギー」と言えがいい、とは述べている。

atomic bomb が原子爆弾と訳されたことの影響で、その後に nuclear reactor が登場しても、日本では核エネルギー炉ではなく原子力発電炉、つまり原発と称されてきた。これが日本で独占的に跋扈したウラン軽水炉の呼称だった。しかし正しくは核エネルギー炉と言われねばならないものである。

さてこの原発であるが、これは普通の発電とプルトニウムの双方の取得の目的とする準軍事炉であり、このため図体は巨大と成り、操作もまた複雑で大事故は避けられなかった。序で述べたように、ワインバーグは起こりうる過酷事故に心痛し、憂鬱症に陥り、陸上の軽水炉を「ファウストの買物」と罵るようになった。繰り返すことになるが、ゲーテの晩年の詩劇『ファウスト』の主人公が悪魔メフィストフェレスの惑わしによって行った取引に例えたのである。「悪魔の買物」と訳してもよく、事実それによる部分訳がある。鬱病は昂じ、所長職の解任の動きがおこり、ついには辞職を余儀なくされた。かくて、疑いもなく古川の助言があつて、救済を求めて広島と長崎を訪ね、悟るところがあつた。原子炉の世界で大統領とまで称えられながら、そこから排除された己の生涯を核エネルギー時代の最初、第一期の出来事と概括した。そして来るべき第二期が、自身が手掛けたトリウム熔融塩炉の時代となることを願いかつ信じ、1994年に自伝『最初の核時代』を公刊す

る。それは結びが「残念なのは、私が真正な「第二の核時代」を見られないことである」と終わるものである。

古川和男はワインバーグが中断せしめられた仕事を受け継ぎ、一九八五年にF.U.J.I(不二、富士)として理論的には完成した。残念ながらその多大な努力にもかかわらず、ワインバーグが米国で被ったと同じ運命をたどらなければならなかったものであり、フクシマの年の一二月に八十四歳で亡くなった。しかし生前に事業の発展のためにNPO法人ITER MS、すなわちトリウム熔融塩国際フォーラムおよびTTS、トリウム・テック・ソリューションを発足させていて、その事業は後継者たちによって継承されている。

私はこの古川和男の業績を称え宣伝すべく、二〇一四年八月に『トリウム原子炉革命』を上梓した。「古川和男・ヒロシマからの出発」を副題に記した。それはなぜだったか。古川氏の試みが『ヒロシマまでの道』の中の、私がシベリアの車中であなたの両腕から手の甲にかけての火傷の痕に気づいた箇所に関連していたからである。

「(十一月に) 大分に帰りましてね」と彼女は始めたろう。

「噂を聞いてすぐに小学校の同級の男子が四人見舞いに来てくれたんです。ところがわたしの状態があんなにひどいとは思っていなかったのですね」

大分に帰った彼女の(一度髪がすっかり抜け落ちた)髪の長さは、戦後、髪を伸ばしはじめたであろう男子の友達のそれよりも短かったろう。一度はすっかりむけ落ちたというその皮膚が完全にもとの状態に戻っていたはずはなかったろう。訪ねてきた男友達はお化けのようなかつての女友だちを見たと思われる。

「わたしを一度見るなり顔を背け、その後は互いに顔を見合わせて話し、ちらりとわたしを見てはすぐに顔を背けるのです。とうとう逃げ出すように帰って行ったのですが、その姿の可笑しかったこと」と彼女は真に可笑しように口に手を当てて笑ったろう。

ど肝を抜かれるような話であり、実際彼は度肝を抜かれたのである。彼らが去った後、彼女は泣かなかったはずはないと彼は思ったろう。

フクシマの後、古川和男に誘われ、テレビ局で「著者に聴く」という古川出演の番組を聴取し、誘われて食事を共にした。友人と言う資格で出席していたので何かを話すように言われ、「妻が友人なのでして私は……」と口ごもり、古川氏に助けを求めた。すると氏は「たいへんな美人でした」と始めたのである。帰宅してそれをあなたに話し、その後には右の事実と、その二十四年後に書いた本の文とを思い出し、その男子の中に古川氏がいたのかどうかをあなたに尋ねた。「居たとも、居なかったとも言えない」という返事で、かつそれらの男子の名をひとりもあなたは挙げる事が出来なかった。このことはあなたが見舞客に対し、顔を上げず俯いて対したことを意味する。あなたの話では普通に面と対したようだったのだ。私は呆きれはて、氏にはこのとき見舞客の中にいたのかどうかをご本人に質そうと思っていてその死に出会っていた。仕方なく他の人(村山富市元首相の弟氏など)

に当たって見たのだが、确实と想定される人が亡くなっていて和男氏が居たかどうかは確定できなかった。しかし噂は聴いたであろうし、また右の文は読んでいると思われた。またそれは氏のあなたについての文章からも確信された。こうして私はウラン・プルトニウム路線を忌避し、安全なトリウム路線で原発を目指した氏の原点があなたの悲惨な姿にあったと結論したのである。それが副題の意味するものである。

まことにトリウム熔融塩炉であったならば、スリーマイル島も、チェルノブイリも。そしてフクシマもなかったのである。しかし容れられず排除されたのであって、古川は著書の冒頭で「原理的に正しい技術も、人間社会のさまざまな動きのなかで、時には不当な扱いをうけることがある」と記していた。そしてこれはドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』の序文の、キリストの再来を念頭においた主人公についての言葉を想起させるものであった。「一風変わった人物、どちらかといえば奇人だということである」。「奇人こそが全体の核心を自らの内部に宿し、逆に同時代の残りの人々が、ある風に吹き廻しで、一人残らずなぜか一時その奇人から背を向けることがある。……」

ドストエフスキーはその続きを書いてはいない。しかしその「一時」が終わり、奇人が奇妙な人ではなく奇特な人であったことを、「残りの人々」が知るに至るのである。ひとり孤立して十字架上で殺された人物はそのような形で、名誉を回復することが暗示されている。まことにこれはエピグラフにある「一粒の麦、もしも地におちて死なずば、ひとつにであらん。もしも死なば、多くの実をば結ぶべし」を受けた文言なのである。

「永遠に女性的なるもの、導き手われらを高みに上らしむ」で終わる『ファウスト』はもちろん優れた著作であるが、ゲーテとは比較にならぬ苦勞人だったドストエフスキーは『悪霊』で触れているように、『ファウスト』を少なからず甘い教養主義の作品と考えていて、『カラマーゾフの兄弟』ではイワンが幻視する悪魔に悪魔メフィストテレスの名を挙げ、批評させている。またワインバーグはチェルノブイリと冷戦の終結は知ってはいたが、予言はしていたがフクシマを実際には見ることなく逝った。苦勞の度合いも日本の古川の方が大きかったと思われた。米国ではスリーマイル以後原発の建設は禁じられたのに対し、日本はそれを奇貨として建設ラッシュに入り、今世紀にはいるや原発ルネッサンスを高唱するまでに至っていたのである。悪魔の跳梁の度合いもより大きかったのだ。私はそのような観点で『トリウム原子炉革命——古川和男・ヒロシマからの出発』を執筆した。

樺太で、ソ連占領下で暮らしていた十四歳の年に、将来樺太について書くことになるだろうと思った。その物語の主人公は私であるはずはなく、混血のキヨミであり、そのためには彼の戦後の変化を見ておく必要があつて、遠淵に行った。二泊して三日目に村を去りつつ、湖と山々に永遠と絶対、そのようなものとしての真実を見出し、それを理想とすることになった。この体験が曲折を経てあなたに繋がった。こうして非常に時間がかかったが、『樺太よ遠く孤独な』に始まる一連の著作活動に入ることができた。雑誌連載したので

活字にはなっていないのだが、単行本にはなっていない『松尾隆』を含めると八冊の本を出した。しかしその八冊目は、系列としては理系ということになり、またそれ以前の物がすべてロシア・ソ連・ロシアがらみであるのに、それを離れていることでも違うものになった。

この最新の本では、執筆準備の勉強の段階で私は或る変容を蒙らないではなかった。古川和男が賞賛し、その著書『岐路に立つ核エネルギー炉』を翻訳している米国初代原子力委員長のリリエンソールは、邦訳されているものは全部読んだわけだが、大戦中、連合国としてソ連に肩入れしていた人物たちを、「自由がない国」であるということと冷淡だった自分と比較して批判していて、非常に教えられた。すなわち同じ人物たちが、ソ連が核爆発に成功すると、ヒステリックな冷戦遂行者に転じたのであって、それに対してリリエンソールは「そんなに危険な国ではない」とたしなめ、「容共」と攻撃されたのである。その者たちが、核兵器に有用なプルトニウムをもたらすということでウラン原発（軽水炉）を押し立て、それを産しないことで安全はトリウム原発を弾圧したのであり、リリエンソールは冷戦に反対し、後者を擁護したのだった。こういう人物は、ずっと後にサハロフが現れるまでは、ソ連にはいなかったと思われた。

これまで付き合ひのなかった科学技術関係の人々と交わるようになり、私自身自分を変えた意識せざるをえなかった。もっともこの変化は突如起こったものでもなかった。恩師だった松尾隆は万能者の一面があり、「科学の誕生」、「宗教と科学」などの講演記録を残しており、『零の発見』を必読と推奨していた。また私はレオーノフがアインシュタインのドストエフスキー愛好に注目し、「文学研究の重要課題」と言っていることを知っており、その評論「作家の仕事」の訳稿を保持していた。したがって『ドストエフスキーとは何か』においても、ペレヴェルゼフに依拠し、その不足を補う形で執筆しつつ、私はこの問題に触れないでいることはできなかったのであって、触れてはいるのである。

思い起こせば、古川和男の「不遇」な生涯からすぐに『カラマーゾフの兄弟』序文の「奇人」を想起したことを含め、私は或る予感から、それなりの準備をしていたのだった。しかし今やそれに関連し、著作を公にして、私は年来の「アインシュタインとドストエフスキー」という、その存在を知り意識してきながら、わが手には余る問題として先送りしてきたわけでもあった問題に取り組むことになった。

しかしそれは人工透析の生活にはいつてからもはや三十年になろうとしていたあなたの骨髓の、造血能力に衰えがみえはじめた時期と重なることになった。

予想される葬儀に備えて中央の遺影とは別に、葬儀場の入り口に並べ置くべくあなたの若かった時の写真を選び、拡大して用意した。最初の一枚は1956年の長崎での原水禁世界大会での全体集会の演壇、縦に垂らされた四本の大会スローガンを背景に演壇にひとり立ちスピーチするワンピース姿の細身のあなたである。新聞社撮影のものだ。次の一枚はナホトカの客船埠頭前の広場のもので、あなたを中心に広場で遊んでいたロシア人の子

供たちが囲むソ連記者の撮影になるものである。あなたの生涯のお気に入りの一枚だった。次はやはり帰路のもので場所はキエフの公園である。ウクライナの女性たちとベンチに並んで中央に腰をかけたもの。そして最後の一枚はーウィーンはオペラ座の前のものである。

外交関係をもつのはいわゆる社会主義圏の諸国だけで、人民中国と呼ばれていた北京の中国は、世界青年学生友好祭を非常に重視し、1957年のモスクワ大会には大代表団を贈りこんでいた。それが今度では中立の資本主義国であるウィーンであった。国交のない日本お青年学生との交流はとくに重視していて、中日交流会を予定していて、そのために中華料理の具材を運びこみ、日本語の通訳も用意していた。それが終わった後での、中国の絵遊劇の主演女優と女性通訳が両隣に立つ和服の一枚である。

原爆時の広島県戸坂の収容所に来た米軍調査団は一人一人個別に写真を撮っており、そのなかには「皮膚はつるりとむけ落ち、顔全体が倍にも腫れ上がっていた」というあなたの一葉もあるはずである。残念ながら私が見ることもなかったものだった。

フクシマの年の年末、古川博士の葬儀に向かう私を、「わたしからも「よろしく」申し上げてください」と明るく言って送り出している。私は遺棺の顔に手を合わせ、後ずさりしてもう一度前に進み手を合わせた。

それから二年して本が出ることになって、私は帯に、学部学科は異なるが、松尾隆教授との関係では兄弟子ということになる、元日本原水協代表理事、平和事務所代表の吉川嘉清氏から推薦文をもらった。その一部は新聞の広告にも出たのだが、しかしそれを見ても衰えたあなたはいかなる感慨をも覚えないようだった。

2015年近くの総合病院に入退院を繰り返すようになった。自室を出るとき、見納めのように自室を見つめた姿が忘れられない。そして8月、盆を家で過ごすべく帰宅したんだ。長男の四歳十か月の死から数えて四十八年目、私と、当時一歳に満たず、しかし今は四十台半ばの次男にそれぞれ片手を握られながら静かに息を引き取った。出会ってから五十六年目のことだった。

子供の頃の古川博士は家に引きこもりがちで、体が弱く長生きしないだろうと見られていたようである。それが念頭にあってあなたは「よくまあ八十四まで生きたものだ」と笑いながら語っていたものだった。女学校でも全九州で知られたテニスの選手だったそうで、原爆の傷がいてからは健康に暮らしてきて、ウィーンへの旅では、帰国して計ったら体重は増えていた、という具合だった。かくて八十八歳まで生きることとなった。ただしその最後は両乳房と右腎臓を失い、週に三度の人工透析で暮らした三十年だった。

4章 ドストエフスキーとアインシュタイン、マルクス

調査と研究は本格的にはあなたの没年の年の初めから行われ、亡くなる頃にはほぼ終わっていて葬儀の後に執筆開始ということになり、十一月にドストエフスキーの会で報告。年末に原稿を提出、これが2016年4月に、年一回発行の会報誌である『ドストエフスキーの広場』に前年度の報告文の一つとして掲載された。それをここに掲げることとする。あなたへの想いの反映が有るからであるが、これまでに書いてきたことと重複する箇所は省くことにする。

また続けて「ペレヴェルゼフとバフチン」という2018年発表のエッセイを掲げる。表題の評論の補注の意味を有するからである。なおバフチンはソ連時代にも著作が出ていた形式主義の文芸学者であり、1970年にはその『ドストエフスキーの詩学』（原題）が『ドストエフスキーの創作方法』の表題で邦訳されている。

アインシュタインとドストエフスキー

ペレヴェルゼフの『ドストエフスキーの創造』の拙訳本文は1912年初版のものであるが、革命後の1922年ドストエフスキー生誕百年の記念行事で彼は「ドストエフスキーと革命」という講演を行い、それをその年の新しい版に「序文に代えて」と記して冒頭に据えた。内容は『悪霊』論であり、マルクス主義の立場からこの作品を擁護したものである。そのなかに「同時代の人々は彼をほとんど理解せず、また理解できるはずもなかったが、それは彼の視力があまりにも強大で、しかるに盲人には目明きが理解できないからである」の文言がある。

知られているように、『悪霊』は雑誌連載中に編集者が「スタヴローギンの告白」の章の掲載を強く拒否したために、中断後、これを除外して継続され完結した経緯があった。ペレヴェルゼフはそれを知らずに『創造』の本体を執筆していて、一九一七年の革命成功後、自身が中心になってドストエフスキー文庫を開き、夫人宛ての手紙を編集出版、また保存されていた「スタヴローギンの告白」を初めて読み、『悪霊』の認識を深めた。また革命後の現実に触れて、ドストエフスキーが革命の否定的側面をも予見していたことに驚いた。それらのことが「ドストエフスキーと革命」には反映した。しかしまさにこの論文が、後に、二十年代末にスターリン派の忌避に会い、「失脚」の原因となった。彼は三十年代以降文学界からは消え、ロシア古代文学の研究に向かい、1968年に没している。彼以後ソ連では文学内容に触れたマトモなドストエフスキー論は現れてはいない。

作家レオノフはその出発当初からドストエフスキーの影響を指摘されてきた人だった。述べたように戦前に『穴熊』と『スクタレフスキー』、また戦後に『ロシアの森』（スターリン批判後にスターリン賞に代わる新設のレーニン賞一位を受ける）が米川正夫らに

よって訳されているが、これは訳者が親近を感じたが故である。しかしレオーノフは、二十年代の『泥棒』および三十年代後半（大粛清期）の戯曲『吹雪』がドストエフスキーの悪しき影響として批判され、両作は戦後の選集に収録されなかった経緯があり、トルストイ、チェーホフ、ゴーリキーについて優れた評論を書きながらドストエフスキーに言及するのを避けてきた。

レオーノフは1965年以降に晴れて公認の作家となった人である。1960年のボリショイ劇場のトルストイ没後五十年祭での基調報告の栄誉は彼に与えられており、一九六一年一月のプラウダ紙には米国での核爆弾に対するシェルター騒動を風刺する映画シナリオ『マッキンリー氏の逃亡』を発表し、好評だった。かくて作家同盟機関誌『ズナーミヤ』はレオーノフにインタビューを行い、四月号にそれが「作家の仕事」の表題で掲載された。そこで彼はアインシュタインのドストエフスキー愛好について触れて述べた。

「現代物理学の発見は人間の思惟の地平線を押し広げたが、文学はそれに合致しなければならぬ」。「二人の偉大な人物を接近せしめたものは何か、それは思想の方向の一致、実験を敢えてする能力だったのではなからうか？ これこそは芸術の理論家にとっての大きなテーマである」「ドストエフスキーには人間存在の複雑さを伝える力があつた。彼は肉眼では補足しえない赤外線と紫外線を持つていたかのようだ。彼は在ったことだけではなく、在りえたかもしれないこと、すなわち人間関係の極端にして極限的な表現を行つた。びっこ女とのスタヴローギンの結婚のごときは現実には有りえなかつたのである。彼女の姿、その皮膚を想像してみたまえ、さっぱりした白地の服を着こなした貴族の坊ちゃんであるスタヴローギンが、そのような女に手を出すようなことは有りえなかつたはずである。しかしドストエフスキーには、スタヴローギンの崩壊の表現として、彼ら二人の親密な関係が必要だったのであり、彼はそれを創造したのであった」。

ところでアインシュタインであるが、1905年の特殊相対性理論および一九一五年の一般相対性理論はソ連でも支持され、1922年の来日時には、ソ連科学アカデミーは名誉会員に迎え、ロシア革命を支持していたアインシュタインはこれを快諾している。しかしその後スターリンの一国社会主義の確立があり、ソ連共産党内のユダヤ人党员への迫害があり、アインシュタインは忌避された。第二次世界大戦後、アインシュタインがラツセルと提携して行つた世界政府樹立の提案、反核兵器のバグウォツシュ宣言などにはソ連は異義を唱えており、批判と反批判の応酬があつた。スターリン批判後にこれが改善されたのであつて、アインシュタインとドストエフスキーはパラレルの関係にあつたといつてよい。したがってレオーノフの発言は非常に斬新だったのである。

1912年、帝政ロシアの反動期のマルクス主義的ドストエフスキー論、一九三四年当時全十八章のうち断片的に三つの章が翻訳されながら、全貌が明らかにされていなかった論文を、ソ連の崩壊が迫りつつあつた年に私は全訳し公刊したのである。松尾が放棄したのは、訳書の解説に記したように、ペレヴェルゼフが「批判」されて闇に葬られていたからだつた。また岡沢主任教授が、戦前自ら翻訳した論文を戦後自著に自身の論文として収

録したことも関係していた。全訳して公刊する場合には、そのことに触れざるをえず、後輩としては逡巡せざるをえなかったのである。

私は2008年に『ドストエフスキーとは何か』を上梓。後書に相当する最終章でインシュタインに言及、ドストエフスキーがイワン・カラマーゾフに非ユークリッド幾何学について語らせていることを紹介した。そうこうしているうちに2011年にフクシマが起こったのである。

大分市は瀬戸内海に面しており、少し海に突き出た土地に佐賀関と呼ばれるところがある。そこに日本興業という会社の精錬所があり、その所長古川氏は大分市中島町に家族を住まわせていた。あなたの生家とは斜め向かいであり、家族同士の付き合いがあり、長男の和男氏とは同年生まれ、中島小学校では学級こそちがえ同期だった。(ついでながらこの学校の先輩に村山富市元総理がおり、その兄弟とも彼女は懇意だった)。古川家は戦後数年して大分県を去り京都に移り、あなたは一家のその後の消息を知らなかった。ところが長い別離の後、1987年になって弟の雅章氏が町田市つくし野の拙宅を訪ねて見え、京大の化学科に進んだ長兄の和男氏がトリウム熔融塩炉なる原子炉の研究に従事していることを聞いた。現行のウラン固体燃料炉(軽水炉)とは著しく異なっており副産物として有害なプルトニウムを産しない、事故に際しても安全なものであるということだった。また一九九九年に雅章氏に案内されるようにして当の和男氏が来客。その二年後の2001年には、それまで国内外の専門誌に論文を発表してきた氏の、初めての一般読者を対象とした啓蒙書『「原発」革命』が文春新書の一冊として世に出、あなたは贈呈されていたが、私は開いてみようとはしなかった。所属する市民平和運動の団体、平和事務所の一員として、チェルノブイリを訪ね、またバルト三国の被ばく者と医師の広島・長崎招致に従事していたにもかかわらず、だった。もっともあなたのほうは和男氏を支持していて、フクシマ後、増補改訂版の『原発安全革命』の新聞広告が出た際には、歓声を上げて買い求めた。私も気になっていたもので、私はそれを取り上げて読み、のめり込むことになった。

著者である古川和男氏とはこの年三度お会いし、語り合った。当時すでにがんに冒されていて12月に他界、私は氏の業績について著作を目指すことになり、三年を要し、未刊の『松尾隆』まで含めると八冊目となる本『トリウム原子炉革命——古川和男・ヒロシマからの出発』を著した。私はこの過程でインシュタインとドストエフスキーを同時に對比して考える体験をした。

特殊相対性理論から出てきた学的結論に物質のエネルギーへの転化があり、その量は質量と光の二乗の積に等しい。すなわち $E=mc^2$ の発見である。これに基づきジョリオ・キュリーが1939年に、ラジウムを用いて核分裂とその連鎖反応によるエネルギー取得に成功。第二次世界大戦が始まり、ナチス・ドイツが原爆を開発しようすることを怖れた二人の亡命核物理学者、すなわちウイグナーとジラードが、やはり米国に亡命中だったプリンストン高等学術研究所のインシュタインに頼り、その署名になる原爆製造を求めるルーズベルト大統領あての書簡が作成される。テネシー州の荒野の一角オークリッジに研究

所が作られ、ウイグナーがその初代所長になり原爆が製作され、西部のニューメキシコ州の砂漠で実験される。この時目標としていたドイツはすでに降伏、日本のみがまだ抗戦していて、アインシュタインは反対したのだったのだが、日本に投下された。

原爆に使われた原理は発電にも利用できるものであって、ウイグナーは、それはそれまでの工学的なものとはまったく異なって化学にラントとなるべきだと予言、所長を弟子のワインバーグに譲り、このワインバーグが熔融塩炉の基礎を築いた。また使用物質は有害なプルトニウム（長崎に使用）その他の放射性廃物を産生するウランではなく、無害かつ世界中で多量に産する（したがって安価な）トリウムが選ばれていた。ところがまさにこの長所が、冷戦に利益を見出す政産軍複合体の忌避するところとなったのであり、米国においては弾圧され陰謀をもって葬られた。

その研究は日本人古川和男によって引き継がれ継続され、ついに1980年F U J I（不二、富士）として完成される。大きな関心を惹き起こしたが、米国におけると同じ理由によって、日本の自衛隊の核武装を想定している勢力によって隠微に葬られた。平和的かつすべてにおいて優れた原発が陽の目をみなかったのであって、古川和男は『原発安全革命』のなかで己の業績について「人間社会のさまざまな動きの中で、ときには不当な扱いを受けることがある」と嘆いた。

この言葉は『カラマーゾフの兄弟』の序文の「奇人」についての定義を想起させずにはいなかった。すなわち「奇人こそが時によると全体の核心を自らの内部に蔵し、逆に残りの人々が、ある風の吹き廻しによって、ひとり残らずなぜかその奇人に背を向けるといった場合がある」云々のキリストを念頭に置いた文言である。古川和男が講演で熱烈に人類と世界の救済を訴えていただけにそうであった。旧ソ連のアインシュタイン学者クズネツォフは、ドストエフスキーについて「簡単に規定することのできない、ある雰囲気を通じて影響を及ぼしてゆく」と述べている。まことに『カラマーゾフ』の「奇人」は古川和男にぴったりだった。こうして私は『トリウム原子炉革命——古川和男・ヒロシマからの出発』を完成したのであるが、その後に課題となったのは、その邦訳があることを知りながら、読まずに過ごしてきたこのクズネツォフ（1903〜？）の『アインシュタインとドストエフスキー』であった。

クズネツォフには大小取り混ぜて四冊の著書があるが、ソ連での公刊の順に記すと次のようである。

- ① 『アインシュタイン』1962。邦訳（上下二巻）1972。全三十章の大著、八番目（数詞は振られていない）の章に『ドストエフスキーとモーツァルト』の章がある。邦訳は第三版による、三版を重ねる。

- ② 『アインシュタインについての試論』一九六五 露文、未訳。

刊行年は①よりも遅いがすべて①以前に執筆のもの。五十年代末から六一年までの間に諸雑誌に発表された六編を集めたもの。これらを基礎に大著である①が執筆

されたのである。ちなみに第一編は「アインシュタインの世界観と相対性理論」、第二編は「エピクロスとルクレッシー、ガリレオとアリオスト、アインシュタインとドストエフスキーについての覚書」というもので、このなかで初めてアインシュタインのドストエフスキーに言及した書簡の文言が紹介されている。したがって先に掲げたレオーノフの一九六一年の言葉はもちろん、一九六五年刊のバフチンの『ドストエフスキーの詩学』の「結び」の章の最後でのアインシュタインについての言及は、クズネツォフのこの最初期の論文に負うていると見なされる。すなわち同時に刊行が開始されたアインシュタイン露訳全集の訳者にして三人の編集者の一人だったクズネツォフこそがパイオニアであり、ケドロフの『詩的宇宙』（一九八九）もまた然りである。

③ 『アインシュタイン 生涯、死、不滅』一九七六、露文の最大著作、未訳

①の全三十章は各章に題辞があり、表題を有するものであるが、全体の通しの番号が無い。これは相対性理論の業績が、アインシュタインの世界観、哲学、人格と不可分と著者が考えたためであって、それなりの成果を挙げているのであるが、評伝と業績が混濁した印象を与えかねなかった。個々それぞれの主題では②のほうがすっきりした形を成している。この書の「序文」には、「物理学の未来との関係」について加筆する必要から、構成をまったく変えることになったと述べられており、増補改訂とはいえない新しい本とみなされる。すなわち先の本では全三十章だったものを「生涯」の編に十九章、「死」の編に三章、「不滅」の編に四章、合計二十六章にまとめて記述した。ただしこれに加えて別に「パラレル（対比）」と題した部を設け。七つの章を収めた。表題は全部が「アインシュタインと○○○○」といった具合に○○○○に對比される人物を収めたものである。その人物とはアリストテレス、デカルト、アラデイ、マッハ、ボーア、ドストエフスキー、モーツァルトの七人である。もちろんこれらの人物たちは①の『アインシュタイン』にも有ったものだった。しかし努めて本文から外し、これに収めたのである。もともと『アインシュタイン』においても頻繁かつ多大に登場しているのは一位にスピノザ、続いてニュートンだった。この二人を除外しては、評伝は書けなかった。このため二人は本文であるところの「生涯、死、不滅」の中に収められて、ここには登場していない。

クズネツォフのアインシュタインへの敬愛は比類のないもので、「死」「不滅」の章名は『アインシュタイン』にもあったものだった。しかしこの新しい本、著者が最終版と考えていただろう版においては、その思いはもっと昂じ、人類の救済者、新しい宗教の創始者もしくは教祖の地位にまで高められている。それをもっとも強く現しているのが、「生涯」の最初の章の表題である。なんとそれは新たにラテン語の「Ecce Homo（この人を見よ）」と記されているのである！

『アインシュタイン』において一つの章に収められていたドストエフスキーとモーツァルトが分離独立せしめられ、それぞれ別な論文にされていて量的にも倍以上になって

いることが注目される。加えて著者はこの二つについて「読者に格別な教養を要求する章である」とことわっている。読者に物理系の人々が多いであろうことを予想してのものであろうか。ともに非常に魅力のある章であって、この二つだけでも邦訳し一緒に出したという欲望にかられる。双方ともに日本では愛好者が多く、また双方について著作がある日本の批評家が想起され、ともにこの批評家の弱点を明るみにする内容のものであるだけに、なおさらそうなのである。しかしその内容が本文と固く結びついていてこれだけを分離するのが不可能で残念である。世界中の多くの言語に翻訳されており、全文の邦訳が望まれる。

「ドストエフスキー」についてだけ触れると、これまで全く言及してこなかったキェルケゴールとサルトルのドストエフスキー把握への批判的言及が見られる。すでに『アインシュタイン』に強くみられているが、また控えめにしか表していないが、クズネツォフはマルクス主義者であり、アインシュタインとドストエフスキーの架橋の試みの基礎にあるのはレーニンの『唯物論と経験批判論』と『哲学ノート』である。それらに有るマツハとカントの観念論への批判が、アインシュタインのそれと一致していることの確認が、彼にこの対比の論文を書かせたのである。

④ 『アインシュタインとドストエフスキー 十九世紀の主たる倫理的・美学的問題と現代物理学との関係にかんする研究』 1975年、英文より重訳あり

1985年ロンドンで③と同年に出版、②よりも小著。③の「アインシュタインとドストエフスキー」よりも量的に小さく、内容も相当に違う。問題は③と比較してどちらが先に執筆されたかということである。私は内容を比較して、④は③の後に書かれたと考える。量的には小さいが、これが一九五七年頃に初出と推定される著者の「アインシュタインとドストエフスキー」の合計三編の到達点とみなされる。

その理由は、それまでの三つの「アインシュタインとドストエフスキー」においては、前者が主、後者が従の関係にあったものが、対等の関係に進み出ているからである。例えば④では高らかに宣言されているのだ。「ドストエフスキーをアインシュタインの目を通して見、アインシュタインをとドストエフスキーの目を通して見るということに仕事を絞ってきた。このようにすることによって、二人の人間の或る特徴がくつきりと浮き彫りにされてくる。われわれの仕事はいまや、ドストエフスキーの芸術的仕事の内容とアインシュタインの科学的仕事の内容を並列的に描き、それ以後におけるその発展を比較し、現代の科学と現代の生活における、そして可能なかぎり未来にまで及ぶ、その進歩の線を追求してゆくことである」(邦訳書 28頁)。このような決然たる態度表明は④以前には無かったのである。

バフチンへの控えめながらの批判的コメント(同 31頁)があるが、継承しているとみられるペレヴェルゼフへの言及が無いのは、その復権がまだ先のゴルバチョフ時代に入る直前の一九八二年のことで、この時期にはまだ「解禁」されていなかったからである。

アインシュタインがドストエフスキー関連で残したのは書簡のなかの渺たる二、三の言及だけで、別に論文やエッセイが有るわけではない。レオーノフであれば「自分の小説と戯曲がドストエフスキー論なのだ」と言ったであろう。彼にとって最大の関心事は物理学の領域の問題だった。その書簡の一つが「ドストエフスキーはどんな思想家より多くのものを、すなわちガウスよりも多くのものを私に与えてくれる」なのである。しかし相対性理論は非ユークリッド幾何学の成立なしには有りえず、またガウスが同郷ともいうべき南ドイツ出身の大数学者であり、アインシュタインが曲率の計算にその数式を利用したと伝えられるリーマンの師匠筋の非ユークリッド幾何学者であることを思うと、この言葉は非常に重いのである。そして世界にあまたいるアインシュタイン学者・研究者のなかでクズネツォフただ一人がこの問題に錘鉛を下した。それも科学史家としての出発点からそうだったのである。それはいかなる観点からであったか。

物理学と文学という異なったジャンル間で共通な何かが起こったのである。もっともそうしたことは人類の文化の歴史において繰り返し見られてきた、とクズネツォフは主張する。古代ギリシャに原子（アトム）の名称の発明者であり、唯物論の祖と目され、アインシュタインがその人に同時代人を見出していたエピクロスがいる。その人物を賞賛して長詩を捧げた詩人にローマのルクレティウスがいた。またその長詩に励まされた物理学者にガリレイがいて、またそのガリレイを理解して称えたアリオストの文学が存在した。私はクズネツォフの初期の論文集②所載の論文のひとつについて述べている。その最後の方に、述べたように、「アインシュタインとドストエフスキー」が置かれていたのだが、その結び近くで彼は言う。

「思うに、宇宙的かつ道徳的調和の探求の天才的芸術的擁護である文学（ドストエフスキーを指す——引用者）に関する、水が浸透するような綿密な研究が、アインシュタインにとって非常に重要かつ必要だったのである。それはまことに巨大なしみ入るような力を帯びた研究、ジャンルの境界をいとも容易に通る研究だったのである。そして締めとして次のように述べられる。「文化の歴史が可能なのは、歴史的改革の諸主体を貫き通して定義しうる、何らかの同一の基層の存在が有るからである。変化の概念は、変化しつつあるものを定義しなければ意義を失う。文化の歴史においては、遠く古代ギリシャの初めから、若干の共通する定義と特質が見出される。それらは変化するが、文化の歴史を連続する過程として、歴史的変化にも関わらず同一性を内包するものとして語ることを可能にさせるのである」。つまり大事なのは、異なったジャンルの基底に存するものの省察なのだというのである。その代表者であるエピクロスにとって物理学と倫理学は同じものだったのだ。

いわんやアインシュタインとドストエフスキーのように所属する文化のジャンルを代表する存在でありながら、同時にそれを超えているような存在については、ジャンル内だけの研究では不十分なのであって、互いに異なったジャンルから見ることが必要なのである。クズネツォフのこの観点はますます発達して最後の英語版において絶頂に達して

いる。もっともこの邦訳のある最後の小著を理解するためには、未訳のものを含めてクズネツォフの全部を、それも繰り返して読まなければならないのであるが。

アインシュタインは一七世紀のオランダの思想家スピノザに深く学んだ無神論者・唯物論者であり、絶対的権威を否定する民主主義者であり、クズネツォフは全作を通じてそのことを強調している。まだ若かった時分から冗談めかして口にしていた「神とは気体上の脊椎動物である」は、それをよく現す言葉として有名だった。宗教はキリスト教も、自身が属するユダヤ教も嫌いだった。「唯物論思想に真に帰依している科学者だけが真に宗教的である」(「わが世界像」)。

彼は1905年の(1)特殊相対性理論

- (a) 運動する物体の長さ……縮む(光速を超えると長さが虚数になる)。
- (b) 運動する物体での時間……遅れる(光速を超えると時間が虚数となる)。
- (c) 速度の加法……速度の単純和よりも小さくなる(光速を上限とする)。
- (d) 運動する物体の質量……重くなる(光速に達すると質量が無限大になる)。
- (e) 運動する物体のエネルギー……運動エネルギーのほかに静止エネルギーをもつ。

および1915年の(2)一般相対性理論

- (a) 重力場では光は曲進する。
 - (b) 重力場では時間が遅れる。
 - (c) 重力場では高速は遅くなる。
 - (d) 質量をもつ物体が運動すると、重力波が発生する。重力波は高速で伝わる。
- によって世界的に有名になった。特に一八一九年のイギリス人による日食観測により(2)の(a)が証明されたことが決定的だった。

それは第一次世界大戦の終了による平和の時代の到来、またロシア革命が世界を揺るがせた時代でもあった。ロマン・ロランの反戦運動に加担していたアインシュタインはロシア革命とレーニン、新生のソ連に対しても好意的だった。一九二二年日本に招聘されているが、当時の日本にもアインシュタインとレーニンを同列に受け止める雰囲気が存在した(金子務『アインシュタイン・ショックー大正日本を揺るがした四十三日』参照)。広範な日本人が率直に歓迎しており、その後昭和に入るとともに戦争に向かった狂気の日本人とは別民族であるかのようなのである。日本には非常に好ましい印象を抱いて帰国しているが、その彼が係わりをなしとはしない二発の原爆が広島・長崎に投下されて第二次世界大戦は終了した。

1854年に米水爆実験による三度目の核被害があり、これを契機に原水爆禁止の国民権運動が起こる日ソ国交回復宣言の翌1957年ソ連は日本原水協の使節団(私に加わっていた)を迎え、首相がクレムリンで謁見する。同時期に世界青年学生平和友好フェスティバルが行われ、日本代表団の長崎の原爆乙女の会の永田尚子のモスクワ・マネージナヤ広場でのスピーチはその姿とともに大きく報じられた。私はクズネ

ツォフのこの時期、つまり最初期の論文にこの日本の反映を見る。「アインシュタインにおいては物理学の解決は道德問題の解決と結びついていた。科学の結論は人々の生活に如何に影響を及ぼすか？ 科学の進歩はヒロシマの人々に如何に償うか？ 学問の進歩と人々の安全と幸せの調和の条件とは如何なるものか？」こうしてこの思想は大著『アインシュタイン』に引き継がれて「原子爆弾の悲劇」の章が書かれることになった。そしてヒロシマは最後の④の書でも繰り返されているのである。注目されるのは、これがドストエフスキーにおける調和の希求と同一平面で把握されていることである。

⑤の第一章の表題でクズネツォフはドストエフスキーの文学を、レオーノフに呼応して「実験的リアリズム（の文学）」と命名して掲げた。しかしそれが調和を指摘したものであることは明らかにされているが、実験の細部はかならずしも明瞭ではない。しかし私が補足するところということになる。

全作品の中心に位置するのは小市民であって、社会での地位からくる精神的特徴は、貴族地主の上層への憧れと下層への転落への恐怖であり、この二極のあいだでの動揺である。貧しく圧迫されているが、それからの出口を求めつつ、それが見出されずもがいている。その過程が極端にして、しばしば残忍、苛酷な方法で実験的に描かれている。第二作の表題にある**Роман двойника**（二重体および二重人、分身）の語がその特徴をよく伝えていいる。彼ら二重人は極端な場合には、二極分裂をきたして発狂し、己の幻影を見るようになり、精神病院に收容されるか、他者の庇護にはいる。それとは異なり、社会に反逆する我意の者は犯罪者になって収監され（『死の家の記録』）、忍耐して生きる温順な者（原型は『弱い心』）は神を信じる宗教狂人が僧職者になる。後の二者は生きてはいても死んでいるのと同然であり、語り手をつとめる二重人は「生きている人はいるか！」と痛切に叫ばざるをえない。「我々とはとつくの昔に生きることを止めてしまった先祖から、死んだまま生まれて来たのだ」（『地下からの手記』）。「野に生きている人はいるか？」とロシアの勇者は叫ぶ。勇者ではないが、私も叫ぶ。しかし応答はまったく無い……」（『おとなしい女』）。「生きている人」とは意思と意識が調和した人であり、ペレヴェルゼフの考えでは、ドストエフスキーの時代にロシアには存在しなかったプロレタリアートである。

『地下からの手記』は、誰もが指摘するように、それまでの文学活動の作家自身による哲学的総括であるが、意思と意識の分裂と相克が中心テーマであったことが表明されている。それを克服しての「生きている人」、すなわち調和的人間への到達が志向されている。したがって現状をよしとする「地下万歳！」を叫んだ直後に「ここまできて、まだ嘘をつこうというにか！ 嘘というのは、いちばん良いのは決して地下ではなく、ぼくが渴望しているがら、けして見出せない何か別なものだということを、二二が四ほどにはつきりと知っているからだ！ 地下なんかそくらえ！」と反転することになる。「何か別なもの」——それは調和であり、処女作以来の課題だったわけだが、この作品に至って初め

て明確に哲学的に定義された。以後これを目指す極端な実験が『カラマーゾフの兄弟』に至るまで、手をかえ品をかえて延々と継続されることになった。

その作中には貴族地主といった上層の人々も登場する。しかし彼らは精神（内部）において小市民であり、上辺に異なった衣装をきせられただけの仮装人間である。つまり上層の人間としてはきわめて例外的で稀な人々である。現実には存在しなかったと言ってもよい。ムイシキン、スタヴローギン、ヴェルシーロフなどがそうである。彼らがいかに本物の貴族地主と異なるかを知るためには、ツルゲーネフやトルストイなど真正正銘の貴族地主階級出身の作家たちが書いたそれらの人物と比較してみればよい。興味深く面白い人物たちではあるが、その人工性は免れえず、上首尾に描くためにドストエフスキーは作中に語り手を配置しなければならなかった。「私」の場合があり、三人称の人物の場合もあるが、いずれにせよドストエフスキーの独創、革命といってよい手法であった。そしてこれによってペレヴェルゼフのいう「強大な視力」、レオーノフが言った「赤外線、紫外線」等の普通の肉眼では見えない世界が開示されたのである。またそれによって、埴谷雄高やジラールが述べたように、後代である二十世紀が超ええなかった高峰となった。

アインシュタインにおいては絶対的空間また絶対的時間は存在しない。それらはともに相対的であり、また空間なしの時間はなく、その逆もまた同様である。世界は空間の三つの点（もしくは線）と時間からなる四次元のものとして、それらが無数に共存しているものとして存在している。つまりそれ（ら）は肉眼では見えず、心眼に依らねばならない。クズネツォフはアインシュタインとドストエフスキーを結びつけるものを類似（アナロジー）ではなく、環および心理的なものとして説明している。私の見るところでは、アインシュタインは四次元の心眼でドストエフスキーを読んだのであり、その文学に相対性理論を必要としている精神を見出したのであり、己が支持・鼓舞されるのを感じたのである。

その同時代人のフランス人に相対性理論を「時間と空間のアマルガム」と非難し、一書を著したベルグソンがいた。アインシュタインは「時間があつて空間がない」とその片手落ちを批判した。要するにベルグソンは肉眼でしかものが見えない観念論者だったのである。問題はこの人物をたいへんな哲学者と勘違いし、ドストエフスキーを執筆した日本の批評家がいることである。クズネツォフはこの人物を知らなかったはずだが、このロシア人が描き出すドストエフスキーはこの日本人とはおよそかけ離れており、それ自体がベルグソン批判、アインシュタイン擁護となっている。

アインシュタインのモーツァルト愛好を研究しながら、クズネツォフはモーツァルトが自身の創造の瞬間（に起こったこと）を説明できない、と語っていたことを知り、アインシュタインの物理学での同様な発言（文章として残っている）とを結びつけた。また彼は、プーシキンが自作『オネーギン』について「タチャーナがどうして（貴族と）結婚したのか、私には分からない」と語ったことに注目した。芸術家も物理学者も実験の過程で当初は想定していなかった結果に到達することがある。こうして彼はエンゲルスのバルザック論、レーニンのトルストイ論にも示唆されたであろうが、芸術家がしばしば意図に反

した達成をしめすことに着目しつつ、「真の調和、真の実存」について、「ドストエフスキーはそれをわれわれに、アリョーシャ・カラマーゾフやゾシマの公認の正教のうちに見出せようとしたのだが、彼の詩学は、彼の描写の能力の全重量を天秤の受け皿の反対の受け皿に投じてしまったのである」（訳書 79 ～ 80 頁）と結論している。すなわちイワン・カラマーゾフの問いかけこそが、名うての無神論者、唯物論者だったアインシュタインの心を動かしたので、間違ってもゾシマやアレクセイであつたはずはないというのである。

クズネツォフが④を著した一九七五年当時米ソの核武装競争はまだ真盛りで、核弾頭に最適なプルトニウムを副産物として産出することで米ソはともに原発にはウラン軽水炉を選んでいた。トリウム熔融塩炉は逆にプルトニウムを産しないこととともに斥けられていた。したがって④にはスリーマイル（一九七九）、チェルノブイリ（一九八六）はともに反映されていない。私は『樺太と遠く孤独な』（一九八四）でソ連の崩壊を予想していた者であるが、そして崩壊はまことに起こるべくして起こったのであるが、チェルノブイリはそれを促進したと見る。レオノフもクズネツォフも生涯の最後にそれを見たはずなのだが、この頃はまだ予想していなかったと思われる。

アインシュタインとラッセルが提唱し、日本からも湯川秀樹が加わって発足した反核兵器のパグウォッシュ会議は、2015年10月五十四か国が参加してその第五十一回会議を長崎で一週間にわたっておこなった。そのポスター「核兵器に使われる恐れがある世界の核物質データ」によると長崎で使われた分離プルトニウム（外に広島の高濃縮ウランがある）だけでその保有量はロシアが一七八・〇トン、英一〇七・二、米八九・三と核兵器保有国が続ぎ、四位になんと日本の五七・一が登場している。ちなみに中国はすでにトリウム熔融塩炉に着手しているが、わずか一・八トンであり、日本の蓄積を、核武装を目指すしているものとして警戒していて当然である。

フクシマ原発事故のうちの一基はこのプルトニウムを使用しており、現行の原発を続けるかぎり、プルトニウムの産出は止まず、他の核廃棄物質とともに世界各国が地中に埋めつつある。日本も青森県六ヶ所村にその施設を建設している。地中三百メートルの場所にガラスで防御して治め、はるかに後代の人類に残すのだそうである。この状況を一語で表す言葉として私が思いつくのは「地球はその表皮から中心まで人間の涙でびしょ濡れになっている」である。

これは登場人物イワンの言葉であり、クズネツォフがドストエフスキーの衷心の思想として繰り返して引用しているものである。ドストエフスキーは今日の状況まで洞察していたはずはないのだが、その「実験的リアリズム」の方法はかかる言語表現にまで到達していたのである。そしてその後の二十世紀の作家でこれほどすごい言葉を記した人は皆無であり、あまたのドストエフスキー論者のなかでクズネツォフ一人だけがこれを取り上げていた。

①を繙く人は冒頭の「はしがき」の章に「彼（故王）は完全な意味で人間だった」という『ハムレット』による題辞を見て驚く。クズネツォフはこの父王の位置にスピノザを、

ハムレットの位置にアインシュタインを置く。二世紀に及ぶ衰退（「この世の関節ははずれたわい」）の後に、若きアインシュタインは己がスピノザの調和を復活せしめる運命を担っていることを自覚した（「ああ、なんとという因果か、おれがそれを正す運命に生まれて来たなんて！」）。①の後半「相対論、量子、統一場理論」の章のなかでクズネツォフは言う。「調和の理想はスピノザの世界、互いに作用しあう物体の相互的、相対的な運動が起る統一的な世界である。アインシュタインはこの古典の理想を復活し、一七世紀に見された相対性原理を一九世紀に見えられた新しい現象に拡張した。「この世の調和（関節）」は復活された。しかし最初に復活されたのは、慣性運動についてのものだった（特殊相対性理論）。きわめて大きい知的緊張の結果、アインシュタインは世界像から絶対的な加速運動を取り除くことができた（一般相対性理論）。しかしそれ以上進むことはできなかった。「科学のなかには、電力場と重力場のなかに、世界の理想的調和に反する相違が残っていた。他方では、素粒子の運動の中に、世界の理想的調和の最初の図式に収まらないような特性が見出された。この図式から脱落したニュートン力学ばかりでなく、調和を復活させたアインシュタインの力学も、位置と速度が初期条件と相互間の相互作用で定まる粒子の連続的運動から出発する。しかし二十年代には、粒子の位置と速度が、一般的にいつて、次のどの瞬間にも、限らない精度をもって決定されるものではないことが明らかにになったのである」。

こうして没年まで三十年におよぶ統一場の理論の探求が始まるのであるが、それは普通の意味では実を結ばなかった。アインシュタインは告白する、「重力理論（一般相対性理論の別名——引用者）が完成したときから四十年が経過した（二〇一五年現在では百年ということになる——同）。この四十年はただ一つの努力——重力理論を一般化し、物理学全体の基礎となる能力をもった場の理論を創りだそうという努力——に完全に捧げられた。同じ目的のために努力した人は沢山いる。現れて私に希望を抱かせたものの多くを私は放棄しなければならなかった。しかし最近の十年で、私は自然で、希望のもてるように思われる理論が得られた。しかし私は、この理論を物理学にとって貴重だと見なすかどうかという質問に答えることができない。この不確かさはすべて非線型場の理論に不可避な打ち克ちがたい数学的困難と関連している」。そして困難を縷々説明して最後に「レッシングの言葉を引用している、「真理を探し求めることは、真理を持つていることよりも素晴らしい」と。

クズネツォフはこれを受けて言う。「科学はその発展の各段階で、発展の内的な力、遺産として次の時代に伝えられる問題を組み入れる。その時代にはしばしば認められないもので、次の時代に明らかに矛盾、現在は存在しない証明を将来に持っている仮説、これがその時代の科学的理論を次にくる科学の発展に結びつける結び目である」。「統一場の理論は科学のなかに非常に強力な傾向を持ち込んだ。それは理論物理学を相対論と量子論のアイデアの総合へ、種々異なり、今はまだ関連がなく、ときには互いに矛盾しあい異なっている場にかんする諸観念を総合へと押しやった。この意味で、統一場の理論は科学の主

流のなかにあった」。アインシュタインが示した「真理を求める努力」は豊饒な未来を約束している、と彼は説いたのである。

幼少期に新旧聖書の荒唐無稽に愛想をつかし、スピノザに学んで無神論者として生き、晩年にはプリンストンの自宅にはガンジーの肖像画を飾っていた人だった。「神」の語は「自然」の雅号だった。そのアインシュタインが、大天才となって後、人生の後半での学的苦闘のなかで弱音ともとられかねない言葉を残している。「神がサイコロ遊びをするとは思えない」はまだしもであって、統一場の理論に関連して「今度も道に迷ってしまっただ」と嘆き、「神は狡猾である。しかし悪意はない」を繰り返して、「そうはいつでも神もいぐらかは悪意があるかもしれないじゃないか」と陽気にではあったが嘆息をもらしたとも伝えられている。

「私はいま『カラマーゾフの兄弟』を読んでいます。これはいままで手にしたなかでもっとも素晴らしい本です」云々の手紙が書かれたのはこの時期のことで、前後に統一場の理論の苦闘とベルリンでのナチズムの圧迫の訴えが挟まれた文言なのである。すなわちアインシュタインは、神の有無をめぐるイワン・カラマーゾフの苦しい探求に他人事ではないものを覚えた。

『悪霊』のキリーロフにおいて神は存在しないと結論した人物を描き切ったドストエフスキーにとって、問題は神の子にして人間、つまりは神人であるキリストにあった。これについてのドストエフスキーの結論は、もっとも若く、したがってもっとも未来に接近している少年クラーストキンである、というのが『ドストエフスキーとは何か』において私が記した結論だった。「キリスト教なんていうものは、下層階級を奴隷の状態に押し込めておくために、富裕な上流階級に奉仕してきただけじゃありませんか。もし彼が現代に生きていたら、さっそく革命家の仲間にはいつて、めざましく活動したに違いありません」。クズネツォフはこれには言及していないが、アインシュタインはここにドストエフスキーの衷心の思想を見た、と私は信じている。

原発はその建設に巨額な資金を必要としてきた。フクシマによって危険が証明されたからといって止めるわけにはゆかないのは、廃炉のためにはもっと金が必要からである。銀行筋もすでに融資した金の回収が必要である。したがってその先に第二第三のフクシマがあらうとも原発を続ける以外にない――経済産業界のこの思惑が安倍内閣を誕生せしめた。己の資本主義的な利益のためなら人類の文明を消滅せしめてもよいという思想が存在しており、世界は危機に瀕している。古川和男は地球の救済を訴えていた。

差しあたってプルトニウム増産の道を立ち、核武装と核戦争への道を閉ざさなければならぬ。いったいどうすればよいのか。

古川和男博士の理想の継承者である(株)トリウム・テック・ソリューションは現存するウランReactor(炉)内に小型のトリウムReactorを設置することによって、Reactor内のプルトニウムを消去するRinRの技術を提案している。そしてこれさえも容易に受け入れない日本を見限り、OECD(経済協力開発機構)の機関であるノルウェーのハルデン

原子炉と契約を結びその実験政製作の作業に入っている（その後カザフスタンに移した）。日本とは異なつて核武装を望まずプルトニウムの処理に苦しんでいる諸国が支持してくれており、私たちはRERが日本に輸入されて利用されることを願いつつ、現存するプルトニウムをすべて消去し、すべての核兵器を消滅させようとしている。その先に安全にして経済的、かつ民主主義的なトリウム熔融塩炉の全世界的展開があると信じて。

「すべての道はローマに通じている」という格言があるが、一九四五年八月六日および同九日以降ではーすべての道はヒロシマに通じている。クズネツォフ氏はもちろん、アインシュタインもドストエフスキーも異存はあるまい。まことにこれこそが、「アインシュタインとドストエフスキー」という巨大なテーマの今日における展開なのである。

2015年12月31日執筆、2016年4月発行『ドストエフスキー広場』所載。

ペレヴェルゼフとバフチン

その右翼政治思想ゆえに嫌いな小林秀雄だったが、文学の鑑賞家としては優れていた。例えばドストエフスキーについても①その第二作《ドヴォイニク（二重人、分身）》について「作品それ自体が発狂している」と言っており、その全作の男女の恋愛について②「悪夢のようだ」と述べている確である。また③『悪霊』のキリーロフおよびスタヴローギンと『カラマーゾフの兄弟』のゾシマにふれて、対立的な宗教観の持ち主を書き上げた作家をどう定義すべきか困惑していて、これももつともである。これらを受けて寺田透はスタヴローギンなどを例として「作家は作中人物を愛することなしには作中に生かしえないというのが一般的原則だが、ドストエフスキーの場合には役に立たない」としている。ただし二人はともに指摘においては正しいのだが、その原因については解明できず、またしようにもしていない。

二人のうち小林は、一九三五年に断片的に翻訳紹介されたペレヴェルゼフを読んで、『ドストエフスキーの生活』のなかでは二か所でその名を掲げて生かしているが、寺田はペレヴェルゼフを知らなかったようだ。しかしバフチンは読んでいて、その論が情熱（つまり作品内容）への言及に乏しいことを不満とした。一九二〇年代優れて指導的だったペレヴェルゼフがスターリン派によって弾圧排除された後のソ連での、ドストエフスキーについて語るにしても、形式に限定せざるをえなくなっていた状況に気づかなかったためである。

弾圧されたペレヴェルゼフは出生地のハリコフの大学でロシア古代文学の著作に従事、一九六七年に没。一九八二年に『ドストエフスキーの創造』を含む主要論文が一卷選集にまとめられて出、（ソ連崩壊後に遺族によりさらに別の選集が出された）、日本では私が一

九八九年に『ドストエフスキーの創造』を全訳した。小林も寺田も、もしも存命だったならば、抱いていた疑問がそこでは、基本的に完全に解明されていることを知ったはずである。

ドストエフスキーはドヴォイニクという、その社会的位置では小市民に属する人物群を創造したのである。その出発点となった第二作『ドヴォイニク』は、主人公の発狂で終わるだけではなく、まことに作品そのものが「発狂」している失敗作であるが、注目すべきは、若かった作家が、兄への手紙に残るように、この作によりゴーゴリを超えた天才に成ったと舞い上がったことで、あまりの不評に冷静になりやがて誤りを認めることになる。失敗の原因は、当時の流行の進歩思想だった社会主義（後にエンゲルスにより「空想的」と定義される）の不勉強にあると思い、ペトラシェフスキーの会に加わり、一度は死刑判決をうけ、シベリヤに流刑。以後この語は使用せず、再出するのは晩年の『未成年』においてである。しかしこの間にあって、この語は常に念頭にあり、己の二重性を哲学的に考察する人物を主人公にした作品を書いた。『白夜』に初出した「片隅」を「地下」と言い換えた『地下から手記』である。原語のポトポリーエには邦訳に見られる「室」の意味はなく、またこの語は反帝政的地下政治活動をも意味していた。したがって言葉を言い換えることによって、彼は以後の文学活動を芸術的地下活動になると決意したのである。

地下人は己に意識と意思の矛盾と対立があることを自認・表白する。この二つをペレヴェルゼフは、作家が使用した言葉を使用して我意（キリーロフ）と温順（『おとなしい女』など多数）に分類し、その双方をもつ者として二重人（ドヴォイニク）を定義する。またそれぞれが分離独立した「我意の人」と「温順な人」の範疇を設定する。その作品では、二重人を中心として、これらの三つのタイプが描かれている。作家の愛情は温順の側にあったが、二重性を描くという課題により、我意の側面をも力をこめて描かねばならなかった。ドストエフスキーその人が「二重人」芸術家（ペレヴェルゼフ）だったためであり、このことが解れば小林と寺田の疑問は氷塊するのである。

意識と意思は本来調和していなければならぬのであり、それが「生きている人間」の条件である。しかしドストエフスキーの人物群においては、それは無かった。そのことを地下人は「生きていることを止めた先祖から、死んだままで生まれてきた」と嘆いた。作家は出口調和を求め、生きた人間を見出し創造しようと努めた。

革命から3年たった一九二一年、ペレヴェルゼフは『悪霊』を論じた「ドストエフスキーと革命」において、ドストエフスキーをプロレタリアートが現れる以前の、ロシア革命の小市民時代の作家と定義した。ただし小市民的要素をも含んだ現下の革命においては、学すべきものは多大に存ずるとした。しかしそのような正しい指摘のゆえに弾圧され、この論文が陽の目を見るにはソ連の崩壊を待たねばならなかったという運命を強いられた。

ソ連時代のエルミローフに代表されるドストエフスキーの否定論は、ペレヴェルゼフがミハイロフスキーに見たものの流れを汲んでいる。すなわちナロードニキの理論家は第二作のゴリヤートキンについて「同情されねばならぬ人物が虐められている」と非難、作家

を「残酷な才能」と定義した。これに対し、ペレヴェルゼフはゴリヤートキンが狼（我意）と羊（温順）の両面を内に持つ二重人であることに気づかない短見と批判した。ドストエフスキー文学は全体として社会主義革命を待望するものだったからである。

ソ連崩壊後のドストエフスキー復活の機運とともに顕著になった傾向に、ロシア正教、キリスト教系統のものがある。これは歴史的にはメレジコフスキーの流れを汲むものである。すなわちキリスト教が現れるのが『罪と罰』からであることをもって彼はそれ以前の全作品を無価値なものとして退け、ドストエフスキーをキリストの再来による救済を説く作家と賞賛し定義した。ペレヴェルゼフはこれをも誤りとする。

ドストエフスキーにおいて神の有無が問題となったのは、帝政がロシア正教会の上層と結んで、己を神意の委託によると宣伝・教育していたからだだった。社会主義は無神論の立場に立っており、その者たちが革命を行って帝政以上の社会がつかれるかどうかは疑問だった。『悪霊』はそのために書かれたが、問題は解決しなかった。ロシアには資本主義への道もあったのであり、次作の『未成年』の語り手の主人公はロスチャイルドに成ろうという夢をもって登場していた。最後の『カラマーゾフの兄弟』での少年群のリーダー、クラートスキンの「キリストが現代に生きていたら、革命家になってめざましく活動したに違いないありません」は、検閲にひっかかる怖れをなしとほしない言葉であって、それを「最後っ屁」的に敢えてしたとき、ドストエフスキーは最後の作品と予感していたと見るべきだろう。その決定的証左はこのクラートキンによる「カラマーゾフ万歳！」である。単数であり、アレクセイを指すのであればその名を記していいはずなのである。この小説は後半に至ってロシアの未来を占うものとなっており、私はクラートスキンの描出に漠たるレニン出現の予感を見出してきた。そして己の全文学活動を振り返り、どんな時代が到来しようとの己の諸作が無価値になることはない信じ、よくぞここまで書いたと自賛したかったのだと思われる。すなわちこの「万歳！」は、アレクセイに託して、自分に向い「ドストエフスキー万歳！」と言っているのだと読まれるべきではなからうか。と、続編の有無を問うた文章で私はかつて記したことがある。

貿易会社勤務、久しくソ連に行き来していたので、主として経済から崩壊は予感されていた。こうしてアマリクの「ソ連は一九八四年まで生き延びるか」に注目していて、まさにその年にそれからの引用を含む自伝小説『樺太よ遠く孤独な』（1984）を上梓。しかし人心が決定的にクレムリンを離れたのは原発事故（1986）によってだった。一九九一年春広島大原医研の学者らとベルリン、バルト三国、チェルノブイリ地区に行く。ソ連はその年末に崩壊。これを契機にロシア革命そのものが誤りだったとする潮流が起った。そして社会主義革命の「失敗」を洞察していたとすることで、ドストエフスキーが注目されることになる。『悪霊』の五人組の一人シガリオフの「全き自由（への希求）」から出発して全き専制に終わる」という文言がその証左なのだ、という。

マルクスは人類（厳密にはロシアその他を含め西欧）社会の資本主義に至る発展過程を叙述して、最終的にはコミューン（共産）主義のユートピア社会に到達すると予言した。

この予言の実現を目指して行った革命が人神スターリンの専制に至ったのである。ドストエフスキーの予言は的中した、というわけだ。しかし待ってくれ、シガリオフの言葉を作作者ドストエフスキーの思想の表白と捉えてよいのか。『死の家の記録』のペトロフらは本能に従って行動しただけで、思想を持たなかった。これを語ったのは、先行する作品『虐げられた人々』のワルコフスキーの「全てはくだらない、くだらないのはこの私だけだ。全世界は私のためにつくられている」である。ピョートル・ベルホヴェンスキーの口を通じて語られるシガリオフの思想はこの延長である。すなわち彼が「自由」を口にするとき、それが意味するのは自分勝手なやりたい放題の自由であって、フランス革命の「自由、平等、博愛」の「自由」ではない。言葉は同じでも、中身はまったく違うのだ。そのことをペレヴェルゼフはまことに明確に説いていた。

ロシア語にヴァイトという単語があり、これは「眺め」と「品種」の意味をもち、ときとして誤解を招くが、こうした例は社会思想の場合は頻繁にあり、かつ日常的である。「自由民主党」を名乗る政党があるが、その党がその名の通りの政党であるとは、その党の党員でさえ多くは信じていないのと同じである。シガリオフの「自由」は最初から専制を求めている「自由」であって、容易に専制に転化しうるのであって、最初から専制を求めているのと同じなのである。その専制が達成されたとき、「全き自由」がえられるような最初から非倫理的な「自由」なのである。狼による羊群の支配。

ペレヴェルゼフはメレジコフスキーのメシア思想はマルメラードヴァらを救わないと断じつつ、その誤ったドストエフスキー観が、『罪と罰』以前の作品を切り捨てたことから生じたと指摘した。それによってドストエフスキーを貫く一本の赤い糸、『罪と罰』以降がその発展であるところのドヴォイニクがまったく見えない論の展開となった。ドストエフスキーの本質がこの一語にあることが見えていないという一点において、この保守にして帝制擁護の論は、左翼急進主義的なミハイロフスキーそれと同じなのである。すなわち、作品を分析することなく、自身が抱懐する思想によってドストエフスキーを裁断しているのだ。同様にこの文芸学者は、「生きた人」とは無縁であることをもって、キリーロフとゾシマを同一とした。「相違はただ、一方が呪詛を口にしつつ破滅するのにたいし、他方が運命への服従と感謝とともに破滅することにある」。

自身のうちに我意と温順の両者を含み、その相克を生きるドヴォイニク——これこそがドストエフスキーが描き創造しようとしたものである。ただしそれを徹底して行ったのであって、その過程で我意だけの、またその反対に温順だけの人物群をもまた創造された。

この性格でもあり心理でもあるものは、階級的には都市（農村ではない）の小市民のものであって、上流の貴族地主階級のそれではない。しかしロシアを全体として描くためにはこの階級をも書かなければならなかった。こうして作品には貴族・地主もまた登場するが、これらはすべて外見（衣装）が上流であるだけで、中身（精神、趣向）は小市民のそれである。その階層の人間としてはすべてきわめて例外的であり虚体とみなされる。それをペレヴェルゼフは「仮装人物」と定義したが、これにも述べた三種類があつて、たとえ

ばムイシキンは温順の人のうち唯一主人公として、それも性的不能者として登場している。また三つのそれぞれが男女に別れていて、その恋愛関係が二重人同士の場合、小林が言った悪夢（その典型は『賭博者』）のごときものになるが、またとくに温順な女性においては、看護婦願望（ダーシャなど）、すなわち性的個性（自己主張）を欠いたものになる。『弱心』のシムコフはムイシキンの原型であり、間違って結婚する羽目になり、パニックを引き起こして狂死した。

仮装人物は現実には存在せず、作家の観念もしくは想像のなかにしか存在しないもので、これを成功裡に描くためには、ドストエフスキーは作中に記録者を配置しなければならなかった。その嚆矢は『ステパンチコヴォ村』ということになるうか。以上の諸要素が織りなしている小説の外的現象形態が、結果としてバフチンのいうポリフォニーということになったのである。

「ドストエフスキーの広場」第27号（2018年4月号）

世にはドストエフスキーを理解するためにはドストエフスキーだけを、あるいは文学だけを讀んでいればよいと思っている人々がいる。日本のドストエフスキー把握に一時代を画したと言われてきた江川卓もそうだった。

『罪と罰』のロジオン・ロマーノヴィチ・ラスコーリニコフはロシア字のスペルでР（エル）で始まっている。横にひっくり返すと6と見え、三つ重ねると666となる。一方文字を数字で表記するユダヤの秘密の表記法によって記されたヨハネ黙示録中の666がブルノ・パウアーによって皇帝ネロを表示すると解読されていた。ネロはキリスト教徒を迫害弾圧したアンチ・キリストであるから、ドストエフスキーはラスコーリニコフをアンチ・キリストとして描いた、と江川は主張、その立場で『謎解き「罪と罰」』を執筆した。しかしこのとき、彼はマルクスの『資本論』を讀んでいなかったので、同じくパウアーの解読に依拠しつつ行ったマルクスの解読を知らなかった。それで私は江川への批判をこめて『ドストエフスキーとは何か』で記した。

「マルクスは666をローマ皇帝ネロの名を刻印した貨幣（ネロ貨）と考え、ヨハネ黙示録の当該箇所を要約し、第一編商品と貨幣のうちに掲げた。「彼らは心を一つにして、おのが力と権威を獣にあたえる。この印をもつもの、或いは獣の名をもつものを除いては、買うことも売ることにも誰にもできないようにした。その印は、その獣の名、またはその数字である」。ここで「彼ら」といわれているのは千年王国のあいだにも地下に潜んでおり、人類のさいしょにして最後の的であるところの竜である。これが打倒されて初めて、「聖なる都、新しいエルサレム」の出現となるのであるが、マルクスはこの竜を商品、獣を貨幣と解読した。それによって「黙示録」の当該箇所が、人類史上における貨幣の派性を説明していることを明らかにしたのである。

貨幣の誕生の秘密が明らかになれば、その延長として資本の成立もまた分析し解明しうることになったのであって、その成果が他でもない『資本論』という先年に一度ともいわれる天才的な著作なのである」(138〜9頁)

私はまたペレヴェルゼフ関連では記した。

「江川は岩波新書の『ドストエフスキー』において、異なった表題訳のある作品を列挙している。もちろん第二作の『ドヴォイニク』も挙げてはいるが、分身でも二重人格でもどちらでもよいような口調である。しかしこの表題をどちらにするかということには、ドストエフスキーの評価の全部がかかっているのである。彼はまた主要なドストエフスキー論者の名を列挙しているが、ペレヴェルゼフを落としている。知らなかったのではなからうかと思われる。もしも知っていたならば、こうした粗略な記述はできなかったはずだからである」(26頁)

ドストエフスキーの作品の中心に立つのはムイシキンなどの例外を除いて二重人であり、後期に現れる作中記録作者も同様である。その最高段階はやはり『カラマーゾフの兄弟』の語り手「私」であって、イワン・カラマーゾフはその分身とみなされ、この人物は自らの創作である「大審問官」を物語る。その後にあたかもイワンを批判するかのように、アレクセイによって記録されたゾシマの法話が恭しく掲げられ、やがてその人物が死亡し、聖者である人にあるまじきひどい腐臭が発して、アレクセイは動揺し、信仰を失いかける。眠りに落ちて「ガラヤのカナ」の婚礼の夢を見、その婚礼の席にゾシマも招かれているのを見る。キリストの肝いりの「新しい葡萄酒」が運ばれてきて、夢から覚め、同時に堅固な信仰を獲得する。

先に進んで、今やイワンによって分身(ドヴォイニク)ではなく「おれの汚らわしい半身」とより正確に呼ばれる悪魔が幻視されるのであるが、多くを語りつつ悪魔は「僕はゾシマのことであの子に悪いことをしたよ」と言う。つまり腐臭を出させたのは自分だと言っているのである。さらにはイワンの渾身の力を振り絞った作品である『大審問官』を茶化し、イワンを崩壊させる。最後の裁判の場面に至っては、登場人物の間に入って至近距離から描出している。

ドストエフスキーの語り手「私」はこのような二重体の自由自在な存在である。すなわちペレヴェルゼフに従えば、二重人Ⅱ芸術家ということになるのであるが、江川にはこれが見えなかった。彼は言う。

△日常の身体的行動をリアルに記録する作者、そこに秘かなからくりを仕掛けるもう一人の作者。そのどちらが真の作者であるかは明らかにされない。そしてこの分身関係にあるらしいこの二人の作者を見定めようとするうちに、さらに一人、その背後にいろいろのものが幻視されてくる。よくはわからないが、おそらくこれは作者を超える存在なのだろう。その超越的存在こそがV云々。

かくて江川は自らが幻視した存在に成り代わり、原文を離れた恣意的解釈を繰り広げることになった。その悪い影響は今日に及んでいる。

三人を繋ぐものはあるか？ それは「神とは自然である」としたスピノザだ。アインシュタインは自分の思想がスピノザに由来することをくりかえし語った。マルクス『資本論』には『エチカ（倫理学）』からの肯定的引用がある。そしてドストエフスキーは？ 『カラマーゾフの兄弟』第十一編4節「聖歌と秘密」に長男グリゴリーとアレクセイの応答のなかにエチカの語が飛び交っている箇所がある。これはアインシュタインの眼には留まらずにはいなかったはずはないと思われる。

4章 Love in Vienna (ハーブンの愛)

旧姓でいえば辛島和子だったひとよ、わが妻よ

あなたが亡くなって墓に収め一周忌Ⅱが過ぎたころのことである。第五福竜丸の母港だった静岡県焼津に住む小野田という人から書信を受け取った。あなたとの出会いであった1959年のウィーン平和友好祭で全学連代表の団員でありチェコのプラハ大に留学した小野田勇の兄にあたる人からのものだった。顔は忘れているはずだが、あなたも彼には会っている。そして何よりもあの旅の全貌を記した私の『ヒロシマまでの長い道』には、大学での後輩としてちらりと出てくる人物である。思いがけない人からの便りであり、数度にわたるメールのやりとりの結果次のような事実が明らかになった。

父が戦死した母子家庭で、弟は西北大露文科に進んだが、1959年に「金のかからない留学だ」と言って、国際学連のルートで留学した、と母から聞いていた。当時自分は名古屋に就職していて詳しくは知らなかった。しかしある時期から数年おきに弟が来日し、その都度知らせて来たので会ったが、常に外国人と同伴していて、ゆっくりと話し合うことができなかった。自分の関心事はどういう経緯での留学だったのかということ、それを知るべく質したが、けして答えず、そうこうしているうちに2018年初めにプラハで死去した。国際学連を通じての留学と聞いていたので、たまたま2008年に同学連の副委員長だった石井保夫氏の『わが青春の国際学連』が出ており、ネットで検索すると先生（私、瀬川修のこと）の長文の書評が目に残った。また貴HPから露文科で先輩であることを知り、弟をご存じなのではなからうかと思ひ、お尋ねするのである、ということだった。

戦後すぐに、戦前のそれを引き継ぐように、しかし戦没した先輩学生を偲ぶように、新しく学生運動が起こり、東大を中心とする官学連と西北大を中心とする私学連が一九四四年に合併して全日本学生自治会総連合（全学連）が誕生する。これが、直ちにあたかも当

然のことにように加盟した国際学生団体に、ソ連の息がかかった本部をチェコのプラハに置く国際学連というものがあった。その学連歌の一番は――

学生の歌声に若き友よ、手を伸べよ／輝く太陽、青空を再び戦火で乱すな／
われらの友情は原爆あれども絶たれず／闘志は火と燃え平和のために闘わん／
団結かたくわが行く手をまもれ

歌詞も曲もロシア人になるもので、「原爆あれども絶たれず」とあるのは、その時期ソ連がまだ原爆実験に成功していなかったことを示すものである。しかし原爆所有後も変更されず、日本の学生運動では愛唱されていた。ついにながら関西ではそれほどなく、1951年の天皇の京大行幸の際には学生たちは日本製の「平和の歌」で迎え、天皇への戦争責任を問う質問状を大学学長に託した。京大では大事件だったもので、2001年には京大でその五十周年の集会があり、東京での前夜祭的なセミナーを、依頼により西北大が仕切り実行した。またその記録集である「戦争と天皇制」を私が編集製作した。その際の京大出身者との接触で感得されたのだが、1950年のコミンフォルムによる「批判」が原因となつての日共分裂で徳田・野坂派に属した関西では、国際学連歌を東京で優勢な国際派の歌と考え、好まれなかったようである。加えて、占領下であったにもかかわらず、百貨店で日本最初の原爆展をおこなっており、歌詞のなかの「原爆あれども絶たれず」にも違和感があつたようである。

世界青年学生平和友好祭はこの団体と、規模ではもっと大きい世界民主青年連合（ブタペスト、日本からは民青同盟が加盟）の共催で、隔年、社会主義国の首都を開催地として行われてきたもので、世界平和評議会（パリ）の会合に出席した大山郁夫は来賓として招かれて1953年のブカレストでのそれに出席しており、これが最初の日本人の参加だったと目される。

1959年のウィーンは、フルシチョフの「異なった社会体制の平和共存」の思想に基づき、初めて社会主義圏外の、しかしNATOに加盟していない中立国オーストリアに開催地を持ったものだった。

時は移り、1967年ソ連軍のチェコ制圧により、国際学連は消滅し、石井はプラハを去り、西ベルリンの自由大学で教鞭をとり帰国していたことは、その著書に記されていた。しかし小野田勇はずっとプラハに留まって、東アジア関係の貿易機関もしくは企業で働いていたようだった。

1959年8月10日、十日間におよぶ平和友好フェスティバルの最終日、日本代表団主催の太平洋沿岸諸国集会「太平洋を非核の海に」が行われた。冒頭あなたが挨拶に立ち、英独露語に通訳されたが、それはナホトカ以来、途中の主要駅で、そしてもちろんウ

イーンでは連日、一日に何回も繰り返し行われてきたあなたの挨拶の最後のものだった。往路とは異なった。帰路のソ連では集会はなく、しなくてすんだからである。

その日の夕べ、薄暮のウィーン市庁舎前の広場での閉会式。最後に、米国から東欧に亡命中だった黒人歌手ポール・ロブソンがベートーヴェン第九交響曲の「歓喜の歌」を歌った。

四人のソロが加わった合唱曲の一部を独唱したものだったが、私は長く次の歌詞で記憶してきた。

歓喜！ 歓喜！

歓喜、美しき神々の火花、

楽園の乙女、

われら火の酒に酔い、

天なる汝（おんみ）の聖殿に踏み入る。

世の習わしの、厳しくわけ隔つるを、

敢えて汝が魔力は結びつける。

汝が優しき羽交（はがい）の下（もと）、

すべての人々は兄弟となる。

躍動する生命力をわがものとなしたる者は、

ひとりの友の友とならん。

ひとりの気高き女性を勝ち得た者は、

和して歓呼の声を挙げよ！

その両側には各国代表団から選ばれた女性たちが並んだのだったが、がその最も近い場所には、和服姿のあなたの端麗な、そして永遠に輝く姿があった。」

作品『ヒロシマまでの長い道』にもこのフィナーレは記したが、「歓喜の歌」の歌詞は掲げなかった。ともかくあの旅については1985年に書かれ1989年に本になっていた。そしてそのなかには小野田氏の弟は固有名詞なしで出ていたのでそのページをも知らせた。加えて「金がかからぬ留学」だったはずはないこと、それも本には明瞭に記しているので見られたい、と伝えた。その箇所とは次のようなものである。

留学は彼ひとりの問題ではなかった。団の全学連グループには彼以外に、東ドイツとチェコへの二人の留学予定者がいた。空路で行けばいいものを彼同様に団に加わってきていたのである。ただしこの中で共産党が神経をとがらしていたのは名前の知られている彼だけだった。まことに日ソ協会の（共産党員の）H氏がいうように彼および彼のグループがしようとしていることは規約違反なのだった。それゆえに彼は団とともに帰る（帰国する）だろう。だがそのためには（国際学連の）I書記その他の関係者にそのことを打ち合え、了解をえておく必要があった。（以下、中略）

（彼女と別れて男子宿舎に向かうと）建物の入り口では、打ち合わせを終えて戻った者たちと彼は鉢合わせた。そのひとりが血相を変えて彼に食ってかかった。こんな大事な時にどこに行っていたのかいうものだった。彼は返事をせず、自分のベッドに向かい、腰を下ろした。ふと見るとスーツケースがなかった。驚いていると、「**気がつきましたか**」とチェコへの**留学予定者が言った**。その話すところはこうだった。明朝の離団にあたって（日共系の）民青同盟が実力をもって阻止するかもしれないので、予定者の荷物を全部今日の午後にホテルのI書記の部屋に運んだというのだった。あまつさえその際に自分がやると民青の連中に疑われるので（日本から同行してきた）スジョーノに口をきいてもらって同じ建物の（同国人の）インドネシア人たちにやってもらったというのだった。（最終日の大行事だった）「太平洋沿岸諸国集会」に彼が出席していた間にこういうことがなされていたのだった。（一二二―三頁）

こうしてあの夏、ウィーンでの私は一度はあなたと別れ、団を離れてブタペスト経由でプラハに向かったのだ。そしてそこから空路、列車で東進する団を追うことになり、ナホトカで合流、帰国している。またその間にブタペストで国際学連のグラビア入りの機関誌にデュラス原作、レネ監督の映画『ヒロシマわが愛』の大型の記事に接し大変に感銘を受けたことは記したが、或る事実を記さなかった。

IUSの事務局には母国語以外に四か国語を話す中年女性の勤務者がいた。私が日本原水協とかかわりがあることを知って、その理事長であり、レーニン平和賞の受賞者である安井氏の息女を知っているか、と尋ねられた。「知っています」と答えると、彼女が留学先のモスクワ留学に向かう途中プラハ立ち寄り、国際学連の事務局にも来たので会ったのである、と言い、「わたしが日本の女性を見るのは初めてでしたが、あの娘さんの美しさには驚きました。彼女は格別なのですか、それとも普通なのですか」と尋ねられた。

「格別な」と記したが、直訳すると「例外的な」となるロシア語だった。そのロシア語を受けて「例外的です」と答えると、「そうでしょう、そうでなければ日本の女性は世界で一番美しいということになるからです」ということだった。この出来事を私は省略し書いてはいなかった。

そのことをなぜ今になって書くのかと問われるだろう。その理由は先に行って述べることになるだろう。まずは小野田兄の件を片付けなければならない。

小野田兄は最後に、なぜ弟のプラハ留学の経緯にこだわる理由を明かしてきた。それは、弟には出身の静岡高校での女友だちで文通していたひとがおり、「あなたは自分史を書こうとしているそうですが、僕には書けません。なぜならば僕の人生は「裏切りに続く裏切り」の連続で、とうてい書けるものではないからです」という文面のある手紙を見せられたためなのである。それで弟がけして語らなかつた留学の経緯に問題があったのではなからうか、と疑うことになった、と言うのである。

私は念のために、外務省に入りプラハの大使館勤務の長い露文科の後輩に質してみた。「プラハには日本人はまだ数えられるほどの非常に少ない時代でしたから、その者たちで

会ってビールを飲んだ仲です」とのことだった。しかし留学の経緯については語らず、私の名も口にしなかったとのことだった。そうこうするうちに母親の遺品のなから、石井保夫に対して送った問い合わせに対する返信と思われるものが出て来たと連絡があった。とすれば経緯は石井に問い合わせればよいのであった。いわんや石井は東大医学部では先輩であるブント書記長島成郎によって、その著『ブンド私記』（1999）の中では「国際学連に派遣した」と明記されている人物だからである。

そしてついながら当時の共産党との対決を強調したこの島書においては、原水協と平和委員会は「日共寄り」と切りすてられており、私は主観的にはこちらに属していた。またあなたは第四回の東京での原水禁の世界大会で、ブンドに向かいつつあった全学連とは論争した間柄だった。

また同書には西北大のブンド派の代表者として露文科で二級後輩の片山迪夫の名がしばしば登場している。姫岡玲二と並ぶ理論家とされていたが、「裏切り」という言葉がやたらと欄発されていて、私が言葉を交わしたことのない人物だった。小野田の留学に係わったのは、トロツキズムの理論家として島から称揚されているこの片山であるはずなのだが、学科の名簿ではいぶん前から「行方不明」と記されており、とうの昔に死去しているはずであった。参考までにそのことも伝えておいた。

すでに『トリウム原子炉革命』の執筆が『ヒロシマまでの長い道』とその続編『微笑の沈黙』なしには試みられもせず、また成しえなかったものなのである。すなわちあなたとの縁で私が古川氏を知っただけでは不十分だったのであって、本では女主人公が大分市で一時期非常によく知られた女性が女主人公になっており、そのためこの本が大分市の新聞でも取り上げられ、古川家の縁者の知るところとなった。かくて和男氏も読み、拙宅に訪ねて見えることになったはずなのである。また私のほうもそれらの作品の延長として、古川氏とその仕事を捉えることができたのである。つまりずっとあなたについて書いてきたので、そのことがフクシマ後の現実につながったのである。

自分の1959年の体験と生き様を1986年になって書き、そして書き上げたのである。しかしそれはだれに読んでもらうためだったろう。それは先ずだれよりも作品の中に登場する「大学の学生運動の先輩」であり「原水禁運動の団体で要職」にある人物だった。名前は伏せられているが、松尾隆教授との関係では兄弟子ということになる吉田嘉清氏だった。「彼」と三人称化されている語り手であり主人公である私は、出国にあたって、「モスクワへの留学を目指して行くこと」を述べ、「その実現にあずかって力あった二人の全学連OBの名」を告げていた。二人はともに原水禁運動とはかわりがあった学生運動出身者であり、吉田氏もよく知る人たちだった。

ついながら団の役員会は、団長、四人の福団長、事務局長の六人で構成されていたが。このうち私を除いて三人が、松尾教授を知っていたことが後に知られている。一人は西北大出身であり学内で講演を聞いており、その印象を文集『松尾隆』では「学者という

よりは「アジテーター」と記していた。また一人はあなたが属した社会文化班の班長でもあった憲法擁護国民連合事務局の久保田忠夫氏で、学外で講演を聞いていた。そしていま一人は、一九五〇年総選挙のさい飯田橋で出陣東大教授の選挙演説中、逮捕されて裁判にかけられた十二人の一人であって、東大国際派細胞の中心メンバーの一人でもあったS氏である。松尾教授は裁判には特別弁護人として出廷しており、松尾隆没後三十周年の西北大での集まりには見えていた。いずれも当時同じひとつの団のなかであって、互いにそうした間柄にあることをまったく知らずに相対していた。

あの団では、帰路の車中で私、瀬川修ら三人の全学連グループの団規約違反無視の離団が動議として出され、その中心にあったのがS氏であって、私は帰団したにもかかわらず、団解散に先立って除名されている。そのとき氏は日共青年学生対策部の路線で行動していたはずなのだが、六〇年安保の後、数年してこの派が「修正主義者」としてごっそり党を追われるか出るようになった。こうして「松尾隆を偲ぶ会」で見ることになったのだが、私が進んで挨拶したのは、それから十余年たって、招かれて吉田嘉清にしたがって東大一九会の会合で向かい合って座ったときである。私が挨拶すると、顔で思い出したように「トロッキスト」と低くうめいた。団の中でブントのトロッキストと見ていたことの名残だった。

私はその後に、そのS氏に対して、S氏自身が私の批判者として避けがたく登場している、『ヒロシマまでの長い道』を謹呈することになった。「貴君にとって樺太がどんなに重要であったかが分かりました」という挨拶状があった。そしてその後の関係は親しいものに変わっていった。なにしろ例年一月九日に行われるのでその名が定まった東大の一九会の会合には必ず招かれることになり、また市の主催する非日共系左翼の季刊理論誌『労働運動研究』に書くようになり、石井保夫の『わが青春の国際学連』の書評もこれに掲載されたのである。

しかしながら小野田勇の「裏切り」云々を聞いて、私が言葉としてはかつての団規約違反を謝罪していないことに思い当たり、小野田の件を紹介しつつ、非常に遅まきながら謝罪して手紙を書いた。「わたしこそ大変にスターリン的に画一主義的だったと思います。貴君はドストエフスキーについて著訳書のある人ですが、私も私なりにドストエフスキーは読んでおります」とあった。あなたに触れて「奥さんは清楚な感じの方だったと記憶しております」ということだった。つまり「昨日の敵は今日の友」「雨降って地かたまる」、和解は成立しているのである。出来事はすでに古く、まだ若かった時分、六〇年安保の前年のことで、『ヒロシマまでの長い道』からも年月が経過しており、小野田勇の「裏切り」をも視野に入れつつあるいは補足し、改作する必要があるのかもしれない作品ではある。

ウィーン友好祭の二年前の一九五七年の七月だった。原水協の訪ソ使節団の五人の団員各氏は、羽田空港ロビーで吉田嘉清の司会の下、新聞社のフラッシュを浴びつつ一人ひとり抱負を述べた。すべて年配者で、ただひとりに二十代前半の若者だった私もまた最後に

己のそれを述べた。それからゲートをくぐっていったのだが、その入り口にはレーニン平和賞授与が噂されていた安川理事長の田鶴子夫人、全学連幹部で東大のKとMが立っていて「しっかりやってきてちょうだい」、「がんばって来い」と私の手を握った。吉田氏が駆けて来て、電報を手渡した。書記長の高野秀夫をはじめとする西北大の友人たちからのものだった。私の青春のもっとも輝かしい一瞬のことだが、作品では省略されている。

高野秀夫は反ブンドの構造改革派のリーダーだった。露文科の片山らによるブント傾斜を西北大への「裏切り」と批判非難し、私のモスクワ留学に反対し、後に葛飾かどこの区議を何期か勤め、落選して隅田川に投身自殺した。革共同書記長を務め、夫婦で革マルに殺害された西北大の本田嘉延のことも忘れがたい。トロツキスト黒田寛一の指示によるという噂があったと聞くが、真偽は定かではない。もっともこれらは私たちの1959年とは無関係のことである。

私は本の中で「それは、すべきではなかった。しかしせざるをえなかった、そして、して良かった」と回想されることになった旅であった」と記している、つまり複雑に屈折した出来事だったので、書くことには何度も失敗し、そうこうするうちに初源である樺太の復活、ヨッポイマツの記憶の衝撃的な甦りがあって、樺太を書ききることをえた。

ところがまだ本が出ないうちに、あなたが二度目の乳がんでついに両乳房を失った。検査の過程で腎臓にがんが発見され、片方だけでは生きられないことが明らかになって、年末に人工透析の生活に入った。加えて一年後には転移が疑われることになった。それらの諸事件の結果として書きうるものになった――旅物語である。誤診であることが明らかに、「命拾い」をして退院してきたあなたはその時の心境を告白している。「空なる心境にはなれなかったわよ。無、虚無だったわ」。そうした段階になって書きえた旅の物語だった。

古川和男氏の場合も、まことに思いがけなかったが、焼津からの小野田兄の問い合わせも同様だったのであって、私は本を全面的に再読して、忘れていたあなたのこの言葉を見出して、今日感慨を覚える。あなたは元来が活動的な性格だった。週三度の人工透析の生活がそれを奪った。

まことに本の主題は表題に掲げたようにヒロシマであり、あなただった。時代背景としては、ブント共産主義者同盟成立の翌年、六〇年安保反対闘争の前年である。しかしそれはまさに背景として描かれればよいことだった。小野田勇の「語りえない裏切り」もまたそれに属していた。すなわち友好祭の団には「全員一致して帰国する」という約束事があり、それを破り偽って離団し、留学を果たしたのだったのである。一方私がそのことを書いて、書きえているということは、それを目指して出国したのだったが、断念放棄して帰国したからである。そして年月を要したとはいえ本に記し、その兄の問い合わせに対しても、本のうちの外套する頁のナンバーを記して答えることができた。これもあの団にあなたがいてくれたならばこそ実現したことだった。

年数がかかっただけではなく、これもまた思いがけなくも、松尾隆のドストエフスキー関連遺稿（ペレヴェルゼフ）の発見とその処理のため、発表が1989年とさらに三年遅れにずれこんだのだが、ブントの裏面史に光を当てたものとして、その先駆性も評価されたいものである。安保国会の突入にしても、島が「四、五人は死ぬかもしれない」と語っていたという説がある。いずれにせよ一人の女子学生でも痛ましいのに、三、四人も死んだらどんなことになったのだろうか。

その題名から想起されるのは、それに先立つ安藤仁兵衛の『日本共産党私記』（19775）であるが、私に関係なしとはいえない島成郎の『ブント私記』が出たのは、1999年である。私に対して十年遅れだったこともあり、私は本屋で立ち読みしただけで購入しなかった。ところが『西北大・一九五〇年・史料と証言』製作時に収集した資料を、求められて大学の資料研究センターに収めることになり、老衰した吉田氏に代わり、保管先の吉田家で私とその処理をおこなった。そしてその際に彼の書斎に書き込みのある島書を見出し持参、しばらくぶりで目をとじた。次に一文が小野田勇にも関係がありそうである。

ブント書記長としての私の活動は多岐にわたらざるをえなくなったが、正直な話、最も苦勞したのが金集めであった。闘争が思いがけない規模に一挙に膨張したため、闘争資金も十倍、二十倍も要求される。（略）金にまつわることは裏方によって行われるため「正史」には残らないのが常で（略）：ただブント書記長として私が果たした最大の貢献はこの非公式の金づくりにあったことだけは証言しておこう。（略）私たちの「刑法犯」の犠牲になりながら愚痴ひとついわずに許してくれた方々におそまきながら感謝とお詫びを著すしだいである。（105頁）

ブントの幹部は概して短命で、島もこの翌年に、またその中枢からは遠かったらしい香山健一はその前年に亡くなっている。この派の数人のインタビューを収録した書に『60年安保 6人の証言』（2005）があり、その証言者の一人に、文化大革命下の中国に出張して出て出会った東大中文出身の旧知の小野寺正臣がいた。一緒に毛沢東の故郷紹山を訪ねた仲である。そのことを話すと「ストレスが多いから」ということだったが、この人もそれからほどなく亡くなった。森田実だけが存命で政治評論家として活動し、最近も共産党否定の文章を創価学会の雑誌に発表している。宮本顯治が嫌いで1958年に共産党を除名されてからは、宮本共産党を憎み続けて生涯を過ごしてきたことになる。

その今日的評価ということで思い出されるのは、ブント全学連との「癒着」（と自称した）的支持者に吉本隆明がいたことである。その吉本の原発（軽水炉）擁護を共産党のそれと並べて『原発と御用学者』（2012）の著者土井淑平という人が「吉本と宮本は一字違いで瓜二つ」と断じている。この言葉を含め多くの点で賛成な著書なのであるが、トリウム

熔融塩原子炉を知らずにいることで、私とは相違している。そしてフクシマ後の私には、あの六十年安保前後の問題もこの希有の真実の光を当てて観ることが正しいと思われる。なぜならば古川和男はすでにこの時期に生涯にわたる方向を定めていたからである。

あの団で初めて会ったのはあなただけではなかった。そのうちには『ヒロシマ』にも『微笑の沈黙』にも私たちの親しい友人として登場している当時は物理学生連合の会長にして全学連代表、後に高名な物理学者になった大槻義彦がいる。大衆的には「火の玉」の解明で知られた学者だ。私とあなた、また彼と彼が好きだった女子大生の四人は、すでにソ連を横断する列車の中で親しく、ウィーンでは、彼の言葉によれば「実の兄弟姉妹のような関係」になっており、それは帰国、団の解散後も続き、今日に至っている。

物理学者はあなたの葬儀には海外にあって、「これが被爆者か！」と驚いた初対面のあなたについて回想し、三〇年におよぶ人工透析に触れて「大変だったろう」と思い、涙に暮れています」という長文のメールを送ってくれた。また帰国後には花輪をもって焼香にきてくれた。彼は森田実には強い批判者である。それもなんとあの旅のシベリアの車中での話し以来なのである。彼自身かなり長く共産黨員だった人である、

多くの副次的事柄を省略排除もしくはごく簡潔な記述にとどめ、もっぱらあなたに捧げられた作品であり、それなりに完結している。不十分な箇所があるが、書き直す必要はないと思ってきた。レオノフの場合とは異なって私がしなければならないのは今日ただいまの問題、あなたに導かれて到達・開眼した古川トリウム熔融塩炉FUIJについてである。それこそがその後の『微笑の沈黙』を経ての私が到着した地点であるからだ。いわんや原水爆すなわち核兵器の禁止と廃絶、平和で安全な核エネルギー炉の両問題はあの六〇年安保前年の年にはすでに存在していたのであり、古川学は六〇年安保反対闘争が何であったかだけではなく、第二次世界大戦後の日本と世界が何であったかを明らかにしている。

人生では時として、短い日数また時間帯に非常に大きな諸事件が集中的に重なり合って起こり、その後の人生がそれについて考えるためだけのものだけになる、といった時間帯がある。私の場合は1959年夏の27日間のウィーン平和友好祭の旅がそれだった。1986年にやっと書き終えられ、しかし1989年になって公開した第二作が主題とした諸事件であって、表題にヒロシマが入る物語である。それから二十五年たって、副題にはあるが、やはりヒロシマが入る作品を著すことになった。

この間私には次の仕事を何にしようか思案した時期があった。ペレヴェルゼフの次作『ゴーゴリの創造』の翻訳を手掛け、結局『ヒロシマまでの長い道』の続編としての小説『微笑の沈黙』に取り掛かることになった。時あたかも、大分市のあなたの父上没後に母上を迎えて住むべく入手した持ち家だったが、その母上が亡くなり、また一時あなたが一人では電車で通院できなくなって、それを放棄し、透析クリニックに歩いて行ける場所に転

居することになった年だった。その苦難の日々の物語で、1995年の公刊である。それを書き終えた直後に、所属する市民平和運動の団体、平和事務所の機関紙『ピース・ピア』に寄稿した文章があることに思いあたった。そしてこれが、両作品の理解に資し、いま何をなすべきかを指示するので、以下に掲げることにする。

ヒロシマとは何か（1994・11）

ヒロシマについて書かれている思想的、文学的な文献はすでに多大である。しかしながらそのなかからもっとも重要にしてかつ根源的なものを一つだけ選ぶとすれば、それは大江健三郎の『ヒロシマ・ノート』（1963〜4）でもなければ井伏鱒二の『黒い雨』（1964〜5）でもない。それは日本人によって書かれたものではない。それはベトナム生まれのフランスの女流マルグリット・デュラス（1914〜？）の映画のためのシナリオ『ヒロシマわが愛』なのである。

彼女は、アウシェビッツを描いた優れた記録映画『夜と霧』の映画監督レネに従って、ヒロシマを主題としたシナリオを書くべく一九五八年に来日した。

かくて広島市に滞在し、原爆資料館には三度足を運び、原爆病院を訪ね、『原爆の子』を始めとする関連するすべてのフィルムと資料を見た。その結果後に彼女が記しているところによれば、「ヒロシマについて語るということは、それについて語ることは不可能である」という結論に到達した。

彼女は「原爆を悲惨として描くことは日本人にまかせよう」と考え、広島における一組の男女の行きずりの恋の物語を作った。平和を主題とした映画の撮影のために来広したフランス人女優が、その仕事が終わわり、明日は帰国するという日の前日にヒロシマの日本人男性と性的に結ばれるという物語であった。

映画は最初の「情事」が行われた翌朝のホテルの一室から始まる。ヒロシマの男性は彼女に広島に留まってくれるよう頼む。せめてもう一日、というわけだった。しかし二人はそれぞれ配偶者のいる人々なのである。

フランス人女性が広島で恋におちたのは、原爆を知ったことの衝撃のためである。彼女はヒロシマで原爆を見た（知った）と思う。しかし原爆を見る（知る）ことは不可能なのである。それを見知っているものから見るならば、旅行者のヒロシマ理解などというものは底の浅いものであって、デュラスは「君は何も見なかった」という声を広島の虚空に聴かないではおれなかった。そして作品の女性はその声に引き留められ、その言葉の意味を知るべく、日本人の男性を受け入れたのである。

大江健三郎は『ノート』のなかで「広島は人類全体のもっとも鋭く露出した傷のようなものである」と述べているが、デュラスはそれよりも六年前にまさにそのように実感し、それを表現したのだった。

1964年に大江がそのように記したのは、原爆の災害がまさにそのようなものであったがためである。しかし彼が『ノート』を書くためにはその事実だけでは不十分だったのである。彼が告白し、今日では非常によく知られているように、このとき同時に彼の最初の子息が脳に障害をもって生まれていて、彼がそのことに驚愕し、打ちのめされていて、彼がその悲運を引き受けて闘う必要に迫られていたからであった。そのことが被爆者の理解を深めたのであり、彼はその「個人的体験」から広島を把握し、『ノート』を書きえたのだった。

それと同様にデュラスは女主人公の広島への理解と共感の根底にあったものとして、女性のフランスでの過去を明らかにする。戦時下で十八歳であった彼女は占領軍のドイツ兵と恋におち、情事にふけた。そして「解放」後にドイツ兵は射殺され、彼女は髪を刈られ、町中を引きずりまわされ、故郷の町にはおれなくなって、パリに送り出された。その到着の朝、新聞のトップ記事に広島への原爆投下が報じられていたのだった。

広島で彼女は己が過去の傷痕を思い出す。そして常にヒロシマの痛みとともに生きることによって、個人的な傷を忘却に委ねようと決意し、またそれが可能となったことを知るのだった。

デュラスがまた大江がそうであるように、私は広島もしくは長崎の生まれ育ちではない。私は樺太に生まれ育ち、ソ連占領下で暮らし、十五歳の年に引き揚げた。大学ではロシア文学科に進んだ。師事した先生に平和運動家だった人がおり、その縁で一九五七年に日本原水協の訪ソ使節団委加わることになり、この前後に初めて被爆者である人々に出会った。『ヒロシマわが愛』という作品の存在を知ったのは、その二年後ブタペストにおいてだった。国際学連の英文の機関誌で岡田英治とエマニエル・リヴァのスチール写真の載った紹介記事を読んだのであった。私はその二週間後に東京の小さな映画館で、『二十四時間の情事』の訳名で封切られていたその映画を見て感銘をうけた。私はその翌日に西下し、初めて原爆資料館を訪ね、大分市に至り、現在の家内に求婚したのだった。彼女はヒロシマで一・三キロ地点で被爆しており、この時期大分市に住み、県被団協の事務局長をしていた。私たちは平和運動にかかわってこの年ヨーロッパへの旅を共にしていた。

結婚後一九六二年に最初の子が生まれたが、その子は心臓に欠陥があった。ファロー四兆症の二つを有する重症のものであり、満四歳になった時点での手術が予定されていた。そのような状態で、商社でソ連貿易の担当者として勤務しつつ私は大江の一連のヒロシマにかかわるルポルタージュを読むことになった。一九六三年に雑誌『世界』で読み、翌年岩波新書に収められて読んだ。その小説作品はそれ以前から読んでおり、その後も多く読んできている。そして今日しばらくぶりで『ノート』を読みなおした。そしてこの作家が出発以来マルクス主義者ではないことを繰り返し表明してきたことについて考えざるをえなかった。

大江とは異なってデュラスはマルクス主義を標榜する人である。彼女は戦中のレジスタンスからフランス共産党に入り、一九五〇年にスターリン主義に抗して除名されている。

以来彼女は共産党とソ連にきびしく対決してきた。共産党のマルクス主義にたいしては「すでに死体硬直を起こしている」とまで言い切っていた。ところがそれを予見していた観のあるソ連の崩壊が現実になじて後には、一転してマルクス主義擁護の姿勢を示している。彼女はいまや死語と化した感のあるプロレタリアートという言葉を生きいきと語っている。今日では稀なる作家のひとりなのである。最近のインタビューで彼女は述べている。「私は七年間共産黨員でした。魂はいまでも共産主義者です」「共産主義のうちで成功したものは何ひとつありません。全体的な殺人のようなものでした。現在それが不可能かどうかということはみんな知っています。でも共産主義の思想は、その夢はいまもここにあります」。

大江は共産黨員だったことはなく、マルクス主義者か実存主義者かということでは、実存主義者として出発した。そしてそれは国際的にはスターリン批判があり、日本でもとくに学生運動のなかでそれに呼応する動きがあった年に彼は登場しており、1958年には記している。「ぼくが全学連の指導者に会いたいと考え始めたのはこの事件（一九五八年の日共本部のこと）が契機となった。それにぼくも三十万の学生の一人として全学連に属している。そこでぼくは全学連の委員長と委員、二人とも共産党から除名されたという点で、勇敢に身をもって全学連の中央執行委員会の独自性を主張した二人に会ったのである」「香山健一氏と森田実氏はじつにすばらしい青年であった。僕は彼らとおなじ学校の学生であることを誇りにしていると思う」「これは明らかに予測できることであるが、十年後日本の革新政党のリード・オフ・マンは全学連の執行委員会です。鋭い頭と逞しい行動力の若者たちに握られるであろう」（『叫ぶ全学連とふるえる学生』、雑誌『文芸春秋』1958年 号）。大江はこの文章をその後の評論集に収録していないが、当時は注目されたのであり、たそれゆえに注目されねばならない。

大江は「ふるえる学生」の立場でこの文章を書いた。そしてそれは後に『ヒロシマ・ノート』に連なり、反核の論客になってゆく立場でもあった。そしてここで思い出されるのは、この時期「叫ぶ全学連」（つまりブンド共産同）の「反ソ・反スターリン主義」を支持していた人に吉本隆明がいたことであって、この評論家は八十年代に入って反核に異論を唱えて論陣をはるようになった。（以下、先の章に記述した文章と重複するので大幅に削除）大江健三郎はまことに賢明かつ幸運にも左翼運動に加担しないですんだ。その文学的成功はもちろん才能によるが、また多大にそのことにも負っているのである。しかしマルクス主義者であった人に師事し、共産党に属したことのある私の場合には、そのことを視野の外に置いて、己のヒロシマを語ることはできなかった。なぜならば私は1959年に共産党からの離党を決意すると同時に被爆者の家内との結婚を決意していたからである。しかしそのことが書けるようになるためには、私は先輩の吉田嘉清が、引き続きずっと日本原水協にあった人が、1985年に共産党を追われるのを待たねばならなかったのである。

大江は『ノート』の結びにおいて「被爆者の同志」であるよりほかに正気な人間として生きようはない」「正統的な原爆後の日本人とみなす人々に連帯したい」と記している。私は結婚して五年してこれを見たのであるが、我が意をえたと思ったものだった。しかし結

婚の結果私の人生で何が生じ、また人生がどのようなものになったかを私は知っている。

1984年以来、わけても1988年以来私は彼女のおかげで苦難の生活をよぎなくされて生きてきた。それがもし原爆のためであるとするならば（もちろんそれを証明する手だてはない）、私は原爆が何であるかをこれによって十分に知った。なにしろ彼女には二十回は死んでもらいたいと思い、しかし支えて生きてきたのであったからである。

どうにか持ちこたえることができたのは、私に先天的な病異変をもって生まれ、四歳十か月で逝った子があったからである。私はその子に命じられ励まされて、彼女を救ったのだった。そのことに思い当たり、夫婦の二十余年を記すことになり、二年を要して最近私は『微笑の沈黙』六八七枚を書き終えた。

この先は1956年に四十九歳で逝った松尾隆教授について書こうと考えている。戦後精力的に平和運動に従事し、原水爆禁止運動の前史を作った人だった。その運動の成立は教授の晩年の出来事だったが、それを「日本の（パリ・）コミュニケーションですのう」と生地、長崎県島原の言葉で語り、それに多大の期待を寄せていた。

島原半島の南端の高来町の真宗の寺の出身である。現在は甥の血筋にあたる人が住職であり、南国的な植物の茂る広い庭の一角にはその人によって建立された立派な親鸞の銅像が立っている。そしてそこからは1837〜8年にキリシタンが立てこもり、最後は玉碎して果てた原城跡の岡が望まれるのである。また寺の裏山は今日では公園になっているが、日本最初のセミナーオが置かれた場所だということだった。一帯は老若男女すべてが乱によつて死に絶え、乱後にはまったくの無人の血となったところである。つまり現在の住人はすべて乱後に移住してきた人の子孫なのである。真蔵寺は近くの柳川立花藩から出ていた。

幕府は仏教の場合でも一つの宗派が強くなるのを警戒し、各宗派の寺を一つずつ置いたという。それらの寺の僧侶たちは毎年乱の終焉の日には集まって、合同で城址で読経を行っている。

当時好んで移住したいと思ったものはいなかった。かくて幕府は西日本の諸藩に人を送るよう命じ、諸藩は囚人を送ったと伝えられている。土地の人たちは、寺の住職一族以外は囚人お子孫であると認識している。たとえば半島一帯は九州では例外的に素麺の生産が盛んであるが、それは讃岐の小豆島からの移住者が伝えたものとのことだった。（重複するゆえに後略）

百五十人の三十五歳の年齢制限下の男女による、ソ連経由でウイーンに至る、船と列車による長い旅があった。私は両親はじめ人々に「モスクワに留学する」と言って旅立っていた。国交回復からまだ数年でまだほんの数人が特殊縁故的な形態で留学を果たしていた時期のことである。述べたように東京Ⅱモスクワの空路が開かれるのはずっと後、六十年後半になってからであった。

その二年前のモスクワ行の延長として留学を目指したのだったが、私は団とともに帰国し、翌年あなたと結婚した。式は二月に大分市で挙げられた。続いて四月末に北海道十勝の親族だけの式。そして五月、東京で披露宴ということになった。上野駅で送ってくれた年長のロシア文学者に、当時すでに業績を著していたが、後にソルジェニツインの『収容所群島』の翻訳で広く知られることになった木村浩さんがいた。その人が披露宴で私たちの結婚が英字紙で『Love in Vienna』の見出しで出ていたことをかい摘んで話してくれた。

あなたは太分県下ではテレビやラジオにも出演する知られた被爆者活動家であって、それまでも、新聞にも書かれていた。その延長で結婚にあたっては西日本新聞（福岡）の取材をうけ、「辛島和子さんに春」の見出しで、結婚が私たち二人の写真入りで大きく報じられていた。これらが東京の英字紙の目に留まり、記事にされたのだと思われる。これで見られように、木村さんは私たちの結婚をすんなりと認めてくれた。しかし同じくロシア文学者であり、後にS社の新しいドストエフスキー全集の中心的翻訳者となった江川卓さんは違っていた。氏によれば、「留学する」と言って出国していった私、瀬川修がおり、帰ってきて半年後に結婚した瀬川修がいるのであって、そこには無ければならない「中間が無い」と挨拶で述べたのであって、確かにそうであって私には理解できることだった。「中間」――それを口で言うのは困難で、書く以外に術はなかった。

「中間」――それは、日本原水協初代理事長、法政大学で最後は法学部長だったはずの安井郁氏と家族の方々に係わるものだった。これにまったく触れずにあなたとこのことを書けなかったので、『ヒロシマまでの長い道』では必要最小限だったが、書くことは書いた。

後に私が初心に立ち返って樺太について書くことになったとき、私はあなたをその物語に連れて行った。すなわち私は、樺太大泊で、在校していた中学校の最初の授業で原爆について教えられ、大きな感銘を受けたことを記しつつ、引揚後の最大の事件としてあなたとの結婚を挙げ、その遠因がその授業に有ったとした。

私の最初の樺太の本は、わが家とか係わりのあった露日の夫婦とその混血の息子と娘たち、彼ら彼女らの敗戦後の分裂と別離の物語である。その状態は1984年には解決のめどは立っていないかった。それは硬直した国であるソ連の崩壊に近い変化を待つ以外になかった。かくて私は、結びにおいて四歳十か月で逝った私の長子に「耐え忍ぶということ、それを知ること、それが叡智に繋がることになる」というデュラスの言葉を語らせることをもって、作品を閉めた。

木村浩さんからは心のこもった熱い手紙をいただき、これは今も大事に保持している。しかし江川卓さんからは音沙汰無しで、早大横田瑞穂先生の偲ぶ会の席で見かけたので挨拶すると、「立派な仕事だと思いました」ということだった。私は氏の言った「中間」はその作品によっては書いていたとは思っていなかったもので、そのことも起因して、すぐに次作として『ヒロシマまでの長い道』に取り掛かることになった。あなたを、あるいはまた原水爆禁止の大義を、指摘されたところの「中間」として書くことになった。

松尾遺稿に取り組まなければならなくなって、それがペレヴェルゼフの『ドストエフスキーの創造』の翻訳と特定するまでに一年、完成から三年遅れて1989年に翻訳書と同年に出たのだったが、朝日その他に新刊紹介が出たので送らなかった。私としてはむしろペレヴェルゼフにたいする反応を期待した。江川氏がペレヴェルゼフを知らず読んでもいないことは明白だったからである。そうこうするうちに氏の健康状態が良くないことが知られ、やがて亡くなった。偲ぶ会には赴いている。そして私は後に自著『ドストエフスキーとは何か』において彼の『謎解き』『罪と罰』の欠点を指摘することになった。

小野田勇の「裏切」云々から明らかになったことに、私が氏からの要求であった「中間」については、『ヒロシマまでの長い道』においても不十分にしか書いてはいないことだった。小野田勇がこの本を読んだかどうかを私は知らない。知っているのは、数度にわたって来日していたとのことだが、私を探して会うということをしらず、私もまた同様だったことである。共有した思い出が笑っては語れない苦いものだったためだろう。

こうしたことを含めて、1959年夏のウィーン友好祭の日本代表団での私の振る舞いは批判されて仕方ないものであり、批判者のうちには当時はわが吉田嘉清氏もはいつていたのだった。

あの翌年の二月、大分市での結婚式の直前、大分被団協が別府市につくった全国の被爆者が利用できる温泉療養センターの開所式があつて、吉田は被団協担当の市村事務局員とともに出席した。あなたの結婚が話題となつていて、帰宅したあなたは「こんな侮辱をうけたのは初めてだわ」と怒りを顔に表していて、私は原因がわたしにあると承知していた。それでも東京で会う機会があつたとき私は抗議しようとしたのである。しかしすぐに察して「イヤア、イヤア、申し訳ない、（あなたが）美人なので、（自分は）妬けたのかな」と弁解した。しかししこりは残り、これが真に解消するためには、二十五年後の1985年、氏が共産党を追われ、平和事務所を立ち上げ、私にも参加を求めてくるのを待たねばならなかったのだ。

その後の関係はまったく良好に推移してきた。季刊雑誌『早稲田・1950年・史料と証言』での「松尾隆」の連載も氏の強い支持があつて可能となったものだった。

原水禁・反核運動は分裂と統一、再分裂と歩んだが、その原因となつていたものは、核の廃絶を目指す反核と反原発（ウラン軽水炉）の運動が互いに「住み分け」の形に分離して、しっくりした統一の関係にはなかったことにある。

私は吉田氏を説得し、『トリウム原子炉革命』の帯の裏に推薦の言葉を書いてもらっている。私はこれを由緒あるわが国の原水爆禁止運動への貢献だと考えていた。なぜならばこれが無かったので運動に分裂と混迷が生じていたからである。

「古川博士はヒロシマ・ナガサキの禁忌の声を聴き、トリウム熔融塩原子炉の開発に向かい、生涯これに捧げた。著者夫妻は私の年来の友人・同志であり、夫人は古川氏の幼馴染と聴く。「博士の遺言に耳傾けよ」と説いているが、私もまたこれに従うのである」

私は意図していたモスクワ留学を実現せず、ウィーンでいったん団を離れたが、プラハから空路で追い、ナホトカ港外で出航を待っていた往路と同じソ連船上の団に戻った。私を迎えたあなたの不思議なものを見るような顔を覚えている。

その二年前の最初のソ連行から空路帰国した二十四歳の私には、迎えてくれる恋人はいなかった。しかし二度目の団体での旅には、あなたが居たのであって、私は翌年そうそうにはあなたと結婚し、留学のみならず、数年後にはロシア文学者への道も断念して会社員になった。無念でなくはなかったけれど、私はそのことを幸いだったと思っている。あなたとの生活を持続して来たおかげで、長い年月を経てのことだったが、古川和男という稀有な真実への到着が実現したからである。もともとこれも十四歳の年の樺太の故郷の村との別れの体験に真因していたとも思われるのである。

5章 トリウム熔融塩炉 F U J I

かつて書いた文章「ヒロシマとは何か」を再読することになったのは、あなた、辛島和子との出会いが、時期的に完全にデュラス文学との出会いと重なっていることを確認するためでもあった。あなたがあの稀有のフランス女流に導いたのであり、そしてそのあなたが、自身ではまったく意図しないで、夫の私を、幼馴染の古川和男氏に、そのトリウム熔融塩炉に導き、私がそれに関連して本を書くことになり、そしてそれが、それ以前に書いた（および訳した）本同様に、即ちそれなりの影響をもつことになったからだ。そしてそれから四年たって、歓迎すべき新しい動きが出て来たのであって、私はそれについてあなたに報告したい。

述べたように私はすでに1980年代末に弟の古川雅章から兄和男氏の研究について知らされ、その後にチェルノブイリにも行って来ていた。またこれとの関連で反・脱原発の動きが強まり、それらの動きとも接触があった。しかしヒロシマについて考えつつ、原発との関連をつきつめて考えることはしなかった。すくなくとも十分ではなかった。私が現行の原発が否定されねばならないものとして真に目覚めるためにはフクシマを待たねばならなかったようである。

もっとも福島原発は、すでに久しく住む集合住宅の隣人が、リタイアしていたとはいえ、その勤務者であり、天皇の訪問の際には説明者のひとりだったそうで、あなたはその夫人と親しく、私にとっても身近な存在だった。しかし古川兄弟の訪問をうけていたこの意味は大きく、フクシマ後に古川書を一読してただちにその驚嘆すべき価値を知った。こうしてすぐにお会いしたい旨手紙を差し上げたのである。たまたま民放の「著者に聴く」という番組に出演が決まっていた、誘われてそれを局で傍聴することになった。控室でお会いすると「ここまで書いてくれるとは（もはや言うことはない）」という感謝の言葉とともに、雑誌論文の増す刷りを手渡された。「安全な原発はなぜ潰されたのか」という表題のもので、執筆者は同番組の司会者、雑誌「文芸春秋」の元編集長堤堯氏だった。購入はもちろん、私がページを開いてみたこともない右寄りの雑誌『正論』がその掲載誌だった。

著者への堤の惚れ込みは大変なもので、堤はこの後すぐに迫りかけるように大磯の古川宅にカメラを持ち込み、冒頭で「なんとかしてこれを実現させて差し上げたい」と宣言してロングインタビューを行った。そこで古川は数々の貴重な証言を行っている。一九八〇年加速器熔融増殖炉 A M S B の発明により、自民党にトリウム利用促進議員懇話会（会長・二階堂進、会員一〇八名）が発足しており、この際、米オークリッジ研究所所長ワインバーグ博士は総理大臣中曽根康弘に親書を送っているのだが、握り潰されていること。

その「失礼」が無念とともに語られている。「家族をはじめとした多くの人々の励ましと支持のもとに進められてきた研究、また啓蒙活動であった」が、「たった一人（だけ）の時もありました」とも述懐されていて貴重である。まことにその核エネルギー炉研究は、原発研究の一条の清らかな流れであり、その学は「荒野での叫び」だった。

私は堤にも感服し多大に刺激される。彼に負けまいと励み、途中で、要請されて『日露領土紛争の根源』の著者として同じくこの人主催の「著者に聴く」の番組に出演したりしながら、2013年末には初稿を完成した。そして、古川『原発安全革命』の発売元である、堤の古巣の文芸春秋社から出してもらうべくTに相談、彼のアドバイスに従って同社の担当者に送ったのであるが、なぜか出版には至らなかった。堤に会って質すと、「原発にせよ原発にせよ、放射線による被害は誇張されている」ということだった。そしてその後、堤の番組には『それでも原発は止められない』といった原発擁護の著者の番組が組まれるようになり、私は彼に変節を見ことになった。その後古川雅章と和男氏子息の和郎両氏との番組が土壇場でキャンセルされている。そして最も重要なのは、「この原発であれば、チエルノブイリもフクシマもなかった」と帯に記して発売した古川本を同社が廃刊（？）にしたことである。どこからの相当強力な圧力がかかったとしか思われない激変だった。

しかし堤の古川学への寄与は多大であり、貴重なものとして残っている。フクシマ後日本原水協の初期の勤務者だった武藤一羊はその著書『潜在的核保有と戦後国家』に記している。「一九五七年、政権に就いた早々、岸（信介）は参議院で、「自衛権の範囲内で核保有は可能だ」とし、衆議院でも「核兵器という名前がつくだけでみな憲法違反だ」というが、そうした憲法解釈は正しくない」とした。一九六〇年の安保改定で日

本を米国の覇権戦略の自発的参加者に組み込んだ岸信介は、改憲を政治的使命としながらも、現行憲法のもとでも自衛のための核兵器は保有しようとする驚くべき憲法解釈を導入した首相となった。この立場は以後歴代の自民党政府によって引き継がれ、繰り返して再確認されている。しかしそれらは原子力産業とは切り離された言語空間に位置づけられてきた。実態と名分は別々に用意され、いつでも合体できるように並べておかれることになったのである」（94頁）。武藤はこの後、『戦後レジームと憲法平和主義』での「安倍極右政権」批判に向かう。

古川和男は自らが立つ位置を、エネルギー問題における「第三の道」と呼んでいた。すなわち右手に現行のウラン・プルトニウム軽水炉の原発路線があり、左にそれに反対する太陽光発電を主とする各種の再生可能エネルギーの路線がある。原発の発足当初、ウラン派とトリウム派の抗争があったことが、米でのウラン派の勝利とともに忘れられて久しく、原発派も反原発派も、対象とする原発がウラン軽水炉だけとみなしていることで一致してきた。フクシマ後これが訂正されるかと期待されたが、国際社会でのトリウム路線の評価の高まりとは逆行して、日本国内では変化は無かったに等しかった。一

存在しているのは二派の対立であり、フクシマ直後では後者のほうが優勢となった。にもかかわらずウラン軽水炉の再稼働が進んでいるのは、原発問題を隠蔽して選挙に勝った自民党によって安倍内閣がつくられたからである。そして岸を継承する安倍晋三によって、憲法9条「改正」と原発再稼働はセットで進められてきた。

その安倍政権の近年顕在化している、もはや腐臭を放つまでになっている腐敗の原因はどこに在るのか。それは突然表面化したのではなく、長期にわたる蓄積の結果である。内心の不安を押し隠しつつ、「安全だ」「安全だ」と自他を欺きつつ、四十五基ものウラン軽水炉を建設し、2005年頃からは「原発ルネッサンス」を口にするに至っていた勢力が強固に存在した。この腐敗は日本社会全体にまん延しないではなかった。それが近年、「取り戻そう、日本」の合言葉の下、政権の下で膿となって現れているのである。

原発推進を目的とする国家機関、原子力委員会で委員長代理をつとめながら、他方でパグオッシ運動に参加してきた人に鈴木達治郎氏（1951〜）がいる。フクシマで衝撃をうけ、自己批判しつつ民党政権下で長崎大に新設された核兵器廃絶研究センターの教授となった。こうしてこれまで二度広島で行われてきた同会議の国際会議を、二〇一五年初めて長崎で開催することになる。一時なりを潜めた原発派が盛り返してきている、と氏は観察していてその著『核兵器と原発―日本がかかえる「核」のジレンマ』（2017）では、冒頭で「三・一一以前に逆戻りしているのではないか、という危機感」が表明された。

鈴木は「脱原発か否か」の「二極対立」について述べる。しかしこの対立する二つの勢力が、原発を現行のウラン軽水炉を念頭においていて、他にはいかなる原発も存在しないという認識では共通していることを明確に語ろうとはしない。彼は原子力が「ジキルとハイド」の「二面性をもった技術」であることを指摘する。それは現行のウラン原発につい

ては当てはまるが、トリウム熔融塩炉については当てはまらないことを、フクシマ以前においてはおもかく、以後には知ったはずである。2016年にはITMSFの吉岡律夫と木下幹康を原子力委員会で話させているのだが、しかしそのことを著書においては語らなかった。

古川和男に日本国内に早くからの支持者がいなかったわけではなく、拙当該書はそのいくつかを紹介した。しかし執筆当時はその存在を知らず、その後になって知った重要人物に元朝日論説委員の科学ジャーナリスト、飯沼和正氏（一九三二～）がいる。トリウム熔融塩原子炉関連の最初の執筆は1977年『金属』という専門誌の「原子力発電…トリウム・サイクルの検討を」というものであって、そこには古川の名はまだ出ていなかった。彼が加速器熔融塩増殖炉AMSBS発明したのは一九七七年、続いてその単純小型密閉式FUJIの発明に至ったのは一九八五年であり、二〇〇一年に『「原発」革命』が出て一般にも話題となった。「原発」と括弧で括られている原発は、現行のウラン・プルトニウム原発を指しており、それを革命的に変え、それにとって代わる新たな原発の提示を目的とした書だった。

二〇〇九年に米議会に「トリウム原子力法案」が提出されて、六月飯沼は社会民主党の機関誌『社会民主』に、東芝で福島原発の設計に従事してきつつ、当時すでに古川和男の筆頭の後継者となっていた吉岡律夫（現ITMSF名誉理事長）の校閲を経て、連名で「ウラン」から「トリウム」への政策転換か!？」を発表。七月にそれらを要約するエッセイ「核兵器の廃絶をめざす「トリウム原子力」の研究」を出身の京都大学新聞に寄稿している。拙著と完全に一致する主張が展開されており、心強く貴重だと思われるので左に紹介させていただく。

トリウム原子力

飯沼和正・吉岡律夫

「トリウム原子力」とは現行の「ウラン核燃料」とは別系統の独立した原子力（発電）技術である。核爆弾の原料であるプルトニウムの産生とは無縁か、もしくははその減量に大きく役立つ技術である。だがそれは久しく政治的に「埋め殺し」にされてきた。それを今、京都の若手研究者たちは気付いて、叫び声を挙げ始めている。（略）

米オバマ新政権の側は独自にその技術の重要性に気がついている。昨秋、上院にはすでに「トリウム原子力法案」が提出。その一方でこの四月には旧来のウラン原子力法にもとづく重要施策、「GNEP」計画の「断念」が明らかにされている。

研究の自由が公認されている大学で、今こそ「トリウム原子力」への本格的な取り組みを始めるべきではないか。そのことを深くせつに望みたい。

現行の原発技術体制はウラン系核燃料によって立っている。しかしこのウラン系「核燃料サイクルは必ずプルトニウム（核爆弾の原料物質）の産生が伴う。というよりはプ

ルトニウムの産生と利用が大前提として成り立っているのが、外ならぬ現行の（軽水炉による）原発技術なのである。

この産生したプルトニウムを未だ完成していない仮定の「増殖炉」（注・仏教の菩薩の一人である「もんじゅ」の名を冠した）で、燃料として利用する。それを燃やして消化しさらに発電する。このような仮定に立った理論「核燃料サイクル」でもって現行の原発体制は構築されている。

ところがこの理論が、今、崩れようとしている。この「核燃料サイクル」にとって最重要で、かつ不可欠な一環である「増殖炉」の実現が、世界でも日本でも破たんしかかっているからだ。その開発はすでに頓挫している。それが事態の現況なのである。

にもかかわらず、思慮浅き、日本のリーダーたちや、そして最近までの米国のリーダーたちは、（ウラン）原発こそが地球温暖化防止の「決め手」などと、巨費を注ぎ込んできた。

確かに、原発は炭酸ガスこそ放出はしない。しかし「増殖炉」なき現行のウラン系核燃料サイクルでは、今後、プルトニウムのヤマが世界各国に厳然として残るのである。日本だけでも、すでに今、70トン程度のプルトニウムを保有している。ちなみにヒロシマ・ナガサキ級の原爆が必要とした原料物質は、プルトニウムであれば、せいぜい8～10キログラムであった。

「トリウム原子力」の最終的な姿は「熔融塩発電炉」方式だと目されている。この方式ならば、理論的にプルトニウムは全く産生しない。しかしこの「本命」にたどりつくまでには、少なくとも10年の開発期間を要するであろう（古川和男博士）。

他方、そこに至るまでの「ツナギ」として、より実現容易な技術もすでに提示されている。トリウムとプルトニウムの混合燃料（棒）を新たに作り、それを現用の発電炉（軽水炉）に装入する。いわゆる「ブルサーマル」方式の「トリウム」版である（豊田正敏・東京電力元原子力本部長）。

オバマ新政権に代わった米国では、すでにこの「トリウム原子力」への製作転換の兆しが見えかかっている。08年10月、上院へ民主・共和党の議員が共同提案として「Thorium Energy Independence and Security Act of 08」＜「トリウム原子力法案」と略称＞を提出、行政当局との折衝に入っている（＜Nuclear News＞誌四月号）。

その折衝の結果か？ 米エネルギー省（DOE）はこれまで進めてきた「GENE PV計画の「断念」を最近明らかにしている（朝日新聞4月21日付朝刊一面トップ）。「GENE PV計画とは、ウラン核燃料サイクルを完結すべく、ブッシュ前政権が推し進めていた要（かなめ）の計画だった。

前出の「トリウム原子力法案」は1954年に制定された現行法「Atomic Energy Act」を大きく改変するものだ。というよりは「ウラン原子力」を対象にした現行法体制に対して、これとは独立的な「Independence」なものとして「トリウム原子力」を対象とする新しい法的枠組みを打ち出すものとみられる。

この法案は今後、五年間の予算として二五〇億円（\$二五〇million）が盛り込まれている。

もともと世界でも数の少ない「トリウム」派ではあるが、何故か、そこには京都の大学の人脈が目立つのである。主流の権威を「何ぞ必ずしも」と疑う、反骨・在野の気風のせいかもしれない。

まず最初に、日本でこの火をともしたのが、京都・京大の出であった故・西堀栄三郎博士だ。彼は最初の南極越冬隊から帰国して間もなく、（旧）日本原子力研究所理事の時期に、この「トリウム原子力構想」を打ち出している。1960年頃だった。《世界最初の原爆被災国・日本こそ、これに取り組むべき。経済性・安全性も高い》と。

彼は京大理学部助教を経て、若くして民間に転出。敗戦後も、原研理事として、ごく短い期間を除けば、生涯、在野の技術者だった。在野の「大御所」であった。最後は京都の「名誉市民」にも選ばれている。

この西堀を継承したのが古川和男（現82歳）。彼は当時原研の主任研究員（後に東海大教授）だった。二人は原研にあって、孤立無援に近かった。

古川は、米国での「熔融塩炉」実験の成果を横目に踏まえながら、これをトリウム系燃料に特化。「発電炉」として理論的にほぼ完成（F U J I 構想）する。（その要約形である論文が佐藤栄作記念国連大学協賛財団の「核拡散防止への実効ある提言」の懸賞募集で最優秀賞を受けている）。

幸いなことに、このような知的命脈は今日の京都にも引き継がれている。実験系の常置講座こそ未整備ではあるが、大学の内外には、「トリウム」に心を寄せる若手の研究者が「トグロ」を巻いて、出番を待っている。

だからこそ、京都の大学で本格的な取り組みをーと望みたいのである。それは、広島・長崎の、核兵器廃絶を待望する市民たちとも手を組んで。

飯沼和正氏の正論は、ミニコミ誌紙に発表されていたために私の眼にとまらず、私の古川支持の執筆に影響を与えなかった。フクシマ後に現れた書物で私が影響を受けたものといえ、その年の末に出版された安富歩氏の『原発危機と東大話法―傍観者の論理・欺瞞の言語』というものである。

私はすでに古川学の信奉者になっていたから、この人がトリウム熔融塩原子炉についてはまったく知らずに執筆していることの欠陥は自明だった。しかし東大内でも群を抜く予算を獲得し、原発ムラの中核を担っていた東大原子力学科出身者の「話法（語法）」への批判は峻烈・的確であって多大に教えられた。古川和男とその支持者たちはトリウム熔融塩炉を取り上げてもらうべく原子力委員会には何度も働きかけ常に拒否されてきたのだが、その委員長近藤駿介の自分を体制の「外部」と規定したフクシマ後の国会での答弁を批判していたからである。私はこれに刺激されて、もっと突っ込んでこの委員会の陰湿な古川拒否を告発した。

そしてそれから六年以上たって、安富書を再読して委員長代理の鈴木達治郎の「原子力委員会は、安全性について責任を負っていない」という発言、また「私は推進派の世界では『反対派の仲間』、反原発派の世界では『温厚な推進派』と呼ばれている」とする「傍観者性」が批判されているのを見て、今日の鈴木氏の理解に資するものを見出した。鈴木氏はフクシマ直後のこの年には「我々の仕事は原子力の推進であって、安全ではない」などとも発言していたとのことである。その後に変化してようやく今日の原発反対論者に成っていると観察される。

「ウラン・プルトニウム」路線と「トリウム」路線は異なった世界観・文明観に属しており、両者に共通するものは何もない。前者は誤った路線、後者に属するワインバーグの言葉で言えば悪魔の、すなわち非人間的な路線であり、後者の天使の、すなわち人間的な路線とは対立する、

地球の表面で膨大な熱が生み出される放射性元素はウランとトリウムである。ウラン同位体のうち 235 を濃縮し三から五%の配合物をつくり、それが通常の原子炉の核燃料として用いられる。またこれを二〇%以上になると核兵器に使用できる。原子爆弾を製造するにあたって重要なのは、連鎖反応をする核分裂反応を引き起こすべく、費用がかかりむずかしい濃縮をウランに施すことである。

核分裂性元素とは、エネルギーの低い中性子の照射により衝撃を与えられると、その原子核がバラバラに割れる元素のことである。トリウムを代表するのは 233 であるが、これには核分裂性は無い。しかし原子炉の炉心で中性子の衝突を受けると、トリウム 233 に変わった後、続いてウラン 233 に変換する。これは、名称は同じだが、天然のウラン 235 とはまったく性質を異にする。

両者の最大の特徴は、天然のウランが燃焼（核爆発）に際して核兵器にきわめて有用なプルトニウムを産生するのに対し、後者がそれをまったく産生しないことである。このためまず米国で後者が葬られ、これを継承発展させ、理論的に完成した古川和男のトリウム熔融塩原子炉も、日本では受け入れられなかった。

二〇〇九年の飯沼和正は「原爆材料を産むウラン系を長男坊だとすれば、それを産まぬトリウム系はあとから遅れてやってきた次男坊であった」としている。また米科学ジャーナリスト、R・マーチンのフクシマ後の著作では言われている、「トリウムはまるで、ウランのあらゆる反応や性質と相補的な特徴、つまり対照的な特徴を備えているようである。

陰と陽、男性と女性である。華々しくて威張り散らす兄のウランとは対照的な――みずからを消費するにあたり、もっと落ち着いてゆっくりとしている妹のようなものかもしれない」と。

※物質系の無秩序の度合いを数量化したもの※と辞書に説明されるエントロピーの学者に槌田敦という人がおり、その1970年代からの原発批判の仕事を私は評価する。『原発安楽死のすすめ』(1992)にしても、またフクシマ後の『原子力に未来はなかった』(2011)にしても教えられるものがあつた。しかしすでに表題に現れているように、原発が現行のウラン・プルトニウム路線のそれでのみ捉えられていて、トリウムがまったく視角から脱落している。またその結果として、原発については何ごとかを語りえてはいても、それと対を成す核兵器廃絶については何も語れずにいる。「死ね!」と言っただけでは死なぬものを、「安楽死」させることができるのは、トリウム熔融塩炉の技術だけである

「トリウムのアインシュタイン」の異名を有するといわれる米ベンチャー企業主の一人、ドーヴェルニユは言う。「トリウムは何らかの目的があつて地上に遣わされた。神とか何とかと呼ぶ超越的な力が天上に存在するとして、もしそれがこの惑星に知的な存在をお創りになったとしたら、地球をお見捨てにならないだろう。私はエネルギーにもとづく何らかを創造した創り主の存在を信じている。そしてトリウムは造物主による究極の創造物だ」。

プルトニウムは「ダイナマイトと青酸カリをひとまとめにしたような爆発物であり毒物である。人類社会に対する危険度の激しさ、広がり、そして時間の長さを考慮すれば、前二者を合わせて一千倍か一万倍したくらいの代物であろう」(飯沼和正)。したがってこれを産生する軽水炉にはもともと未来はなかったのであり、自滅する炉だったのであり、フクシマはそれを証明したのだつた。

原発の導入に際し、予想されるその危険に恐怖し、強い逡巡を表明した東京電力の担当者にまだ若かった豊田正敏氏がいた。宮仕えの身なので仕方なくその仕事に従事、ついには「安全」と信ずるまでに慣れ、全原発技術者の教科書的著作の執筆者にして編集者代表と成り、また東電の原発技術本部長にして副社長の一人と成る。しかしその際にも高速増殖炉「もんじゅ」の継続には異議を唱えていた開明的な人だつた。

原発が産生するプルトニウムは、使った以上のプルトニウムが増殖される魔法のような高速増殖炉で使用されるはずだつた。その不可能性を古川和男はどうに見抜いていて、西欧中世の錬金術に擬して記していた。「水銀を金に変えられますか? 中世の化学者の願いに反してそれは不可能だが、逆に金を水銀に変えるのは簡単なのである。原発の炉心に金を一年間入れておくと、約半分は水銀になってしまうのである。神様はお茶目な方らしい」。

原発ムラの大部分が不安を醸成するものとして反発したのとは反対に、豊田氏はきく耳をもっていて、望んで四歳年下の古川に会って会談している。そしてすでにいくつかの著書によって「原発の父」と呼ばれていたこの人は、古川学を承認・受容し、代表作の『原子力発電の歴史と展望』（2008）の改訂新装版（2010）には「プルサーマルとこれに代わるトリウム発電炉」の章が加筆された。まことに高く評価されるべきことで、私は自著の冒頭の章（24～25頁）でその箇所全文、および同年11月9日の「原子力政策大綱を見直せ」の表題の朝日論壇「私の視点」を引用し掲げさせてもらっている。

フクシマに先立つ二年前のことで、著書での主張は東電内部でもなされたようで、これが採用されていたならば、地震による事故は様変わりしていたのである。すなわち衝撃により炉は停止する、しかし爆発は起こらず、存在しないのだから放射能の飛散も起こりようがなかったのである。事実は、経営陣の容れるところとはならず、氏はフクシマ後憤懣を吐露することになる。外部に現れたその一つには2012年5月28日の週刊現代の「東電の失敗——安全よりコストとメンツを優先させた」の表題のものがある。フクシマ後にリタイヤしていたようでしたようで、「東電元副社長が答える」、「単なる会社批判ではない。会社全体が危機に瀕する今だからこそ、痛切な発言を受け止めてほしい」見出しに有り、「今の経営陣はだめだ」という章から始まることがネットに出ている。私がごく最近になって知り、実物を見たもので、先の自著では記すことはできなかった。しかしその前後して二度にわたって行われたNHKによるインタビュは『原発メルトダウンへの道』（2013）に収められていて、引用・援用させてもらった。そして拙著の2014年の公刊後、2015年3月15日の朝日新聞「私の視点」に同氏の更なる提案、「トリウム炉の採用提案を」を読むことになった。フクシマ以前の著書にすでに使われていた良いことづくめの原子炉」という古川学への高い評価が古川の名を挙げずにここでもまた繰り返されていることに注目しよう。（吉岡律夫はこの数日後のITMSF..017号で、豊田案では再処理が必要であると正しく記している。しかし氏が技術こもんである今日のTTSの案ではこの弱点は克服されている）。

「プルサーマルの代わりにプルトリウムにトリウムを混ぜた混合燃料を軽水炉で燃やす「トリウム軽水炉」を採用するのである。この炉で生成されるのはウラン233で核拡散上も問題がない。燃料をプルサーマルの倍長く燃やせ、経済的にも有利だ。高レベル廃棄物の発生量も飛躍的に少なく、安価な直接処分が可能となる。良いことづくめの原子炉と確信する」。

朝日新聞はわが国の「原発安全神話」に多大に貢献しており、フクシマ後自己批判・自己点検を余儀なくされ、それは同社の「原発メディア」取材班による連載記事の集成である『原発とメディア 3・11責任のありか』（2013、朝日新聞出版）にとって示されている。それによると原発支持から脱原発に者の方針の転換がおこなわれたとのこと

ある。事実「核燃料サイクル政策について」その他いくども社説を掲げているが、遺憾なこと

に、きわめて優れた豊田提案を取りあげずに無視してきた。それで私は2017年に批判と抗議の手紙を書いたが返信は無かった。私としては先の自著の著者、またITMSFおよびTTSのメンバーとして責務をはたすべく書いたものであり、手紙を豊田氏の「私の視点」と合わせてHPにのせるとともに両団体に知らせた。

それから二年して序に述べたようにTTSの「プルトリウム消滅用熔融塩炉の開発」の経産省によって採用されることになったのであって、大きなニュースであるはずのことだが、朝日をふくめてマスコミにまったく報じられていないという現実に直面することになった。そして豊田氏について調べていて、2019年に亡くなっていることを知り、「くやみ」の項に500字制限の「弔文」を記し、画像に氏の顔と並んで「トリウム炉採用提案を」の新聞記事が出ているのだった。クリックしてみると私の手書きの文字があり、私のHPからのものであることが分かった。よく見ると小さいがわがアドレスの記載もあった。

古川書に従い、トリウム熔融塩炉について結論するようになる。

世界を支配してきたウラン軽水炉はその一部が誤っていたのではなく、体系として全面的に誤っていた。それはその発明者であるワインバーグが悔恨をこめて指摘し、ついには憂鬱症に陥ったことから明らかなように、悪魔からの買収物であった。

誤りの第一は、核分裂という物質の変化を扱うプラントであるべきなのに、それまでの発電の通念にしたがって「火力発電所の原理」に基づき、核燃料体（反応物質プラス媒体）が固体で密封していることである。これを液体、米オークリッジ研究所（ワインバーグ所長）の「芸術品」と賞賛される研究成果、熔融塩炉に変えねばならない。それが成されていなかったために、福島では爆発が起こったのだ。

第二は、核燃料として、ウランを排除し、それとは異なつて、プルトリウムその他の放射性物質を産生せず、また資源量において豊富な（したがって安価な）トリウムに代えることである。これを熔融塩炉で用いれば、安全は全面的に保証され、運転がきわめて簡単になる。核兵器に役立つだけのプルトリウムを産生しないことで、核軍縮に貢献し、またその処理に苦しむことがない。ウラン軽水炉の現状は、この産生物の蓄積により、核戦争によって消費するか未来の世代に残すかのいずれかを選ばざるをえなくなっている。トリウム熔融塩原子炉はそれらを消滅することが出来る。TTSはその国際特許を古川和男から継承している。

第三に、運転の難しさと危険性が原因で、ウラン軽水炉は城塞のように大型化され、かつ過疎地域に建設されることになった。トリウム熔融塩炉に代えるならばこれを小型化し、電力使用地に建設し、ステーションによって管理できる。送電距離の短縮（ゼロも可能）により、料金は安くなる。公共性が保証され、国民大衆にとって親しみやすいものとなる。

しかしながらまことに悪魔に教唆されたかのように、安全神話を振りまき、最後には「原発ルネッサンス」を高唱し、全国に建設した原発は五十四基を数えた。その資産価値は総額で五十一兆円に達するという。その大半が稼働できずにいるのであり、労働組合までが再稼働を求めている以上、彼らの救済のためにも、豊田案の実行が望まれる。これにより軽水炉に勤務してきた人々はトリウムに慣れることができ、全面的なトリウム熔融塩炉への移行が可能になる。

また原発を軽水炉のみと見なし反対してきた人々も、トリウムが無害であるだけでなく、プルトニウムを消去することを知り、トリウム熔融塩炉の支持者に転じてくれるだろう。その多くは善意の再生可能エネルギーの支持者であるが、古川は、核分裂によるエネルギー取得は、アインシュタインの発見になる自然な営みである、と説いてきた。すなわち、かつて地上には自然な核分裂が起こっていたことがあり、その跡もアフリカで発見されている。加えてワインバーグの発明になる熔融塩は「核燃料を溶かし込む核反応媒体・反応熱を運び出す熱輸送媒体・反応生成物を処理する化学処理媒体」の三機能のすべてを果たすという。またそれは、地球にほどよい熱をもたらしている地下のマグマと科学的内容が近似しているともいう。すなわちどこから見ても自然の摂理に適った人間的な炉なのである。

早大教授松尾隆は古在由重、宮本顯治と昵懇の日共黨員だった。この党は1950年のコミンフォルム批判に際し分裂したのだったが、ともに統一会派（別名に国際派）と自称した派に属し、宮本は先に復党（対立していた徳田球一の「主流派」）し、第六回全国協議会を用意し、党の統一を実現した。古在氏、松尾隆もこれに従い、その指導下にあった吉田嘉清ら学生運動出身者も同様だった。松尾はその二年後に死去、大隈小講堂で行われた平和葬の名の葬儀では古在・宮本両氏は注目すべき送辞を読んでいる。

それから三十年して松尾の三十回忌があつて、司会は吉田、冒頭の挨拶は古在氏だったが、宮本氏は招かれなかったが、それはその二年前の原水協の分裂の余波のためである。「松尾が存命だったならばどのような立場を取ったろうか」が隠れたテーマとして存在し、それは同時に発行された文集『松尾隆』にも顕われている。そしてさらに十五年たって、東大国際派（統一会派）の『一九会文集』と踵を接するようにし、相互に交流しながら『稲田・一九五〇年・史料と証言』全六冊の発行が始まった。私の「松尾隆」は唯一の連載評論だったがその結びの文言は先に掲げてある。

五回に及んだ連載は文芸評論家の小田切秀雄さんが毎号褒めて葉書をくださっていたものだったが、またこれよりも遅れて2005年に原水協理事長だった草野信男さんを偲ぶ会で会ったとき、この部分を激賞してくれた友人に池山重朗氏（教育大卒）がいた。1764年ソ連の原爆実験再開に端を発し、それへの対応で日本原水虚が分裂した際、原水協を去って原水禁国民会議の発足に尽くし、2007年に亡くなるまでその中心にあった理

論家・活動家だった。彼の賞賛の対象となったのは、太字でしめした「ヒロシマ哲学」云々の箇所であると思われ、そこが彼のヒロシマ・ナガサキと共通していたからだだった。実際私はそれを求めてきたのであり、古川学に到着したのだ。

「原子力の平和利用」の美名の下での日本へのウラン軽水炉輸出の試み、対応する日本側からの積極的受容は、1950年代、原水禁運動の発生ときびすを接するように起こった事象であり、米国は1956年に広島原爆資料館で原子力平和利用展覧会を強行した。その後原発が建設されるようになり、それが平和目的であるということで、被爆者たちを含む日本の原水禁運動は全体としてこれを受け入れた。しかし釈然としなかった人々は少数だったがいたのであり、原爆で隻眼になっていた日本被団協初代会長の森滝市郎氏がその代表格だった。また非被爆者では、ソ連の実験再開を擁護したことで日共を離党し原水禁を擁立した池山重朗だった。そして池山は1979年スリーマイル島事故を契機に核兵器廃絶と原発反対を理論的に結び付け、これに支えられて森滝を理事長とする原水禁はそれを運動方針とした。池山は2007年に亡くなったが、その方針は堅持されていて、フクシマ後原水禁は迅速に福島県で世界大会を開催しえた。対するに原発を容認していた吉田らが離脱後の原水協はあわてて反原発を掲げることから始めなければならなかった。

しかしながらフクシマ後に再刊された池山著『原爆・原発―核絶対否定の理論と運動』を見ると、もともと優れた理論家・活動家だった池山にしてなお良い核の存在に気付かなかったこと、古川トリウム熔融塩炉についての認識が皆無であったことを知る。それは副題にすでに現れていた。彼にしてそうであり、他の類似の論者については言うまでもない。

対するに古川和男はどうであったかといえば、原水禁・核廃絶の運動の外側で生きながら、古川書の最終の第十章は「核兵器完全廃絶への道」と題されている。そこでは己の科学技術上の研究が「世界に冠たる平和憲法を持つ日本人の責務」の遂行である、と宣言されている。池山や私たちの運動とは切れていたのは、無関心のためではなく、疑いもなく専門領域で多忙だったためであり、また原水禁運動の側の者たちが、ウラン軽水炉以外に原発は存在しないと思いついていたためなのである。

核兵器廃絶がかならずしも原発反対ではなく、原発反対が必ずしも核兵器廃絶を目指していない、という状況がフクシマ以前の日本には存在していた。風力と太陽光だけでやってゆけると考えるひとは決して多くはなく、人々は現行のウラン軽水炉が危険であり、かつ原発派それ以外に無いこんでいるので反原発なのである。

核兵器は使用されてはならず廃絶されねばならない。またそのためにはプルトニウムを産生するウラン原発は廃絶されねばならない。しかしそれに代わって太陽光と水力で十分かといえ、そうではない。食料を輸入に頼っている国であり、平地は農地として使用されるのが望ましく、自然災害の防止のためにも森林は維持されなければならない。プルトニウムを産生しない核エネルギー炉が核兵器の廃絶と安全なエネルギーを提供するのであ

る。これが陽の目をみなかったのは、米国で――ソ連においても同様だったが――冷戦派が核弾頭用にプルトニウムを必要としたからである。

安全で経済的なトリウム原発は、プルトニウムの消滅によって、核兵器の廃絶と一体化する。すなわち双方は同一の問題の表と裏の関係にある。またそれは現行の平和憲法を擁護し、これを改変しようとする勢力と対決する。古川のFUIはそのような人類救済の炉なのである。

すでに述べてきたように、豊田正敏氏はまだフクシマ以前の二〇一〇年「良いことづくめのトリウム発電炉」を提案、フクシマ後の2013年のNHK取材班『原発発メルトダウンへの道』では、2018年7月の日米原力協定の改訂を見据え、米側からのプルトニウム蓄積批判に備え「先手をとってトリウム発電の併用に日本は踏み切るべきです」と提案していた。その四年後に日本は高速増殖炉「もんじゅ」を停止せざるをえなくなり、プルトニウムは使用の当てはまったく無くなった。それはその後にも増大し、分離ずみのものだけで七四トン、廃物の状態で一〇〇トンに達すると言われている。六ヶ所村の再処理工場が動かず、使用目的が不明のまま、再稼働された軽水炉から毎日さらに追加されている。こうして6月9日の日本経済新聞は米政府から厳しい問い合わせがあったことを報ずることになった。「先手をとって」という豊田氏の提案は顧みられることなく、「心配」は今後も続くのである。

伝えられるところによると、日本政府は「上限をもうけて」米側の要求に応ずるのだそうである。何のための「上限」なのだろう。「日本の核武装のためである」とは口が裂けても言えぬ以上、どのように説明するのだろう。たとえ核兵器に利用しなくとも、盗難にあり、粉末化され精神錯乱者によって東京都心に散布されれば、大参事が起こるのである。逆にトリウム熔融塩炉で燃やすならば簡単に消滅する。

ともあれプルトニウム削減の実は示さざるをえず、それは述べたようにTTSが所有する古川和男と三田地紘史発明の特許「液体核燃料を用いたプルトニウム消滅核反応炉」(2002)に頼る以外にない。事態の展開が注目される。「プルトニウムを消滅させるにはトリウム系燃料炉、それも熔融塩炉に入れるがよい。容れる他にないだろう。既存おウラン利用炉で燃やしたのでは、炉内でウラン²³⁸から再び燃やした半分のプルトニウムが作られる。ただしトリウム炉でも固体燃料炉であれば、一回の燃焼で入れたプルトニウムの半分くらいしか燃やせない上に、ウラン²³²の高放射能のために、ほとんど後の化学処理・燃料体加工ができない。その点トリウム熔融塩炉であれば、溶かし込まれたプルトニウムは着実に燃焼消滅できる」(『原発』革命(2001)) 『原発安全革命』(2011)

ウラン軽水炉の頑迷な擁護者たちはよく知っているのだが、一度その体内にトリウム熔融塩炉を取り込むならば、それが「良いことづくめ」のものであるために、ウラン・プルトニウム路線は崩壊し、トリウム熔融塩炉路線がとって代わるのである。これは必然の成

り行きである。私はそれがまさに始まるうとしていると見る。日本社会の隅々にまで及ぶ巨大な変化が起ころうとしている。原発ムラ体制には亀裂が生じ、それは崩壊に向かいつつある。

2018年9月30日文科科学省は、プルトニウムにつき、全量を資源として活用する前提を見直し、廃棄を選択肢に加える方針異転換する決定を余儀なくされた。好んでのことではなく、米側の圧力に屈しての仕方なしの態度表明である。その証拠に米側に依頼しようとしても、膝もと日本のTTSには見向きもしなかった。それが改善されたのであり、トリウム熔融塩炉による革命は近いのである。

古川和男氏の事業は、生前に立ち上げていたITMSFとTTSによって継承発展せしめられており、私は前者の会員、後者の株主である。その中心にある人々からは多大に教えられてきた。

吉岡律夫理博は、東芝で福島原発の数基の設計に係わった人で、早くからその欠陥に気づき古川門下に入った人である。事故に責任ありと感じているようで、フクシマ関連の東芝幹部の訴訟では、告訴側の証人になって出廷している。この人からはワインバーグについて多大に教えられた。その著、『最初の核時代』の白眉は1991年の広島・長崎行の所産である「ヒロシマの聖化」の章である。オークリッジ研究所にあって原爆製造にかかわったこの人は、ユダヤ、キリスト、イスラムの、いずれも共通の唯一絶対神の宗教にそれぞれに有る絶対的禁忌のいずれに照らしても、許されざる悪として原爆を把握した。

そして平和公園の梵鐘の音色に深く心動かされたのであって、その制作者を特定し、大きな重量ともに三倍の同じ鐘を発注した。元軍人らによる反対意見があり、しばらく同市の庁舎の中に留め置かれたが、やがて外に出され、《International Friendship》の名で市の公園に据えられた。その広義と狭義のそれぞれの意味についてはすでに先著で記した。

その「良いこと尽くめ」の値打ちが国際的にも明らかにあって2017年10月IAEA（国際原子力機関）はパリでトリウム熔融塩炉に特定した国際会議を行った。米国を始めとし世界では、高名なビル・ゲーツの会社をはじめとし、その実現を目指すベンチャー企業が二十社以上も輩出している。各国政府もまた公的資金を提供している。もっとも進んでいる中国では試験炉が建設されており、2020年には臨界に達し、2030年には世界初の商業炉として稼働する。

これらの国際的動向に刺激されて、ITMSFは2017年9月プルトニウム原発の被災都市長崎でフォーラムを行った。古川トリウム熔融塩炉FUIが目指すのが核兵器の廃絶と安全な核エネルギー炉の提供であり、それはプルトニウムの排除と消滅に帰着する。その主張を、場所を長崎に選んで全国に発信せんがためだった。

冒頭木下幹康理事長が古川和男初理事長の業績を紹介したのは当然として、続いてその著書が被爆者によって靈感を与えられ、かつまたその究極的願いに沿って執筆されてい

ることを明らかにしたものと、拙著をスライドで紹介してくれた。その裏表紙には木下氏撮影になるオークリッジ公園の日本の鐘が印刷され、帯には、結果として我々を結びつけた人である吉田嘉清氏の、古川家とあなたの縁にも触れた推薦の辞が記された本である。

長崎は冒頭に述べたように第二回の原水禁止世界大会が行われ、会期の最終日に日本被団協の結成宣言が出されたところである。あなたは登壇し、被爆者女性として何ごとかを話している。新聞社撮影のその大型の写真があり、私はあなたの葬儀では、会場の入り口に最初の一枚として置いた。

ナホトカ発モスクワまでだけで9300キロ、停車する途中の主要駅では「ミール・イ・ドルージバ（平和と友好）」の歓呼で迎えられ、ホームで集会を重ね、あなたは毎度挨拶にたつのを余儀なくされた、長大な列車による旅があった。ハンガリーで軌道の幅が狭まり、列車が乗り換えられ、ウィーンに至る。往路と復路に観光したモスクワやキエフについては言わなかったが、ウィーンについて、結婚当初のことだったが、「あまり齢をとらないうちにもう一度連れて行ってね」とあなたは言っていた。しかしその願いは叶わなかった。原因は長子が疾患をもって生まれたことと、それに続いて1984年から始まり、2016年まで続き、死によって終わった週に三日の人工透析にあった。この最後の三十年間であなたが首都圏より遠くに出向いたのは、大分県の二回と、北海道十勝のわが家の一回きりで、すべて行き先で透析をうけながらの法要と葬儀のためだった。ウィーンはフィルハーモニーの来日公演で済まされた。それと美術館と能楽堂だったね。もっともそれまたまだ歩けるうちのことだった。

あなたと出会い結婚しなくても私は樺太について、ということとはチェーホフについてということになるのだが、書かざるをえずまた書いただろう。また大学は露文科などに進み、ドストエフスキー学者にしてマルクス主義者だった松尾隆教授という人に師事したのだったから、ドストエフスキーについて、マルクス主義の立場から書くことになったろう。現にあり、またあったし、残り少ない今後も起こるようね。もっともそれらさえもあなたの良人であり、ひとりの遺児をふくむ子たちの父親として書いており書かざるをえなかった。しかしあなた無しには絶対には有りえなかったものとして、古川氏関連の本がある。あなたが在って、古川和男という稀有の人との出会いが生じたのであり、遅れてフクシマ後になってからだだったが、その人に係わって書くことになった。もともとの専門からはかなり離れた領域に踏み込むことになった。

トリウム熔融塩炉――それがその名称だが、それをもしも知らなかったならば、私がどうなっていたか、どういう状態のなっていたか、と思うと慄然とする。私はありふれた反原発論者に留まっていたはずなのである。

述べて来たように、古川学は出発点が米国だった研究である。しかし熔融塩という媒体の発明に留まって、弾圧により中止せしめられ先に進めなかった。先の本で記したように、

研究は日本人古川和男によって引き継がれ、理論的には1985年にF U J Iとして完成した。しかしその実現を目指して設立されたT T SはR in Rの海外での試験を行っていたが、資金難で苦しんできた。

吉岡律夫と木下幹康は国際的なトリウム熔融塩炉の教科書(《Molten Salt Reactors and Thorium Energy》米出版社、2017)の中心的執筆者であり、日本は理論的には世界の先頭に位置しているのであるが、日本国内での実現は阻まれていた。

世界の先頭を早いスピードで走っているのが、国家企業である中国上海の応用物理研究所(S I N A P)であり、その炉型の基礎は日本のF U J Iのものである。そもそも日本ではいまだに邦訳が出ていないワインバーグの名著『最初の核時代』の中国訳は1996年に出ているのだが、日本では出版社が見当たらないとのことである。国家による取り組みの差は歴然としていて、その歩みは遅々たるものだった。

その総リーダーの徐洪傑氏をI T M S Fは二度セミナーに招いているが、2016年の講演では、トリウム熔融塩炉が容れられていない日本の状態を「気の毒だ」と評していた。F U J Iの祖国でありながら、その祖国からは排除されていたからである。日本は2018年6月のトリウム熔融塩炉促進総会にも氏を招いており、私は聴講したが、事業の順調な進捗状況を語っており、他の諸国の講演者との相違には甚だしいものがあつた。中国の場合は、核エネルギー炉に取り掛かるのが遅れたために、またウランを産せず輸入に頼らなければならなかったために、ウラン軽水炉ではなく、トリウム熔融塩を選択し、日本を追い越してはるかに先に進み出たと見える。

日本は既存のウラン軽水炉の再稼働に執着し、その勢力の一部は、廃棄物の処理に役立つので熔融塩炉の採用に傾いている。それはトリウムにとっては最良の媒体ではあるが、ウランをも使用できるからである。しかし日本の核武装に備えて(と言う以外にないだろう)定量のプルトニウムを確保したいために、トリウムには背を向けてきた。すなわちトリウム熔融塩炉の全体は受け入れがたいのである。しかし追い迫り改善されてゆくだろう。ワインバーグと古川の理想は中国において実現された。この影響はすでに顕われており、疑いもなく今後増大し続ける。また日米原子力協定の終焉にともない米側からのプルトニウム削減の圧力は強化されるだろう。既存の「核燃料サイクル」は日本を窒息死させるものだった。これは崩壊に向かっており、前途は楽観される。

その旧姓で呼ぶならば辛島和子であつたひとよ、わが妻になり、二人の子の母親になつたひとよ。古川和男さんに宛てた年賀状で「あなたは日本と世界にとって大切な方です。どうか名が生きなさつて初志を実現してください」とあなたは書き送っていた。

対するに古川さんは敗戦時には熊本の五高に在籍していて、勤労動員と栄養不足で病院に収容され、空襲警報のサイレンが鳴っても自力では防空後に避難できずにベッドに伏せていたと記している。当時南九州一帯では、米軍の日本本土後略は宮崎県の日向海岸への上陸から始まると噂されていて、その際の死は覚悟されていた。徹底抗戦、一億玉砕の日

本政府が無条件降伏を決断したのは、原爆が投下されたからであって、そのことを氏は「あなたたち被爆者の犠牲によって」云々とあなたに書き送っている。かくて戦後、原発研究を志しながらウラン（広島）とプルトニウム（長崎）は排除し、トリウムを選んだ。すでにガンに冒されていた没年の講演では、それによって「地球と人類を救いましょう」と切実に訴えていた。その声が耳を離れない。古川学は「優れたものは、すべて稀であるとともに困難なのである」という、あなたの兄正道さんもまた書き留めていたスピノザの言葉を想起させるものがある。

あなたの葬儀場には、受付の隣にはすでに述べた四枚の拡大写真を置いた。最初は1956年八月、長崎での第二回原水禁世界大会の壇上、大会スローガンを背景に話す新聞社撮影のものである。

葬儀場に飾った続く三枚はいずれも1959年の旅のもので、最初はオペラハウスの傍で中国の越劇の女優と中国女性の日本語通訳に挟まれてのものである。中国が力をいれ、材料一式を貨車で運び込んだと伝えられ、それによる料理が振る舞われた中国主催の日中交流会が終わってからのものである。次が帰路のキエフで公園のベンチでウクライナ女性に挟まれてのものだ。そして最後はナホトカの埠頭近くの広場、近くで遊んでいた子供たちの群れにひとり囲まれてのものだ。これら四枚に、遺影として遺骨の上に飾られた十数年前の鎌倉での写真を加え、計五枚にそれぞれに説明を加え、拙HPで見られるようにした。表題は「わが女主人公逝く」とした。古川和男さんがあなたについてテレビ局の座談の席で「大変な美人でした」と言い、それを本の中で記したので、写真が見たいという要望があったからである。

あの団にロシア語通訳のひとりとして加わっていて、つまり何度もあなたの通訳を務めた外語大出身の人がいる。翌年モスクワ大に留学、帰国後大学教授となり、ロシア語文法の大著を著して退職。縁があつてあの時以来の再会を果たし、親しく話す機会をもった。HPでそれらの写真を見て「どれもが素晴らしい。穏やかな綺麗なお顔。日本の女性のよさがにじみ出ております」とメールしてきてくれた。その人にとっても往復で一カ月弱だったあの外国の旅は、汲めども尽きせぬ懐かしいものだったようである。

あなたに会ったひとは誰もが最初はあなたを被ばく者だとは思わなかった。顔には傷が残らなかったからである。しかし手足の火傷は相当なもので、最初の子は悩ましげに「ママの手は、どうしてこんなにキタナイの？」と問うたものだった。そしてその子が亡くなった時、あなたは日記に「あなたを丈夫に生めなかったママをゆるしてね」と記した。その後生涯日記を記すことはなかった。

ここに古川和男さんの短い文章が有る。「生涯を貫く志を! (地球救済の道)」という表題のもので、文教図書出版というところから1999年、つまり氏か拙宅に見えた年に出了た『青少年に贈る言葉 わが人生論』という本に掲載されたものである。

「旧制高校二年十八歳の時が敗戦でした。祖父の兄たちは幕末水戸藩の志士で、一人は東禅寺で憂国の遺書を懷に自刃しました。私も「忠良な臣民」として夢中で爆撃機を作っていました。敗戦一月前に過労栄養失調からの重病で動けぬ中の銃爆撃から、九死に一生を得ました。それを生かして段々と「死んだと思えば怖くない。筋を通した生涯を!」と思うことに成りました。科学者としては全く当たり前のことでしたが、未だに社会に科学が根付かず右顧左弁をこそ奨めかねない日本では、必須な考えだったのです。

敗戦後日本は復興に真剣に立ち向かいましたが、中ばの一九七〇年頃から徐々に不真面目になったようです。今は最低、教育そして社会は崩壊。本当に若い皆さんに申し訳ないと思います。しかしこのようなことは世の常、と歴史が教えています。皆さん元氣を出し歴史を勉強しつつ心ある志を立て、自ら救ってください。私の場合、生涯をかけた課題は、「液体」と「核エネルギーシステム(原発)」です。みなさんのどなたかに後を託すことが出来たら、どんなに嬉しいことでしょう」

『トリウム原子炉革命』の刊行前、関連書とともに、吉田嘉清氏にはこれをも読んでもらい、本の帯に推薦の言葉を書いてもらい、それは新聞広告にも出た。

ところが、予想しなかったことではないのだが、これを吉田の原発一般の容認と誤認した人々がいたのであって、氏に対して反対と抗議の電話が相継ぎ、私に対し「取り消し」を告げる悲鳴にも似た電話があった。ところが数日後、朝日新聞東京版一面に大阪本社の論説委員加戸氏による山脇道夫東大名誉教授のトリウム熔融塩炉支持のインタビュー記事が出たのである。これを見て安堵し、「取り消し」の「取り消し」の電話があった。私もまたほっとした次第だった。

この吉田氏であるが、翌2015年に米寿のお祝い日本青年館で行われた。私は実行委員ではなかったが、案内名簿に遺漏がないかどうかをチェックできる立場にはいて、数人の遺漏者に追加の案内をだしてもらった。その一人――夫妻に宛てたものだったので二人ということになるが――日本原水協初代理事長安井郁氏の息女侑子さんの名があった。私がモスクワ大に留学を予定して出国し、それを果たさずに帰国し、あなたと結婚することになったあの1959年にモスクワ大への留学を果たし、ロシア文学者となったひとである。イタリアからの留学生と結婚、東京に住んでいたのだが、子供を引き取ってもらって離婚、イタリア人は帰国。数年後に七歳年少のロシア語・文学教授のY氏と再婚。自

身も大学に職を得、ロシア文学者として一時は非常ネルギツシュに活躍した。吉田嘉清氏とは家も近く久しく家人同様の関係にあったので、勤務の関係で関西に住むようになってからも、氏にはときおり電話をしてきて、その都度それをなぜか私には知らせてくるので、お会いしていいいにもかかわらず、私はその動静を知っていた。ある時期から躁と鬱を繰り返す精神状態で、外出も一人ではできなくなっている様子だった。同じことは他の友人からも聞いており、すでに十年近くも躁と鬱を繰り返す精神状態にあるらしいのである。一方ご主人のY氏は評判の良い人で、だれもが「奥さんに」よく尽くしている」と語っていた。そのY氏には会う機会があったので、「奥さんのお具合はいかがですか」と尋ねると、悩まし気に首を振っていた。ともあれ面識はあったので、偲ぶ会の案内は出しておいたほうが良いと思われたのである。夫妻は見え、後にY氏から書状を戴いた。

それから三年して2018年には吉田が亡くなった。「輝く全学委員長」と言われてきた人である。全学連の初代委員長の呼び声があった。「しかしそれでは全国の学生が納得しない。委員長は東大であるべきだった。しかし西北大には西北大の意地がある。ぼくは、吉田は早稲田に残したのだよ。東大の諸君には、ナンバーワンは全学連に来ていない、と思わせることにした」と私に松尾隆は語っていた。発足期より長年月にわたって原水協一筋に勤務し、最後には代表委員になって、「原水禁運動の顔」と評されてきた人の死だった。「松尾の最愛の学生」と友人たちから評せられ、演説の仕方まで一対一で松尾に教えられたという。総評の事務局長だった高野実に乞われて、「雄弁術」というパンフレットまで口授した松尾が、弁舌の手下としたのはシェイクスピアの戯曲『ジュリアス・シーザー』のなかの有名なアントニウスの演説だった。その要諦は、演説は聴衆を行動に立ち上げさせるアジャクションでなければならない、ということだった。

ビキニ被ばくを契機とし、国民運動として成立し、1962年の八、九回大会頃に絶頂に達した原水禁の運動だった。しかし時は流れその当時はまだ子供だった世代の人々の歴史研究の対象となり、そのグループから吉田がインタビューを受けることが重なり、当時を知る後輩たちが吉田から同席を求められることになり、私もその一人に加えられていた。多くの人々が参加した杉並の運動で中心になったのは、

公民館館長だった安井郁・田鶴子夫妻である。郁氏は1980年に亡くなっていて、1983年には追悼文集『道 安井郁―生の軌跡』(367頁)が製作刊行されていて、夫人による後書きによると、「吉田嘉清さんの言葉にうながされて」発意した模様だった。私は夫人から贈られたのはそれから三年して平和事務所が発足してからである。その夫人もまた亡くなっていた。

戦前東京帝大法学部国際法の教授の職にあり、大東亜戦争を支持する言行のため、最終的には文部省、ということはマッカーサー司令部の指示により、東大を辞職、一時は自宅に弁護士看板を出していたと聞く。法政大に職を得て、やがて第五福竜丸の「事件」に遭遇、署名運動のまとめ役から日本原水協の初代の理事長となった。「公職不適任」教授

からわずか数年を経ただけで人類初の平和運動の旗手となったのであり、往時を知るひとびとは疑惑をもって見た。なにしろ東大構内を国民服を着て歩いていたというのである。しかしその人がやがてレーニン平和賞の栄誉に輝き、フルシチョフや毛沢東と対等に会談するようになったのであり、違和感を抱いた人々はいた。

吉田嘉清はどうだったかといえば、そうした一切を知りつつ、安井夫妻を敬愛していた。

2007年丸浜江里子、藤原修ら次世代の研究者たちによって二度にわたり吉田に話を聞く会がもたれ、山村茂雄、武藤一羊、私が同席したのだったが、三人ともそれぞれを知りつつ、あえて口にはしなかった。しかし吉田はかなりのことを話している。しかし長崎での第二回大会に安川理事長に従って行き、長崎駅に降りたとき、迎えた記者団を前にして「安井郁、ただいま到着いたしました」と言った、という話が披露されたとき、その情景がほうふつと思ひ浮かべることができたにもかかわらず、おもわず私は「ほんとうですか」と確かめたものだった。吉田自身がそのときの驚きを反芻しているような節があったためでもあるが、私としては念を押さざるをえなかったのである。安井さんには普通の日本のインテリとは違った、どこか日本人離れしたようなものがあつたのであり、しかし高揚期の初期原水禁運動では有益だった。「余人をもつては代えがたかった」というのが彼の見解だった。

「当時の世界大会で」と吉田嘉清は文集『道』（1983）のなかの「原水禁運動の倫理と論理」において記している。

「当時の世界大会で、安井先生に与えられた時間は、だいたい二〇分です。先生の演説は、約一万人の参加者から非常に注目されていたのです。その二〇分間の演説に全力投球されるわけです。しかも先生は他人の書かれた原稿というものをお読みになるということになさらないで、自分で書かれ、それを討議にかけ、さらに推敲されたものでおやりになります。そこで、あるジャーナリストなどは、「一年を一〇日で暮らすよい男というのが、安井先生は一年を二〇分で暮らすよい男じゃないか」と言うわけです。全国、全世界から集まってくる人々がその二〇分の演説にやっぱり打たれるんです。これはやはり全力投球の一つの現れでありました。」

ついでながら2007年の集まりで吉田は初期原水協の運動について「日本人が人類の名で、マンカインドの名でおのれを語ったという経験は、かつて無いことなんです」と語っているが、それに先立って1999年の「松尾隆」連載で結論として私が記したものであった。ただし氏はこれに「神武以来、開闢以来です」と付け加えている。

こうした吉田の証言に多大に依拠し支えられて、丸浜江里子氏によって『原水禁署名運動の誕生 東京・杉並の住民パワーと水爆』（2011）が著されたのであり、私は吉田氏に指示されて『労働運動』に長文の書評でもあり新刊紹介でもある文章を書いたのであるが、私以外の同席者の一人である武藤一羊氏の書評新聞の書評が注目された。安井氏の功績にたいする評価を骨子とした著書を「画期的」として賞賛しているにもかかわらず、あたかもそれと表裏するかのよう、当の安井郁氏について釈然としないものを持っていた

ことを、括弧して「(しかしながら疑問はこれによっていっそう強まった)」と述べているのである。知らない人には何のことなのか不明の記述であろうが、私などにはピンとくる記述であり、「さすがに武藤氏だ」と思ったものである。

原水禁運動には起伏があり、発足に次ぐ第二の転機は、1968年に一市民の新聞への投書が契機となって起こった第五福竜丸の保存運動であり、美濃部都政による都立第五福竜丸展示館の建設であった。これにも積極的に働いた吉田は『武藤宏一さんが問うた“生”』のなかで、「生きる」とは歴史の歯車を前方にまわすことだと私の恩師松尾隆氏は口癖のようにいっていました」と記している。

第三の転機は、1978年の国連軍縮特別総会に合わせて行われた日本原水禁運動の人から成る大代表団の米大陸を横断してワシントンに至る大行進であった。これは企画から実行に至るまで吉田が深くかわわり、行進では先頭に立ったものだった。その著書の代表的なものの書名が『戦後わが行動』であるが、行動をもっとも重視した戦後の松尾隆のもっとも期待された弟子に相応しいことだった。

そして第四のそれはこの吉田が日本共産党によって同党とともに原水協から追われ、平和事務所が発足した1985年である。その後には吉田の支持者だった古在由重氏が亡くなり、同じく医学者の草野信男さんが亡くなり、吉田らを排除した宮本顯治氏も亡くなって、時代が変わり、吉田も米寿を迎え、その祝いの集まり神宮の日本青年館でもたれた。

それから二年して氏が亡くなった。その少し前に「ベトナムに平和を」市民連合を立ち上げたと言われる数学者の福富節男氏が亡くなって、この人が樺太出身の方で、私が連想されたであろう、そのことを述べつつ、「樺太には日本人はどれだけ住んでいたのだい？」と問われ、「四十万です」と答えると、「そんなに」と言った。それが自宅から外部にした最後のだったようである。四日後に亡くなったという知らせを受けた。

1948年ソ連で最初の核実験が成功裡に行われたとき、二発の原発を使い切って、その後に製造していなかった米国に原爆は無く、大統領のトルーマンが狼狽したこと、初代原子力委員長のリエンソールは伝えている。急ぎよ製造に取り掛かり、かくて書く冷戦がはじまったわけである。私は、しかし、このときに始まったソ連の核武装こそが1991年のソ連の終焉の結果したのであると考えている。ソ連社会は非常に行き詰まっていた。長くソ連貿易に従事し、その国に接して暮らしてきて、それが分かったので1984年に樺太について本を書いた。しかし1986年にチェルノブイリで原発事故が起こらなかったならば、国の崩壊はもう少し先になったであろう。事故の後、ミツバチが巣を出なくなったというニュースは瞬く間に全ソ連に広まり、国民が、クレムリンが言ってきたことを信じなくなって崩壊が起こったのである。

チェルノブイリが「にがい蓬(よもぎ)」を意味することが、ヨハネ黙示録を想起させた。「天より大きな星が落ち、たいまつのように燃え、河の三分の一と水の源に落ちた。この

日の名は苦よもぎと言い、水が苦くなったので多くの人が死んだ」(第8章)。この偶然の一致が、聖書の予言と信じられた。

ソ連の崩壊を予見していた私が、まさにこの時期にロシア革命への基地を切り開くべく執筆された1912年のペレヴェルゼフのマルクス主義的『ドストエフスキーの創造』を「発見」、翻訳刊行した。ただしそれは革命後の、後にペレヴェルゼフが葬られる原因となった1921年の論文「ドストエフスキーと革命」を加えたものだった。

「革命のうちにはなにやら悪魔的に狡猾なもの、悪霊的に悪賢いものがあるのだ。革命の恐怖は、その道德否定、流血性、残虐性にあるのではない。それがもたらす金塊が悪魔の財宝であって、それを獲得するためにこそ残虐の限りをつくしたにもかかわらず、やがてそれが形骸化することのうちにあるのだ。ドストエフスキーの人物たちはこの革命的誘惑をよく知っていた。彼らはときとして全力をつくして革命の深淵に身を投じようという抑えがたい誘惑に捉えられ、我意、すなわち何ものによっても制御されない自由の歓喜にひたろうとする。しかしながらまさにこの深淵から、恍惚ならしめる幻影をまき散らしつつ、何物によっても制御されない暴虐が出迎えに立ち現れるのである」。「わが革命はプロレタリアートのエネルギーによって遂行されており、それはドストエフスキーの理解を超えている。ドストエフスキーの作品が書かれた当時、プロレタリアートはまだ形成されておらず、それはまだ現われていない勢力だった」(322頁)

スターリン時代ドストエフスキーの『悪霊』は出版を禁じられていたが、それはペレヴェルゼフが禁圧されたのと表裏一体をなしている。それが解除されたのはゴルバチョフが登場してからなのである。

こうした中であってソ連の科学アカデミーは1983年、古川和男に世界で最初の関心を示し、共同研究の提案を行っている。チエルノブイリ事故後その処理を命じられ、一応の仕事が終わった後に自殺した人物がいるが、古川によると面識のあったソ連内のトリウム熔融塩炉支持者だったようである。1997年にはロシアで日米露の共同開発に合意、ロシア国内にminFUIの敷地まで内定、米露の核軍縮に尽くした。すべては核兵器の完全廃絶への道をつけるためのものであり、自身「蠅螂(とうろう)の斧」と称しているが、日本で他に一体どこのだれがこのような無償の努力をなしただろう。外務省などは何もなかったに等しい。

「我々が「命」の次に求めているのは「自由」だろう。我々は本心「気ままに生きたい」のである。自由は底知れぬ深遠な命題である。孔子の「心の欲するところに従って矩(のり)を踰(こ)えず」という境地や、老子の「無為自然」には、深遠な自由がある。しかし現世の我々は、人里離れて暮らす船員などにはとてもなれないし、そんな仙人になれなくとも、文明を謳歌満喫しつつ自由に振る舞いたいのである。その人たちの「平和」と「自由」を保証するのは「エネルギー」である。食物もあらゆる意味での環境も、そして労働に係わるみ

な「エネルギー」に依存する。「贅沢な仙人(?)」の存在も許すような「地球」を我々は望んでいるのではなからうか」(232〜3頁)。

1922年招待によりアインシュタインは来日している。大正デモクラシーのおだやかな時代のことと、どこでも歓迎され、日本に非常な好感をいだいて帰国した。後の日本人と比較すると別の国民のようなのである。日本人はこの後別人になる、関東大震災、昭和不況をへて大きく変わった。その転機となったのは、1931年の満州事変勃発であることにはだれも異存はないだろう。軍国主義勢力の台頭により、中国侵略に進み、ついに「大東亜太平洋戦争」に至り、広島・長崎の原爆被災で終息した。広島の平和公園の碑文には「安らかに眠りください 過ちはくり返しません」とあるが、そこには諸々と従った戦争協力への反省がこめられていた。

2011・3・11フクシマが、1950年代に国策として始められた原発政策の破綻であることは明らかであり、これを満州事変に始まり大日本帝国の崩壊で終わった十二年戦争の誤謬の繰り返しと見る論が起ったのはうなずける。明治維新以降の富国強兵政策に、さらに遡って廃仏毀釈にまで言及する人がいるが、参考になる。

そして顧みられなくてはならないのは、過ぐる十二年戦争の時期に、その遂行勢力に抵抗し、殺されたり、刑務所に拘留された人々と勢力が有りまた居たように、反対し抵抗しただけではなく、それに代わる案を提示して来た存在があったことである。

古川和男のトリウム熔融塩炉F.U.J.がそれであるが、その際科学技術者ではない私は、その文明論的意義の把握において、キリストを念頭において執筆されたドストエフスキーの『カラマゾフの兄弟』の序文にある奇人の定義から出発した。時代に先んじて出現したために疎外されたが、時節の到来とともに次に時代に於いて認められる運命にあるとしたのだった。しかしこれは私が普通の意味でのキリスト教徒だからではなかった。キリスト教をマルクス主義的に把握していたからなのである。

詳しくは『ドストエフスキーとは何か』のなかの「6章 唯一絶対神はどうして発生したかーマルクスの黙示録解説」(185〜210頁)に見ていただきたいが、再説するところである。

新訳聖書のヨハネ黙示録のユダヤの秘密の表記法ゲマトリアによる「666」は、十九世紀にドイツでキリスト教徒の弾圧者皇帝ネロを指すと解説されていた。しかしマルクスはその肖像を刻印したローマ貨幣と解説し、「竜」および「獣」と記されているものをそれぞれ「商品」と「貨幣」と解説し、それを基礎に『ヨハネ黙示録』の全編を解説、それを基礎に『資本論』を執筆しているである。彼によるコンミュン(共産)主義は、ユダヤ・キリスト教の伝統に立ちつつそれを科学的に再構成したものである。私はその立場から古川学に接近したのだった。すでに明らかにしており、それに譲りたい。簡略する

と、マルクス主義はキリスト教を新しい時代に適用したものであり。その立場で私は古川学に接近したのだった。

もつともそこに至る道は多様であり、仏教から近づく道もまた存在する。

そもそもわが国の核エネルギー利用路線の中核にあったものに高速増殖炉があり、「もんじゅ」と称してきた。文殊菩薩の略称で、仏の知恵（般若）を象徴する菩薩であり、真言密教で重視されてきたのだから、同派の仏教者には気がかりな名称だった。とはいえ真言密教は他の諸宗派に比べてアインシュタインの思想と多くの共通点をもつものであり、物理学者広瀬立成によって『空海とアインシュタイン』（2006）といった著書が書かれているほどである。しかしその書においても原子力発電は一括否定され（182〜3頁）、「原発抜き温暖化防止」が提案されている。トリウム熔融塩炉についてはまったく無知なのだ。

高野山に在り、住職にして同地の大学講師、弘法大師を崇拜し著書を有し、しかしフクシマ後に古川和男の著書に接し、TTSの株主ともなった人に近藤堯寛氏がいる。それ以前から抱いていた構想がこれによって具体化され、2014年に『般若心経入門』を出されたが、そこでは古川学が紹介され、それが『心経』の実践であることが強調されている。すなわちこの宗派による既往の原発路線の批判であるが、その路線を力づくで敷いた元首相があることか同派の信者代表であった。それでその人物の批判は弟子筋の前田勇一氏により戯曲スタイルの小説『善魔の怒り』（2017）に委ねられることになった。大師は怒って甦「元」だけではなく、「現首相」をも高野山に呼びつけ、これもまた大師の呼びかけに応じて甦った織田信長、坂本龍馬などが助勢し、二人の罪深い政治家は改悛してトリウム熔融塩炉を採用し、世界はこれに感謝し歓迎するという虚構の物語が生まれた。もちろん大師が去ると同時に、現実の日本が出現して、作中にも実名で登場する近藤氏の『心経』訳が朗唱される。

興味深くまた有益な態度表明であるが、『般若心経』そのものの把握ということでは、はるかに以前に出た林田茂雄『般若心経の再発見』のほうが普遍的かつ明快であると思われる。すなわちこの非転向の共産主義者は、『般若心経』の全体がヘーゲルの弁証法と一致し、相違は「中国語の発達不足」によって「空」がよく説明されていないことに在るとした。

「色不異空」の空は、色と区別された、単純な抽象的な空であり、「色即是空」の空は、色との対立を止揚した、複雑な具体的な空である。般若哲学では、言葉の文化発展が十分ではなく、そのどちらをも同じ空という言葉でいい表しているために、弁証法を知らない人たちが迷わされたのである。「（ヘーゲル論理学の）「成」とは、一切の存在を変化発展のかたちの中でとらえるときの概念であり、色即是空の空はヘーゲルの成にあたる」

もつとも弁証法そのものが、『般若心経』の基礎をなしているサンスクリット語で書かれたナーガールジュナ（竜樹）の『中論』に由来するとする観点もまた存在し、問題はイデオロギー＝思想が成立する以前の言語の問題に帰着する。

私は『ドストエフスキーとは何か』の中でレーニンのヘーゲル『大論理学』の読書の―とである『哲学ノート』から、「思考の歴史Ⅱ言語の歴史??」の見出しをもつ、ヘーゲルの文章からの引用を引用していた(61頁)。「思考と言語の関連(中でも中国語とその未発達)、名詞とおよび動詞の形成。ドイツ語ではしばしば一つの言葉が「対立した意味(たんに「異なった」意味だけではなく、対立した意味をも持っている) これは「思考にとって一つの喜び」を与える……」「物理学における力と言う概念と両極性 Polariat(切り離せないように(傍点はヘーゲル)結び付けられている二つの異なったもの)という概念。力から両極性への移りゆきは、「より高い思考関係 Denkerhalmise への移りゆきである」(岩波文庫版レーニン『哲学ノート』上巻 14 および 31 頁)。これに次のレーニンの言葉を加えたい。

「弁証法とは、対立したものがどうして同一であることができ、またどうして同一であるのか――それらは、どんな条件のもとで、多大に転化しあいながら、同一であるのか――なぜ人間の頭脳はこれらの対立を死んだ、硬直したものと見ないで、生きた、条件的な、動的な、互いに転化しあうものと見なければならぬのか、という学説である。ヘーゲルを読みながら……」(同 47 頁)

ドストエフスキーの本質はドヴォイニクの一語にある。数字の二に発するピーナツのようには左右同質対称のものの名称でありつつ、同時にそれが互いに分離した個々それぞれの名称でもあるロシア語である。ドストエフスキーはこれを階級としての小市民の精神に、温順と我意の相克を描くのに使用した。それは第二作の表題となり、戦前は「二重人格」「二重人格者」と訳されてきたが、戦後米川正夫が「分身」と訳した。法華経から借用したのであるが、ドストエフスキーの場合かたちは同じでも内容は相反し対立するのだから必ずしも正確な訳語ではなかった。また作品自体も失敗作であり、以後生涯にわたりこの課題に取り組み、最後の『カラマーゾフの兄弟』において解決に到達した。それが十一篇の中の九「悪魔。イワンの悪夢」に出てくる、どこにでも居そうな風采のあがらぬロシア的ジェントルマンである。その男はイワンに向かって「ぼくはゾシマ長老のことである子には悪いことをしたよ」と言う。ゾシマを信仰の人として美化して書いて来たドストエフスキーその人が、没後悪臭にまみれさせてアレクセイに衝撃をあたえたこと、を言っているのである。か加えてそのジェントルマンⅡ悪魔にたいし、イワンをして「おれ自身の半面だけの、おれの思想と感情のうちでいちばん醜悪で愚劣なものの化身なんだ」と言わしめている。かつてはドヴォイニクと書いたものを、精確にしている。つまりドストエフスキー自身は、ペレヴェルゼフが定義したように、そのような形の二重人Ⅱ芸術家だったのだ。

作品の終結部に横溢するのは革新的なクラーク少年を中心とする若い世代への期待であり、この作品をもって終わるという感情である。鋭敏なドストエフスキーは己の死を予感しており、そのような結末になっている、と私は考えた。そして或る雑誌に『カラ

『マーズの兄弟』に続編はなかった」を書き、それから2011・3・11を迎えることになった。

ワインバーグによって「悪魔の買物」と否定された汚辱に満ちた路線であった。それは技術的に危険だっただけではなく、それに従事する者たちの道義感覚を麻痺させ、腐敗をもたらし、それが他の分野にも拡大したことで、犯罪的だった。そのワインバーグによって着手され、始まり古川和男によってFUIIとして完成され、継承されてきた路線はそれとは異なる一筋の真正にして清らかな路線なのである。それは人類救済の、そのための精神革命を随伴する核エネルギー炉なのである。

被爆者だからといって、また反核運動に熱心だからといって正しい原発認識を持っていたとは限らない。ウラン軽水炉原発を、宣伝されていたように平和目的のためと愚直に信じ込んできて、フクシマ後に自己批判した人は多いのである。私の場合はあなたによって古川学を早くから知っていて、事情は違っていた。

問題は古川氏の側から見る必要があるだろう。氏は原発技術者を志しながら、出発点からウランとプルトニウムを捨てていたが、それは幼馴染にあなたという被爆者がいたためだと私は信じている。氏こそは真にヒロシマ・ナガサキを体現した核エネルギー技術者だった。そして私はあなたに会い、夫婦になっていなければトリウム熔融塩炉に出会うことはなかった。この運命をどう言ったらよいのだろう。原水爆禁止の偉大な運動が存在したのであり、私たちの結びつきはそのなかでの出来事だった。それを改めて確認する出来事が、同じ2019年の8月にあった。

ビキニ被ばくの一年前の1953年、長田弘の『原爆の子』を基にして日教組の募金によって、『日本戦没学生の手記 きけわだつみの声』の監督関川秀雄に作られた映画である。朝鮮戦争下で反米的との理由で一般には上映されず、その後の原水禁運動の発生にもかかわらず、陽の目をみななかった。その一部がレネ&デュラスの『ヒロシマわが愛』に利用されていえわれていただけの幻の映画であった。冷戦に不向きということで排除されてきたトリウム熔融塩炉の受難の場合と同じといえる。その映画『ひろしま』が米国でデジタル化されて上映され、その影響でNHKによっても放映されて、私も初めて全編を観ることができた。

映画の最後で爆心地の原爆ドームに向けて広島市民の大道進が写されたのだが、あたかもそれに促されたかのように、劇中で先に水を求めて川に入り、そのまま水中で倒れて死んでいった女学生たちの群れが、水中から起き上がり列に加わるシーンがあり、その迫力に心打たれた。

そのなかにはあなたの姿もまた在るかのようだった。なにしろあなたは爆風に吹き飛ばされ地面に転落して、一時は気絶していたひとだったから、ね。それから覚めて川に向かい、歩いて渡ったのだ。あなたは先年亡くなったのだが、生き返って今ここにいます。

そのあなたが生き延び生き返ったのは何のためだったろう。1959年8月下旬、ウィーンから帰って東京で別れた私は数日後、あなたに会うべく大分に向かった。トリウム熔融塩原子炉ちゅう初めての広島に立ち寄っての夜行列車の旅だった。

大分駅の到着ホームに見たあなたの細い体は、朝日に輝き喜色にあふれていた。

完

8・27, 2020

後書

序において述べたように、この作品は二〇一八月末には初稿が書き上げられていて、二〇一九年一月に私はその全文を自身のホームページに掲げた。その際、そこには「解説」として物理学者の大槻義彦に文が添えられていた。それから一年半それはそのまま放置されて、私はその増補改作である第二稿をここに記すことになった。その作業中、改作に対応して、「解説」もまた変更されるだろうと思ってきた。

変更というよりは加筆であることの一つは、本文中で『般若心経』に言及する箇所が生じたためで、大槻氏はその『相対性原理の視点』でこの書に触れていることであった。

またいま一つは、台湾総統だった知日家李登輝氏が七月三〇日に亡くなって、その『李登輝から日本に贈る言葉』(2014)が想起されたためだった。氏はそのなかの一編で日本おエネルギー問題について、もっとも短く要約すると、次のように述べているのである。

「指導者としては、市民運動などに付和雷同して「原発は危険だ」とか「脱原発」だとか軽々しく口にすべきでない。それよりも、安全な原子力発電の研究を徹底して行うべきでしょう。日本には、二〇一一年に亡くなった古川和男博士が長年研究を続けてこられた実績があります。私も仲のいいマイクロソフト社社長のビル・ゲイツは、トリウム原発技術開発を行うベンチャー企業に十億ドルを投資して話題となりました。このトリウム原発は小型化できる。小型熔融塩原子炉がつくれる。これをたとえば東京なら都庁の屋上に据えるのです。長い距離を通じて遠隔地に送電するというやり方が間違っているのです。十萬キロワットくらい原発を各自自治体を持つような形がいちばんいい。日本や台湾のようなエネルギー資源のない国は、原発に賛成か反対かという二者択一ではなく、第三の道、すなわちいかにして安全な原発をつくるかという議論をしなくてはなりません。日本の技術をもってすれば、それは十分可能です。その第三の道こそ、日本再生の道です」。(太字は引用者)

今回の増補改作版で、大槻解説文にこの箇所を追加し再び、初稿と並置する形で、すなわち前作を消去せずに一度は掲げたのである。

読者のなかにはこの私の処置について「妙なことを言う」と怪訝に思われる方がおられるはずである。「執筆者が大槻氏である文章にあなたが手を加えるとは、奇怪ですね」と私は問われて当然である。まことに左様であって、実は、先の初稿の解説文は大槻義彦氏の執筆という事になっていくが、そこで引用されている大槻氏の著作からの文をのぞいた全文は、私、長瀬隆が書いたものである。私が大槻氏に身をやつとして書いたと言ってもよい。

私は先行する自作『トリウム原子炉革命』(2014)の場合とは異なつてこの作には解説が必要であり、それは1959年以来の友人である大槻氏に頼る以外にないと考え、しかしその労を省くべく、自分が大槻氏に成ったつもりで解説文を草したのだった。そしてそれを例文として大槻氏に提示し、これに類するものを書いてもらえないだろうか、と問うたのだ。これに対して氏からは「これ以上のものは書けないので、このまま使ってください」という返事をうけた。それでそのままにHP上に放置してきたのである。

しかしながらこの増補改訂稿が完成し、フクシマの十周年にあたる明二〇二一年三月の公刊を目指すにあたり、解説はやはり必要であり、しかしもはや氏に頼むわけにはゆかなかつた。また一方、先の初稿についての虚構の「大槻義彦解説文」を捨てざるのは、折角の氏の好意を台無しにすることもあり、惜しくもあつた。それで章数の増大による番号の変更を除いたその全文を後書としてここに掲げることにした。

大槻氏から格別の意思表示があつたからではない。すでにこれをHP上で読んだ人たちがおり、常識的にいって、これが妥当な処置だと思われるからである。そしてまたこの間の格別な事情をご理解していただくために、先の『トリウム原子炉革命——古川和男・ヒロシマからの出発』についての同氏のブログ上での評を、まず先にご紹介する。

長瀬隆『トリウム原子炉革命』（2014）に寄せて

これは科学書、技術書というより、古川和男という一人の科学者の小説ですね。この小説はすぐれた哲学、世界観に裏打ちされています。ドストエフスキーの小説を読んでいるようです。

「そして1999年に当の和男氏が弟に案内されるようにして、（被爆者である幼馴染の夫人を訪ねて）来客した」。私は所用があったので挨拶ただけで外出している。「もっぱらトリウム熔融塩炉について、ただそれだけについて話し、それ以外では尋ねたことに答えるだけだった」（p15）という。

この部分は古川和男という孤独な技術者の姿をみごとに描いています。科学者によく見られる一徹さを暖かく表現しています。

それに随所に奥様のことが書かれています。このときあなたは「家内は」とも「妻は」とも書かず、「わが妻は」と書いています。お二人を知っている私にとって、この言葉は感動的です。奥様をこよなく愛している、ということがひしひしと分かります。

大槻義彦

解説 大槻義彦（物理学）

長瀬隆の最初の作品は『樺太よ遠く孤独な』という小説であって、日本領であった南樺太（サハリン）の村での幼時の体験から始まっている。露日の混血の年長の友達が、「ヨッポイマツ（ヨッポイマーチの変形）」という言葉遊びせられて激高するのであるが、三歳だった語り手の「私」は、当時はその意味がまったく分からなかった。しかし執筆者である「私」は、それが「汝の母を犯せ」の三語からなる命令形のロシア語の文である、と解説する。そこから転じての卑猥な罵倒の言葉なのである。このことは、長じた「私」がロシア語を学び、それを知ったということの意味している。

一九四五年ソ連の参戦により、南の中心都市大泊（コルサコフ）の中学校二年生になっていた「私」は、明日はソ連軍が町に入るといふ日、市の図書館に行く。露和辞典と、気になる本であったチェーホフの『サガレン紀行』を持ち帰るためだったが、両書はともにすでに持ち出されていた。それで「私」は、もしもこのとき入手していたならば、読んだはずの一連のチェーホフの日露関係史にかかわる文言を読者に紹介する。「サハリン（サガレンのロシア読み）の処女探検の権利は疑いもなく日本人に属し、日本人が最初に南サハリンを領有したのである」を始めとする国際主義的なものである。翌日市は占領され、「私」

は路上でソ連兵から「南樺太の日本住民、スターリンの赤軍に解放さる」という見出しのビラを渡されて衝撃をうける。

二カ月が経過し、小人数で再開された中学校の最初の授業で、物理の教師から「新型爆弾」と報じられていたものの真の名称とともに核爆発の原理を教えられる。マッチ箱大の爆弾により一都市が破壊されたのであり、この結果もはや世界戦争は不可能であり、「君たちの任務は平和で文化的な日本を建設することである」と説かれ、感動する。そして「私」は樺太での敗戦と引揚が生涯の大事業であったことを述べ、それ以上の事件が後の己に有ったかどうかを自問し、有ったとする。それは原爆被爆者の妻との結婚であり、その遠因がこの授業にあったと記した。

「私」の特徴は、ソ連占領下で暮らし、その間に、自分は将来樺太について書く、否、書かねばならない、と思い立ったことである。その目的の実現に最適の学科と信じ、早稲田大学の当時はそこだけにあった露文科に進む。そして一九五七年、日ソ国交回復宣言からまだ一年たつてはいなかった年、発足から三年目の日本原水協にその訪ソ使節団のロシア語要員として起用され、訪ソする。そしてその二年後、ウイーンで行われた世界青年学生平和友好祭というものの団に加わる。百四十人の団に日本被団協の代表として送られてきていた被爆者女性辛島和子と会い、翌年に結婚した。

私、大槻義彦は物理学者であり、「火の玉」の物理学的解明で世に知られることになった者であるが、長瀬よりは五歳年少で、この一九五九年に東大大学院に進学、ウイーン友好祭の報を聞き、これに加わった。その団で長瀬に会い、また後に夫人になった辛島和子さんにも会った。もともと私の目的は友好祭の参加とは別なところにあった。そのことを私は二〇〇八年刊の『大槻教授の最終抗議』で記している。

（シベリア鉄道の列車で）モスクワへ着くなり、私はモスクワ大学に駆け込んだ。なにしろこの日のために大学でロシア語を選択し、五年間も待ち続けたのだ。約束をとっていない強引な訪問だったが、運よく物理学の学生と出会えた。（略）

「この大学にはシャーロバイアー・モロニア（火の玉）の研究をしている人はいますか？」

「ああ、いるよ。今はカピッツァー教授が研究室を開いているし、昔はクルチャトフ先生がやってたな」

あっさりこう言われ、私は自分の耳を疑った。カピッツァー教授といえば、極低温物理学、超流動物理学の研究で世界中に知られた人物である。一方のクルチャトフ教授は、「ソ連の原子力開発の父」と呼ばれた偉大な人だ。その二人が火の玉の研究も行っていたとは！

「カピッツァー先生にぜひ面会したい。それがだめなら、研究室の学生に合わせてもらえないだろうか？」

（七行略）

良かった！ まだ間に合う。火の玉の謎は絶対に私が真っ先に解いてみせる。決意を新たにして、私はウイーンに向かった。ウイーンでも平和友好祭はそっちのけ。私はここでもウイーン大学の学生

や先生に会い、火の玉研究について聞きまくった。さらにそのままウィーン大学に留まる算段をしたのだった。

(後略)

十日間の平和友好祭は終わり、帰国し、翌年早々に長瀬は辛島和子さんと結婚する。長子が生まれるが、重度の心不全で四歳十か月で死没。そのことは自伝的に書こうとして、しかし「多大な努力にもかかわらず、書き上げることができなかった」。そうこうしているうちに七十年代に入って、敗戦・引揚げ絶えて会うことのなかった樺太の故郷の村の小学校の同級生たちとの再会が実現し、それが重なり拡大する。それに対する嫌悪感ゆえに意識的に忘却に委ねられていたヨッポイマツの記憶の甦りがあり、初原のテーマに回帰し、一九八四年に樺太の本の上梓ということになった。しかしそれは夫人が発がんにより、両乳房と左腎臓を切除され、人工透析の生活に入った時期と重なった。これが作用して、一九五九年のウィーン友好祭の物語である『ヒロシマまでの長い道』(一九八六・八九)の執筆が可能となるのであるが、このなかには重要な登場人物として、互いにこのときが初対面だった私、大槻が匿名の物理学院生として登場している。

友好祭の翌六〇年五月の長瀬&辛島さんの東京での披露宴には招かれて私は出席している。しかし専門と活動分野が違っていたために会うことはなく、九十年代になって長瀬から連絡があり、しばらくぶりで会い、語り合うこととなった。火の玉の解明がきっかけとなって、テレビ出演が重なるようになった時期のことで、朝日カルチャーセンターでの講義に長瀬が顔を出してくれたりした。

『ヒロシマまでの長い道』は前作の樺太の物語を受けて、辛島和子さんとの結婚を「ヒロシマへの到着」と規定して書いたものである。しかし彼は樺太から引き上げて一足飛びにそこに到着したのではなかった。進学した早大での学生生活があり、そこでの一人の教授との出会いがあつて生じたものである。戦前は木寺黎二のペンネームでドストエフスキ―とシェストフ関連で業績を残し、雑誌『早稲田文学』では文芸評論家として活躍、しかし戦後は松尾隆の本名に戻り、マルクス主義の唯物論哲学の啓蒙家、平和運動家、学生運動への助言者として活動した人である。一九五六年に四十九歳で没。一九八六年にこの人の三十回忌の集会が行われ、文集『松尾隆』が製作刊行される。長瀬は寄稿しているが、その表題は「松尾隆における分裂と統一というもので、戦前のドストエフスキ―と戦後のマルクス(主義)の間に、執筆者名の異同に対応する亀裂が見られること、しかし教育と発生した原水禁運動への期待で統一されていた、とするものだった。ところが文集の準備の過程で、一連の遺構が発見され、そのなかにはドストエフスキ―関連の大きなものがある。長瀬はその処理に没頭、小説の発表は先送りした。一年を要して遺構がペレヴェルゼフの『ドストエフスキ―の創造』と特定。新たに翻訳し、一九八九年に二つが出版された。

私は父が中国戦線で罹病、そこで戦後に亡くなっている。「火の玉」は「ひかりもの」「人魂」とも言われることがあり、私がそれを見たのは、父の帰還を待ちわびていた時期であって、父の死霊と見なすことも有りえたわけである。しかし私は小学生だったが、迷うことなくそれを物理現象と想定し、二十四年を要して解明した。作家の野坂昭如氏と対談したことがあるが、私は述べているのである。「科学者の中には宗教に入信している人も多い。だけどそのような人であっても、若いころ、科学研究をやって成果を上げた、その時は素晴らしい唯物論者だった。だからこそ成果を上げられたんだ。もしもその若い時の研究段階で、宗教とか霊とかを持ち出していたら、研究成果として見るべきものは出せなかったろう。その成果を出した時点では素晴らしい唯物論者だった。しかし、人間というものは弱いものだから、その後いろいろな過程があって、晩年宗教に肩入れした。ニュートンがそうですけどね」。

この『導く力』に明らかにされているように、長瀬はこの後、樺太の本の発展である『日露領土紛争の根源』（2003）、ペレヴェルゼフ『ドストエフスキーの創造』の邦訳（1998）の発展である自著『ドストエフスキーとは何か』（2008）を公刊する。そして二〇一一年三月一日東日本大震災によるフクシマ原発事故に遭遇する。これが、雑誌に連載され一書を成すに十分な枚数なのだがまだ実現していない早大での恩師の評伝『松尾隆』を含めると、八冊目となる書、『トリウム原子炉革命——古川和男・ヒロシマからの出発』の執筆を結果した。これは以下の経緯によって実現したものだった。

今日では「トリウム熔融塩炉」と呼ぶ方がより適切なこの原子炉は、ウランを装荷するすべての原発とは異なっており、それがトリウムであることによって特徴がある。その日本における発明者は古川和男理博（1928〜2011）である。大分市の生まれ、ごく近所に辛島という家があり、同年生まれの娘がいた。一九四五年十八歳で結婚し、夫の陸軍の經理将校に従って広島に住み、二週間後に被爆、夫とも死別、救出されて大分市に戻る。古川家は戦後程なく京都に移り、彼女は長期にわたり和男氏の話は知らなかった。ところが一九八七年に弟の雅章氏が旧知の和子さんを訪ねて来、長瀬も同席して兄の研究としてトリウム熔融炉の話聞いた。

続いて一九九九年に当の和男氏が弟に案内されるようにして和子さんを訪ねて来たのであって、長瀬は挨拶しただけで外出している。二年後、一般向けでは最初ということになるトリウム熔融塩炉の紹介書『原発「革命」を上梓する。現行のウラン原発を廃止してトリウム原発に代えよ、と主張するものであり、和子夫人は謹呈されていたが、長瀬は手にとってみようとはしなかった。所属する平和事務所（日本原水協の流れをくむ）でチェルノブイリの被ばく者の救援にかかわり、現地にも行って来ていたにもかかわらず、だった。これがフクシマ後、同書の増補改訂版である『原発安全革命』が出て、目覚めたのである。

私、大槻義彦は宮城県の南端、福島県にちかい角田市の出身であり、日本の原発は出発点型誤っていた、と思ってきた。その初期、乞われて委員会に属していた湯川秀樹は、ア

メリカからの直輸入に反対し、原子力の基礎研究の必要を説き、排除されている。このために旧帝大に原子力工学科が設置されたとき、物理学者はこれに加わらなかった。自民党の一部政治家による拙速強引な開始だったのであり、その付けが廻つての事故であると見なしていた。しかし長瀬書に刺激されて古川書をひもとき、古川博士が、また同氏の学兄である米ワインバーグ博士が、事故が避けがたく、またそれが過酷なものになることを予見していただけではなく、その解決策を提示していたことに感銘を受けた。

古川和男はF U J I（不二、富士）が原発にかかわる全問題を解決すると固く信じ、それが受け入れられなかった理由を、「原理的に正しい技術も、人間社会のさまざまな動きの中で、ときに不当な扱いを受けることがある」（前掲書 20 頁）と説明していた。長瀬はこれを『カラマーズフの兄弟』の序文に在る「奇人こそが時によると全体の核心を自らの内部に宿し、逆に同時代の残りの人々が、ある風に吹きまわしによって、ひとり残らずなぜか一時この奇人委背を向ける」場合に相当すると考えた。ドストエフスキーは十字架上で殺害されたキリストを念頭において記したのであるが、古川は肉体的には殺されなかったにしても、社会的には抹殺されていて、長瀬はこれに相当すると考えた。

事情は米ワインバーグ博士の場合ではもっと顕著である。一九四五年五月、すなわち原爆の開発以前にウイグナーが一論文で「（ウランによる）軽水炉で冷却できないと、燃料が破損し、プラント全体が放射能で汚染され、修復はきわめて困難になる」とフクシマを予言していた。これを受けてこの科学者は、地上での公共用発電所ではトリウム熔融塩炉を良しとし、芸術的と評される熔融塩を開発した。しかしプルトニウムを産出しないということ、冷戦派の弾圧を受け、研究を中止せしめられた。この結果ウラン原発（軽水炉）が排他的・独占的に跋扈する存在となった。憂鬱症に陥ったワインバーグは「悪魔の買物」と罵るようになり、オークリッジ研究所所長を解任されている。その後に広島・長崎を訪ね、《最初の核時代》（本邦未訳）を著すが、そこでは過ぎ去った世紀が冷戦によって汚染された邪な時代と概括され、来るべき第二の世紀がトリウム熔融塩炉の時代となるだろうと待望されている。

いずれにせよ文系の人である長瀬が理系とも見なされる、しかし小説的な本を執筆したのであり、私は驚いたが、彼の場合これは若い時代から運命的に用意されていたことでもあった。本書の冒頭、1 章にソ連作家レオーノフ（1899〜1999）の戯曲がスターリン問題との関連で取り上げられているが、この作家がアインシュタインのドストエフスキー愛好に言及していることに注目していたのである。またそのことを『ドストエフスキーとは何か』の結語でも述べていた。それが古川関連書の執筆によって避けられぬ問題となり、「アインシュタインとドストエフスキー」の執筆を構想していることは、彼から直接聞いていた。

しかしながらそれは一九八四年末以来透析生活に入っていた夫人が脊髄の造血能力の劣化により死去する時期と重なっていた。こうして本書においては2 章の末尾で、冒頭から

「あなた」の呼びかけで紹介されていた夫人の死が告げられる。そして続く3章は全編がこの「アインシュタインとドストエフスキー」の掲載となっている。

アインシュタインは唯物論者であり、若いころから「神とは気体上の脊椎動物である」と冗談めかして語っていた。その人がドストエフスキーを評価し愛好したのはなぜか？それには格好の科学史家クズネツォフがソ連にいた。その大冊『アインシュタイン』と小著である『ドストエフスキーとアインシュタイン』は邦訳されていた。しかし前者は大幅に書き直されており、後者はペレヴェルゼフと比較して物足りなかった。ともあれソ連崩壊、およびチェルノブイリ原発事故以後、ロシアに顕著になったロシア正教への回帰、その立場からのドストエフスキー賛美、その日本への浸透、それらを批判克服し、ドストエフスキー自身が言っていた「最高のリアリズム」を明示するために、長瀬は古川関連書の後、自身の「アインシュタインとドストエフスキー」の執筆が必要であると考えた。

その構想を聞いて、共著の提案もしたところのある私なのである。しかし奥さんの死に遭遇して、彼はエッセイ（本書の3章）に留め、和子さんの死を物語ることになる。

夫妻との縁は深く、私は『ヒロシマまでの長い道』の次作である『微笑の沈黙』にも登場しているのである。『子供は理系にせよ』の著者でありつつ、私は文系のこの人とはジャンルを超えた相互理解ができていたのである。物理学（科学）も文学（芸術）も人類の文化である。「文化の歴史が可能なのは、歴史的諸主体を貫き通して定義しうる、何らかの同一の基層の存在が有るからである」というクズネツォフの言葉を長瀬は紹介しているが、私たちの間にはその「同一の基層」が有ると確信される。

続く章では、がらりと調子が違って、私たちが共有する一九五九年のウィーン友好祭関連の出来事が物語られる。祭り終了後に離団してプラハ大に留学した者に小野田勇がいて、その兄なる人物から「私」が、「弟の留学の経緯について知りたい」という問い合わせがあったのである。長瀬がすでに『ヒロシマまでの長い道』に詳細に記してある出来事なのだが、その本を知らず読んでいない人からの、質問であった。これに対して回答の過程で明らかになったことに、モスクワ大留学を目指して出国していたにもかかわらず、それを断念・放棄して帰国し、辛島和子さんと結婚したのである。到着しており、留学していたならば書くことVに到着しなかったことであり、その改めるの確認であった。それが、結婚が英字紙に『Love in Vienna（ウィーンでの愛）』の見出しで報じられたので、それを表題にしたのがこの章である。

ところで私が物理学を目指したのは、小学校五年生の九月、自宅で入浴中に「火の玉」を見たのがきっかけだった。ただしその後絶えて見ることがなく、栃木県那須に観測点をもうけ、その撮影に成功したのは一九八四年である。ただしそれ以前に、良書として版を重ねた『相対性原理の視点』（1991）を上梓している。すなわち物理学全般を勉強してきた者なのであるが、私が広く知られるようになったのは火の玉の再現実験に成功してからである。テレビから出演依頼が重なることになったからだったが、それは

オカルト・ブームが起こった時期と重なった。私としては「火の玉」研究がまじめな科学研究であることを示すためにもオカルトを批判・否定する必要がある、それを継続しているうちに、テレビタレントと擬儀されることにもなった。

私は非科学的な迷信と闘ってきたのだったが、オウム事件では衝撃を受けた。私は「恥を忍んで言えば、オウム事件を契機に、私はようやく科学者として目覚めたのである」と著書に記し、一九九六年早大理工学部に講座「科学とは何か」を開設した。そのような私が二〇一一年三月十一日にどのような衝撃を受けたかは言うまでもないだろう。非常に早くから現行のウラン・プルトニウム路線に反対し、トリウム熔融塩炉を提唱してきたワインバーグおよび古川和男両博士に敬意を表し、私はその事業の後継者諸氏に協力したいと願うものである。すなわちこの書の5章「トリウム熔融塩炉」の主張に賛成である。

東大大学院で先輩であり、私の環境電磁気学とは異なって、より原発に近接する原子物理学者である方に元文部大臣有馬朗人氏がいる。かつて麻原逮捕の日のNHKラジオの生特番で「オウム事件の実行者に物理学科の学生や大学院生までもが含まれていたことで、自分自身も科学者、教育者として非常に恥ずかしい思いをしている。今まで、科学者の中でオウム真理教や様々なオカルトをメディアでたたいて来たのは、ここにいる大槻だけだ。今後は自分たちも大槻に倣ってオカルトを批判し、毅然とした態度をとってゆく」と語ってくれた。その有馬氏が、古川F U J Iを採用したトリウム熔融塩炉を建設中の中国上海に二度にわたり足を運び、支持を表明しているのである。私としては自然な道程である。

古川和男氏は被爆後の辛島和子さんの惨状を見、それがウラン・プルトニウムの拒否とトリウム熔融塩炉の選択およびその固執と持続とに繋がった、と長瀬は想定している。すなわち夫人が古川学の「導く力」だったと見ているのだ。それでは長瀬はどうしてこの女性と結婚することになったのだろう。『ヒロシマまでの長い道』には次の記述がある。

原爆は彼女にとって思い出しはくなく常に忘れたいものであったのであり、それが団に代表として送り出されることになって、話さざるをえなくなった。それでもソ連の停車駅ごとに催される集会でのスピーチは、毎日だったが短く一日に二度以上ということはなかった。

だがウィーンではそういうわけにはゆかず、毎日二度も三度も、長くかつ多く話すことを強いられた。つまり終日それを思い出さねばならぬ日々が一週間以上も続いたのである。「どうしてこんな目に合わねばならないのだろうと思うと、被爆者であることが情けなくて泣いたものだったわ」と後に彼女は良人に語ることになる。しかしそれはウィーンの日々にあっても、彼女とおなじひとつのテントで起居していた女子美大生から彼が聞いていたことだった。エスペランチストの団体から出されてきていた女子学生は彼女を「お姉ちゃん」と呼んで親しんでいたのだったが、毎晩横になってから泣いていると彼に告げ、「何とかしてあげてよ」と困惑していたのである。

一九八六年になって空中に生ずる火の玉の学者として一般にも知られることになった物理学者がいる。(略) 学者は一九五九年の旅では大学院の学生で全学連のグループに属していた。シベリア鉄道ではバ

イカル湖畔で小一時間過ごすサービスがあった。何人かが思い出のために小石を拾って列車に戻ったろう。

「こういう習慣は欧米人にはないんだそうだよ」と何かで読んだことがあって彼が言っただろう。すると未来の火の玉学者が、ウィーンに行ったならばチロルまで足を延ばそうと思っていること、ヨーデルの好きな末の妹にその「小石を拾ってきて」と頼まれたためであると語った。ウィーンの日程が後半に入って、隣り合って起居していた彼は、物理の大学院生がいよいよほんとうにチロルに行こうとしていることを知った。

こうしてウィーンでは早朝に発ち夜汽車で帰った四人の男女よる小さなチロル行が実現したのである。午後には最終日の日本代表団主催の「太平洋を非核化するための沿岸諸国集会」に出席した。冒頭団の象徴だった被爆者女性は挨拶に立ち、私もこれは謹聴している。

すでに故人である妻女を「あなた」と呼び、彼女に借りかけるように自身の著作活動（寡の相違はあってもそのほとんどにこの女性への言及がある）を概括して来たこの『導く力』という作品は、一九五九年八月十日の夕べ、薄暮のウィーン市役所前広場での閉会式の模様を記して閉じられている。黒人歌手がベートーヴェン歡喜の歌を独唱し、その最も近い場所に、和服姿で立つ「あなた」の永遠に輝く姿があったのである。

思えば私もまたそれを見ていたのだった。

プルトニウム 3, (日本の蓄積) 63, 66, 94
「プルトニウム消滅用熔融塩炉の開発」(TTS) 6, 95
『ブント私記』島成郎 79
プロレタリアート 68
平和事務所 34, 55, 81
戸坂村(被爆者収容所、現広島市安佐南区) 10~2, 45~6, 52
『微笑の沈黙』 35, 76
弁証法 109

ま

『松尾隆——戦後を駆け抜けた早大教授』(文集・古在由重ほか、1985) 31
「マルクス主義文芸学の必要な前提」ペレヴェルゼフ、42
ミンスク 35

や

ヤルタ(会談) 40
「唯物論思想に真に帰依している科学者…」アインシュタイン 60
「良いことづくめの原子炉」 95
熔融塩 96

ヨッポイマーチ(ロシア語、罵倒の卑語) 17~9, 45, 78
ヨハネ黙示録のユダヤ秘密表記 6 6 6 (商品と貨幣) 70、108
ヨハネ黙示録 (にがい蓬) 108~9

ら

『労働運動研究』 77
60年反安保闘争 79
ロシア革命(1917) 19, 68
「ロシア文芸批評におけるドストエフスキー」 45
六ヶ所村(青森県) 63

わ

「わが世界像」アインシュタイン 60
『早稲田・1950年・史料と証言』 36~7

『新生命』（ソ連占領下樺太での新聞） 39~40
『サハリン島』チェーホフ 25, 29, 39~40
『襲来』レオーノフ 20~
『襲来』改作版 25~
小市民（=二重人） 69
昭和万葉集 10
『資本論』 69~70, 108
『正法眼蔵』 33
「自由」古川 107~8, (『悪霊』シガリョフの)69
『新生命』（ソ連占領下樺太での新聞） 39~40
「スタヴローギン（の告白）」 53~4, 62, 66
「戦争と天皇制」 73
「戦後わが行動」吉田嘉清 106
全学連 73, (ブンド)83
ソ連の崩壊 63, 68~9, 85
「ソ連は一九八四年まで生き延びるか」 29, 68
相対性理論（特殊と一般） 59

た,

第5福竜丸 14, 105
「第三の道」 89
「第二の核時代」（→『最初の核時代』） 48
「太平洋を非核の海に」 74
地下（室人） 67
チェーホフ没後百年国際学会（2004, メリホヴォ） 41
チェルノブイリ 33~5, 62~3, 67, 106
『中論』ナーガールジュナ（竜樹） 111
調和（アインシュタインの） 64, (ドストエフスキーの)61~2,
『哲学ノート』レーニン 110
統一場の理論（の探求） 64~5
「東大一九会（『文集』） 77, 97
遠淵（とうぶち）村（樺太） 17, 29, 45, 50, 87
「蠅螂（とうろう）の斧」古川 107
ドヴォイニク（二重人、分身） 61, 66, 69, 71, 110
『ドストエフスキーの創造』ペレヴェルゼフ著 42

「ドストエフスキーと革命」（『悪霊』論） 52, 107
『ドストエフスキーとは何か』（2008） 43, 52
『ドストエフスキー広場』 66
『トリウム原子炉革命——古川和男・ヒロシマからの出発』 7, 50, 71, 86
トリウム・テック・ソリューション(→T T S)
トリウム国際フォーラム(→ITMSF)
トリウムフッ化物熔融塩原子炉 MSRE（黒煙減速熱中性子、1965） 3

な

『謎解き「罪と罰」』江川卓 86
ナチス強制収容所（ダッハウ） 47
二重人=芸術家（→ドヴォイニク） 71
『日露領土紛争の根源』（2003） 40
『日本』シーボルト 40, 41(露訳本)
『日本に贈る言葉』李登輝 121

は

バグウォッシュ会議（宣言） 53, (2015 年長崎の)63
『花火』（辛島正道歌集） 9~14
『ハムレット』（この世の間接） 64
バルト三国 35, 39, 55
『般若心経の再発見』林田茂雄 110~1
被団協(日本) 15
『ひと言ひと言がわかる般若心経入門』 109
『ひろしま』（映画、1953） 110
「ヒロシマ哲学」 44
『ヒロシマまでの長い道』 49, 73~4, 76
「ヒロシマとは何か」 80
『ヒロシマわが愛』（映画、1958） 30, 75, 81~2, 110
『ファウスト』 5, (の買物、悪魔との取引)48
フクシマ 55, 65, 8888
古川学（と 60 年安保闘争）80, 95, 109
「古川和男・ヒロシマからの出発」 49
物理学と文学（文化の歴史） 42~3, 54, 59
「プルサーマル」（方式の「トリウム」版） 91

2、事項および作品著作名、またそのなかの中の登場人物名

欧語

「Ecce Homo（この人を見よ）」（アインシュタインについて） 57
 FUJI（トリウム熔融塩炉） 4, 7, 56, 65, 96, 108, 111
 <International Friendship>ワインバーグ 6
 ITMSF（トリウム国際フォーラム） 5, 49, 99, 102
 KGB（ソ連国家保安委員会） 35~6
 TTS（トリウム・テック・ソリューション） 5, 7, 49, 65

あ

『愛人』デュラス 36
 「アインシュタインとドストエフスキー」クズネツォフ 55
 『アインシュタイン 生涯、死、不滅』クズネツォフ（1967、露文）
 安倍内閣（政権） 64, 89
 『悪霊』ドストエフスキー 68~9
 「悪魔。イワンの悪夢」 110
 「悪魔（からの）の買物」 49, 95
 「安全な原発はなぜ潰されたのか」雑誌「正論」2011・6 堤堯 88
 「生きている人」（ドストエフスキーの、→調和） 61, 69, 88
 「意識と意思」（→「調和」） 61, 67
 イワン・カラマーゾフ 63
 ウィーン世界青年学生平和友好祭（1959） 16, 25, 73, 80, 100
 永遠と絶対 18
 『エチカ（倫理学）』スピノザ 72
 大分被団協 15, 86
 オークリッジ研究所 3, 47, 96

か

我意と温順 67~70, 107
 核エネルギー（「原子力」ではなく） 6, 48
 過去推量形（デュラスと賢治） 36
 「仮装人物（人間）」 62

「核エネルギーシステム（原発）」 103
 「樺太のヒロシマの子」（わが遺児） 17, 30, 35, 39, 103
 『樺太よ遠く孤独な』 16, (国際的反響)38,
 『カラマーゾフの兄弟』の序文（奇人の定義） 7, 55
 『カラマーゾフの兄弟』（アインシュタインによる賞賛） 65
 クラートキン少年（『カラマーゾフ』） 65
 「カラマーゾフ万歳！」 68
 「歓喜の歌」 74
 共産主義（コミニズム） 83, 108
 『岐路に立つ原子力』リリエンソール 6, 51, 106
 『空海 善魔の怒り』前田勇一 109
 軽水炉（原発） 3, 54, 101
 『原子力発電の歴史と展望』改訂新装版（2010）豊田正敏 94
 原水協 12, 15, 76
 原水協訪ソ使節団（1957） 15, 35, 60, 78
 『原発安全革命』 47, 56, 88, 99
 『「原発」革命』 39, 90
 『原爆・原発一核絶対否定の理論と運動』池山重朗(2012) 97
 『原発と御用学者』土井淑平 80
 国際学連（IUS） 72~4

さ

『最初の核時代』ワインバーグ 48~9, (「ヒロシマの聖化」) 99~101
 「作家の仕事」レオーノフ 44, 52~4,
 「思考の歴史」（レーニン『哲学ノート』） 109
 実験的リアリズム 61~2
 「社会的要請に応える革新的な原子力技術開発支援事業」（日本経産省） 6, 95
 「生涯を貫く志をー地球救済の道」古川 103
 『正法眼蔵』 33

槌田敦 93~4

堤堯 88,

ドストエフスキー 7, 65, 110

デュラス (マルグリット) 18~9, 30, 36, 81~3, 87

寺田透 33, 66

土井渉平 80

豊田正敏 95~7, 100

な

中曽根康弘 88, 109

は

バフチン 66~7, 70

埴谷雄高 37, 61

林田茂雄 109~10

福富節男 (べ平連、樺太出身) 106

古川和男 3~4, 19, 34(ソ連の反応), 47~9, 52, 54~6, 65, 76, 87, 91,
94, 101~3, 107~8, 110~1

古川雅章 35, 38

ヘーゲル 110

ペレヴェルゼフ 34, 42, 66, 71

ま

松尾隆 (木寺黎二) 12, 26, 77, 51, 84, , 96, 104

マルクス 70

宮沢賢治 36

宮本百合子 12

宮本顯治 15, 33, 96

武藤一羊 88~9

村山富市 49, 54

モーツァルト 63

森田実 79~80, 83

森滝市郎 97

や

安井郁 (家) 75, 104~6

安富渉 92

山口誓子 (俳人、樺太中学校出身)

湯川秀樹 33, 63

行宗一 14~5, 34

吉岡律夫 90, 96(豊田正敏に関連して), 101

吉田嘉清 13~4, 31, 52, 76, 79, 86~7, 103~6

吉本龍明, 33

ら

李登輝 121

廖承志 15

リリエンソール 51, 106

レーニン 58, 68

レオーノフ (レオニード) 20, 25, 26(私との会見), 28, 43
43~4(チェーホフおよびドストエフスキー論) , 53~4

わ

ワインバーグ 6~7, 47~50, 88, 96, 98, 102, 111

渡辺正治 45

渡辺恒雄 38

索引

1、人 名

章名に名前が掲げられている場合は省略してある。たとえば2章における松尾隆、4章におけるドストエフスキー、アインシュタイン、マルクスは省略

あ

アインシュタイン 3, 33, 39, 43~4, 55, 60, (の神) 65, 96

アイゼンハワー 4

アマルリク 29

飯沢和正 91~93

池山重朗 97

ウィグナー 3, 4, 54, 71

江川卓 70~2, 85~7

エピクロス 59

大江健三郎 81~4

岡田嘉子 44

小田切秀雄 36~7, 96

大槻義彦 7, 81

か

辛島和子 15, 30~1, 35~6, 46~9, 50~2(死), 55, 72, 85, 101~2

岸信介 89

木下豊房 42

木下幹康 7, 90, 100~1

木村浩 85~6

クズネツォフ(B.G) 55~9, 61~2

蔵原惟人 25

ゲーテ 4, 49

古在由重 96

小林秀雄 62, 66

近藤堯寛 109

さ

佐野学 38

島成郎 76, 79

シーボルト 19, 40~1

親鸞(松尾隆の) 36

鈴木達治郎 89, 91~2

スピノザ 12, 57, 60, 64, 72

スターリン 19~20, 25, 29 (ゴリ市), 68

ソルジェニツィン 28

た

鶴亀教授 42~3

チャーホフ 25, 29, 39~40